

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第38集

県道蛭川・普濟寺線関係

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

向 田 ・ 権 現 塚 ・ 村 後

1 9 8 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

県道蛭川・普濟寺線関係

埋蔵文化財発掘調査報告

向田・権現塚・村後

1 9 8 4

序

埼玉県における道路網の整備は、県内地域開発の一翼をなう重要な事業であります。

この度、県道蛭川・普濟寺線の建設が計画されましたが、本地域は古くから遺跡の宝庫として知られております。そこで、これら遺跡の保存について、関係各機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむをえず記録保存を行うことになりました。

発掘調査は、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施し、貴重な成果をあげることができました。

本書は、その発掘調査報告書であります。刊行までに多大な御援助、御協力をいただきました埼玉県土木部道路建設課・本庄土木事務所・美里村教育委員会・及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

最後に本書が、教育・学術関係のみならず広く活用されることを念願いたします。

昭和59年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例　　言

- 1 本書は、県道蛭川普濟寺線建設にかかる向田遺跡、権現塚遺跡、村後遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、埼玉県教育委員会が調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が埼玉県から受託し、実施した。なお、発掘調査の組織は2ページに示したとおりである。
- 3 調査は、向田遺跡、権現塚遺跡を、鈴木秀雄、富田和夫が、村後遺跡を、鈴木秀雄、利根川章彦、細田勝が担当し、宮井栄一、桶口誠司の協力があった。前者を昭和55年5月1日から同年8月31日まで、後者を昭和56年10月1日から57年12月27に亘って実施した。
- 4 遺跡原点BM—1(村後遺跡)は座標第K系から求め、X座標+22,887,000 Y座標-58,320,000で、海拔高度63,861mを計る。挿図内の方位記号は全て座標北である。

向田遺跡BM(F—22区)は座標第K系から求め X座標+22915.491、Y座標-57656.61を測る。
- 5 出土品の整理および図の作成は主に細田、宮田があたり、利根川章彦の協力があった。
- 6 本書の執筆は細田、富田、利根川があたり、文末に各分担を示した。

尚遺跡周辺の地形的環境については東京大学院 平井幸弘氏 の玉稿を頂いた。
- 7 挿図の縮尺は、遺構図1/60、遺構微細図1/30、土器実測図1/4、石器実測図1/3、土製品、石製品、鉄器1/2を原則とした。分布図は、弥生式土師器●、土器■、須恵器○、を示し、各ポイント両側50cmづつ、計1m幅で示した。
- 8 本書の編集は、調査研究部第5課職員があたり、横川好富が監修した。
- 9 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を得た。

浅野晴欄、今井 宏、岡本幸男、小川良祐、金子直行、書上元博
小出紳夫、酒井誠二、鈴木徳雄、谷井 鮎、立石盛詞、田部井 功
中島 宏、吉川國男、坂野和信

目 次

序

例 言

I 発掘調査の概要

- | | |
|----------------------|---|
| 1 発掘調査に至るまでの経過 | 1 |
| 2 発掘調査の経過 | 3 |

II 向田・権現塚・村後遺跡をとりまく地理的環境

- | | |
|-------------------------|----|
| 1 遺跡の位置と周辺地域の概要 | 5 |
| 2 地形分類からみた遺跡の地形環境 | 6 |
| 3 村後遺跡の立地と埋没について | 7 |
| 4 まとめ | 10 |

III 向田・権現塚・村後遺跡周辺の歴史的環境

13

IV 向田・権現塚遺跡の発掘調査

- | | |
|---------------------|----|
| 1 遺跡の概要と調査の方法 | 15 |
| 2 向田遺跡遺構と出土遺物 | |
| (1) 住居跡と出土遺物 | 17 |
| (2) 溝 跡 | 28 |
| (3) 土壙墓と出土遺物 | 30 |
| 3 権現塚遺跡 | 32 |

V 村後遺跡の発掘調査

- | | |
|---------------------|----|
| 1 遺跡の概観と調査の方法 | 33 |
|---------------------|----|

2 遺構と出土遺物	
(1) 住居跡と出土遺物	36
(2) 方形周溝墓と出土遺物	138
(3) 掘立柱建物跡	142
(4) 土器棄場と出土遺物	152
(5) 水田状遺構	165
(6) 溝と出土遺物	166
(7) 近世溝状遺構	169
(8) 第15号溝出土遺物	174
(9) 井戸跡	179
(10) 壓穴状遺構	180
(11) 土器焼成遺構	181
(12) 土 壤	183
3 グリット出土遺物	
(1) 土 器	186
(2) 石 器	190
(3) 土製品 石製品	198
VI 結 語	201
VII 附 編	
1 村後遺跡出土土器の胎土分析結果報告	211
2 花粉分析 珪藻分析 樹種鑑定 鉱物分析 プラントオバール分析 C ¹⁴ 年代報告	
1) 花粉分杯	223
2) 珪藻分析	225
3) 樹種鑑定	230
4) 鉱物分析	231
5) プラントオバール分析	232
6) C14年代測定報告	236

挿 図 目 次

第1図	埼玉県北西部の地形分類図	5	第32図	第2号住居跡遺物分布図	42
第2図	村後遺跡周辺の地形分類図	7	第33図	第2号住居跡	43
第3図	遺跡中央部平面図		第34図	第2号住居跡出土遺物	44
	谷部土層堆積図	9	第35図	第3号住居跡遺物分布図	46
第4図	向田、村後周辺遺物分布図	12	第36図	第3号住居跡	47
第5図	向田遺跡調査区域図	15	第37図	第3号住居跡出土遺物	48
第6図	標準土層	16	第38図	第4号住居跡出土遺物	48
第7図	向田遺跡全測図(折込み)		第39図	第4号住居跡	49
第8図	第1号住居跡	17	第40図	第5号住居跡	50
第9図	第1号住居跡出土遺物	17	第41図	第5号住居跡出土遺物	51
第10図	第2号住居跡	18	第42図	第6・7号住居跡遺物 分布図	53
第11図	第2号住居跡出土遺物	18	第43図	第6・7号住居跡	54
第12図	第3・9号住居跡	19	第44図	第7号住居跡カマド	55
第13図	第3・9号住居跡出土遺物	20	第45図	第6・7号住居跡出土遺物	56
第14図	第4号住居跡	21	第46図	第8・9・10号住居跡遺物 分布図	58
第15図	第4号住居跡出土遺物	21	第47図	第8・9・10号住居跡	59
第16図	第5号住居跡	22	第48図	第8号住居跡カマド	60
第17図	第5号住居跡出土遺物	23	第49図	第9・10号住居跡カマド	61
第18図	第6・7号住居跡	24	第50図	第8・9・10号住居跡 出土遺物	62
第19図	第6号住居跡出土遺物	25	第51図	住居跡出土鉄器・土製品	64
第20図	第7号住居跡	27	第52図	第11号住居跡遺物分布図	65
第21図	第8号住居跡	28	第53図	第11号住居跡・1号溝状 遺構	66
第22図	溝跡	29	第54図	第11号住居跡出土遺物	67
第23図	1号土壤墓	30	第55図	第12号住居跡遺物分布図	68
第24図	1号土壤墓出土遺物	31	第56図	第12号住居跡	69
第25図	権現塚遺跡第1号土壤	32	第57図	第12号住居跡出土遺物	70
第26図	村後遺跡位置図	34	第58図	第12号住居跡カマド	71
第27図	基本土層	35	第59図	第13号住居跡	72
第28図	第1号住居跡遺物分布図	36			
第29図	第1号住居跡	37			
第30図	第1号住居跡出土遺物	38			
第31図	第1号住居跡出土遺物	39			

第60図	第14号住居跡遺物分布図	73	第89図	第22号住居跡出土遺物	105
第61図	第14号住居跡	74	第90図	第23号住居跡平面図	
第62図	第14号住居跡カマド	75		遺物分布図	106
第63図	第14号住居跡出土遺物	76	第91図	第23号住居跡出土遺物	107
第64図	第14号住居跡出土遺物	77	第92図	第23号住居跡出土遺物	108
第65図	第15号住居跡	79	第93図	第23号住居跡出土遺物	111
第66図	第16号住居跡	80	第94図	第24号住居跡出土遺物	112
第67図	第16号住居跡出土遺物	80	第95図	第24号住居跡出土遺物	113
第68図	第17号住居跡出土遺物	81	第96図	第25号住居跡	115
第69図	第17号住居跡	82	第97図	第26号住居跡遺物分布図	116
第70図	第18号住居跡遺物布図	83	第98図	第26号住居跡	117
第71図	第18号住居跡	84	第99図	第26号住居跡出土遺物	118
第72図	第18号住居跡カマド	85	第100図	第27号住居跡遺物分布図	119
第73図	第18号住居跡出土遺物	86	第101図	第27号住居跡出土遺物	120
第74図	第18号住居跡出土物	87	第102図	第27号住居跡出(折込み)	
第75図	第19号住居跡	89	第103図	第27号住居跡出土遺物	121
第76図	第20号住居跡遺物分布図	90	第104図	第28号住居跡遺物分布図	123
第77図	第20号住居跡	91	第105図	第28号住居跡	124
第78図	第20号住居跡出土遺物	93	第106図	第28号住居跡出土遺物	126
第79図	第21号住居跡遺物分布図	94	第107図	第29号住居跡	127
第80図	第21号住居跡	95	第108図	第30号住居跡	128
第81図	第21号住居跡出土遺物	96	第109図	第31号住居跡遺物分布図	129
第82号	第21号住居跡出土遺物 (拓影)	97	第110図	第31号住居跡	130
第83図	第21号住居跡出土遺物 (拓影)	98	第111図	第31号住居跡出土遺物	131
第84図	第20号住居跡出土石器	100	第112図	第32号住居跡遺物分布図	132
第85図	第20・21号住居跡出土石器	101	第113図	第32号住居跡	133
第86図	第21号住居跡出土石器	102	第114図	第32号住居跡出土遺物	134
第87図	第21号住居跡出土石器	103	第115図	第32号住居跡出土遺物	135
第88図	第22号住居跡平面図 遺物分布図	104	第116図	第32号住居跡出土遺物	136
			第117図	方形周溝墓	139
			第118図	方形周溝墓出土遺物	140
			第119図	方形周溝墓出土遺物	141
			第120図	第1号掘立柱建物跡	143

第121図 第2号掘立柱建物跡	144	第152図 グリット出土土器	187
第122図 第3号掘立柱建物跡	145	第153図 グリット出土土器	188
第123図 第4号掘立柱建物跡	146	第154図 グリット出土土器(拓影)	190
第124図 第5・6・7号掘立柱 建物跡(折込み)		第155図 グリット出土土器(拓影)	191
第125図 第8号掘立柱建物跡	148	第156図 グリット出土土器(拓影)	192
第126図 第9号掘立柱建物跡	149	第157図 グリット出土石器	193
第127図 第10号掘立柱建物跡	150	第158図 グリット出土石器	194
第128図 第11・12号掘立柱建物跡	151	第159図 グリット出土石器	195
第129図 第13号掘立柱建物跡	152	第160図 グリット出土土製品 石製品	197
第130図 土器棄場・遺物出土状態	153	第161図 土器分類図	204
第131図 土器棄場出土遺物	154	附図1 第1・2区全測図	
第132図 土器棄場出土遺物	155	附図2 第3区全測図	
第133図 土器棄場出土遺物	156	附図3 第4区全測図	
第134図 土器棄場出土遺物	157	附図4 第5区全測図	
第135図 土器棄場出土遺物	158	附図5 第6区全測図	
第136図 土器棄場出土遺物	159	附篇挿図目次	
第137図 水田状遺構	164	第1・2図 村後遺跡三角・菱形 ダイヤグラム	214
第138図 水田状遺構覆土出土遺物	165	第3・4図 村後遺跡Mo-Mi-Ho, Mo-Ch、Mr-Hb三角・菱形 ダイヤグラム	215
第139図 第11・12・13・14・15号溝	167	第5図 QT—P L相関図	217
第140図 第2・3・4・5・6号溝 近世溝状遺構(折込み)		第6図 Mur-12、15、16	221
第141図 溝土層断面図	170	第7図 Mur-20、23、26	222
第142図 溝土層断面図	171	第8図 試料採取土層図	223
第143図 溝出土遺物	172	第9図 村後遺跡試料花粉(A) 珪藻(B)ダイヤグラム	228
第144図 溝出土遺物	173	第10図 村後遺跡A地点(タ-24-a) 試料鑑定分析結果	233
第145図 第15号溝出土遺物	174	第11図 村後遺跡主要プラント オパールダイヤグラム	235
第146図 井戸跡	179		
第147図 井戸跡出土遺物	179		
第148図 壑穴状遺構	180		
第149図 土器焼成遺構	181		
第150図 土壌	182		
第151図 土壌	184		

写 真 図 版 目 次

- 図版1(上) 向田遺跡全景
(下) 第1号住居跡
- 図版2(上) 第2号住居跡
(下) 第3・9号住居跡
- 図版3(上) 第4号住居跡
(下) 第4号住居跡遺物出土状況
- 図版4(上) 第4号住居跡
(下) 第4号住居跡遺物出土状況
- 図版5(上) 第4号住居跡遺物出土状況
(下) 第6号住居跡遺物出土状況
- 図版6(上) 第6号住居跡遺物出土状況
(下) 第6・7号住居跡
- 図版7(上) 第8号住居跡
(下) 溝跡
- 図版8(上) 第1号土壤墓
(下) 第1号土壤墓遺物出土状況
- 図版9(上) 権現塚遺跡全景
(下) 第1号土壤
- 図版10(上) 第1号住居跡
(下) 第1号住居跡貯蔵穴半截
状況
- 図版11(上) 第1号住居跡カマド半截
状況
(下) 第3号住居跡
- 図版12(上) 第4号住居跡
(下) 第5号住居跡
- 図版13(上) 第5号住居跡カマド
(下) 第6・7号住居跡
- 図版14(上) 第7号住居跡カマド
(下) 第8・9・10号住居跡
- 図版15(上) 第8・9号住居跡
(下) 第9・10号住居跡
- 図版16(上) 第11号住居跡・溝状遺構
(下) 第12号住居跡
- 図版17(上) 第12号住居跡カマド
(下) 第13号住居跡
- 図版18(上) 第14号住居跡遺物出土状況
(下) 第14号住居跡
- 図版19(上) 第14号住居跡カマド
(下) 第15号住居跡
- 図版20(上) 第16号住居跡
(下) 第17号住居跡
- 図版21(上) 第18号住居跡(西側より)
(下) 第18号住居跡(東側より)
- 図版22(上) 第20号住居跡遺物出土状況
(下) 第20号住居跡
- 図版23(上) 第21号住居跡
(下) 第21号住居跡・第23号溝切
り合い部遺物出土状況
- 図版24(上) 第22号住居跡遺物出土状況
(下) 第23号住居跡遺物出土状況
- 図版25(上) 第23号住居跡
(下) 第24号住居跡遺物出土状況
- 図版26(上) 第24号住居跡
(下) 第25号住居跡
- 図版27(上) 第26号住居跡遺物出土状況
(下) 第26号住居跡(掘り方)
- 図版28(上) 第27号住居跡遺物出土状況
(下) 第27号住居跡(掘り方)
- 図版29(上) 第28号住居跡
(下) 第28号住居跡(掘り方)

図版30(上)	第29号住居跡	墓出土土器
(下)	第30号住居跡	図版46 村後第1号住居跡出土土器
図版31(上)	第31号住居跡遺物出土状況	図版47 第1号住居跡出土土器
(下)	第31号住居跡(掘り方)	図版48 第2号住居跡出土土器
図版32(上)	第32号住居跡遺物出土状況 (北側より)	図版50 第8、9、10、14号住居跡出土土器
(下)	第32号住居跡遺物出土状況 (東側より)	図版51 第14号住居跡出土土器
図版33(上)	第32号住居跡	図版52 第14、15、16、17、18号住居跡出土土器
(下)	第32号住居跡(掘り方)	図版53 第18、20号住居跡出土土器
図版34(上)	方形周溝墓(西側より)	図版54 第21、23、24号住居跡出土土器
(下)	方形周溝墓(東側より)	図版55 第23号住居跡出土土器
図版35(上)	周溝内遺物出土状況	図版56 第26、27号住居跡出土土器
(下)	周溝内遺物出土状況	図版57 第27号住居跡出土土器
図版36(上)	第3号掘立柱建物跡	図版58 第28号住居跡出土土器
(下)	第9号掘立柱建物跡	図版59 第31、32号住居跡出土土器
図版37(上)	第2、3、4、5号溝	図版60 第32号住居跡出土土器
(下)	第11、12、13、14号溝	図版61 方形周溝墓、土器棄場出土土器
図版38(上)	第11、12、13、15号溝	図版62 土器棄場出土土器
(下)	第15号溝遺物出土状況	図版63 土器棄場出土土器
図版39(上)	第8、9、10号溝	図版64 第2・4・5・15号溝出土土器
(下)	第30、31、32号溝	図版65 グリット出土土器
図版40(上)	水田状遺構	図版66(上) 第20号住居跡出土土器
(下)	水田状遺構及び足跡	(下) 第21号住居跡出土土器
図版41(上)	第3区谷(北側より)	図版67(上) 第21号住居跡出土土器
(下)	第3区谷土層堆積状況	(下) 第21号住居跡出土土器
図版42(上)	第3区谷遺物出土状況	図版68(上) 第21号住居跡出土土器
(下)	井戸跡遺物出土状況	(下) 第21号住居跡出土遺物
図版43(上)	井戸跡	図版69(上) 第20号住居跡出土土器
(下)	土器焼成遺構	石器
図版44	向田1、3、4、5、6号 住居跡出土土器	(下) 第20、21号住居跡出土鉄器
図版45	向田6、7号住居跡、土壤	図版70(上) 第21号住居跡出土石器
		(下) 第21号住居跡出土石器

図版71(上) グリット出土石製品

(下) 第5、8~10号住居跡出土
鉄器

図版72(上) グリット出土土器

(下) グリット出土土器

図版73(上) グリット出土土器
(下) 第15号溝出土陶器

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

県道蛭川普濟線は、児玉町蛭川を基点に美里村の北端部を横断し、岡部町普濟寺までの延長約10kmに及ぶ一般道路である。当該県道は、美里村地区内で既存の集落内を通過するための道路幅員が狭く交通安全性の確保等一般的の利用に不便であった。このため県土木部道路建設課では集落の北側にバイパス建設を計画した。

昭和54年8月、県土木部道路建設課長から、昭和54年8月5日付け道建第672号をもって「道路改築事業地における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会がされた。

県教育局文化財保護課では、遺跡地図と照合したのち、現地調査を行い遺跡所在の確認と取扱いについて検討した。そして、昭和54年8月28日付ける教文第585号をもって、県土木部道路建設課長あておよそ次のとおり回答した。

- 建設予定地内には美里№47遺跡が所在し、これはできるだけ現状保存することが望ましい。
- 工事の計画上やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施することとして、教育局文化財保護課では、国・公団・公社・県と埋蔵文化財との調整を図るために毎年「文化財と公共事業の調整会議」を開催しているが、この席で上記計画について県土木部道路建設課との間で協議が行われ、当該事業の計画変更は不可能ということであるので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになり、改めて発掘調査の実施について協議に入った。

文化財保護課では調査機関等について打合せをしてきたが、昭和55年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、国・県・公社・公団等の公共事に伴う発掘調査については事業団において実施することになった。

以後、事業団を含め数度の協議が重ねられた。その内容は1調査期間、2調査機関、3調査範囲4調査経費についてであり、またこの過程で事業地内に新たな埋蔵文化財包蔵地の所在が確認されこれについても從前からの協議に沿った取扱いが検討された。これより今回の調査は事業団が実施することになり、埼玉県は事業団と事業委託契約を締結し、法的諸手続きを済ませた後、昭和55年5月から発掘調査が開始された。

文化庁からは委保第5の2075号によって文化財保護法第57条第一項に基づく埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

No	遺跡名	所 在 地	時 代	種 別	備 考
美里村№1	向 田	美里村大字小茂田字向田841 他	古墳・平安	集 落 跡	本報告書
№2	村 後	〃 大字下児玉字村後1199他	古墳、奈良	集 落 跡 周溝帯、水田跡	〃

(鈴木 秀雄)

発掘調査の組織

1 発 捜

主 体 者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	関根 秋夫 (55)
			長井 五郎 (56~57)
		副理事長	本郷 春治 (55)
			沼尻 和也 (56)
			岩上 進 (57)
		常務理事	渡辺 澄夫 (55~57)
庶 務 經 理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	伊藤 悅光 (55~56)
			佐野 長二 (57~)
			関野 栄一
			江田 和美 (57~)
			福田 啓子 (57~)
			福田 浩
			本庄 朗人
發 捜	(財)埼玉県埋蔵文化調査事業団	調査研究部長	横川 好富
		調査研究第3課長	谷井 耘 (56~57)
			鈴木 秀雄 (55~56)
			利根川幸彦 (57)
			富田 和夫 (55)
			細田 勝 (56~57)

2 整 理

主 体 者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長井 五郎
		副理事長	岩上 進
		常務理事	石川 正美
庶 務 經 理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野 長二
			関野 栄一 江田 和美
			福田 啓子 福田 浩
			本庄 朗人
整 理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川 好富
		調査研究副部長(兼)調査研究第5課長	小川 良祐
			富田 和夫 細田 勝

2 発掘調査の経過

向田権現塚遺跡の調査は、昭和55年5月1日から同年8月31日までの3ヶ月間にわたって行なわれた。4月末までに器材の搬入を終了し、全ての調査準備をととのえ、5月1日から調査区域内の表土除去作業を開始し、向田遺跡の調査が開始された。

調査区域内の表土除去作業は重機を用い、東から西側に向かって行ない、中旬から作業を実施した。遺跡の地山である黄褐色粘土質土上面で遺構確認を行ったところ、遺構は微高地東側縁辺部に集中して確認された。第6号住居跡は遺物が最も多く検出された。第2号住居跡は、土壤墓と重複していることが明らかとなり、慎重に調査を行った。

権現塚遺跡は表土除去後、遺構確認を行ったが、遺構は土壤一基が確認されたのみであった。8月末日、プレハブを撤収し、全ての調査を終了した。

期間 遺構	5月	6月	7月	8月
1 住	—			
2 住		—		
3, 9住		—		
4 住		—		
5 住		—		
6, 7住			—	
8 住			—	
溝			—	
権現塚				—

村後遺跡は昭和56年10月1日より昭和57年12月27日まで約1年3ヶ月にわたって調査が実施された。9月末までに器材の搬入を終了し、10月1日より、調査区域内の表土除去作業が行なわれた。表土除去は第2調査区より遺構確認と平行して行なわれたが、地山が粘質土のため、遺構確認は困難であった。その結果、4軒の住居跡と溝、建物跡が検出されたが、第1、2号住居跡は概に床面が露呈していた。調査は堅い粘質土のため、め思うように進まず、第2調査区のみで既に5ヶ月を費やした。

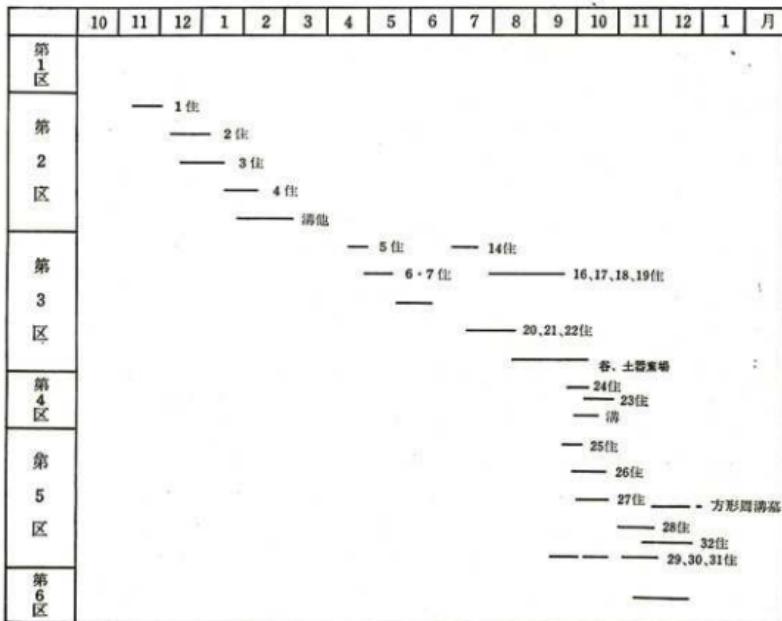
第3調査区は昭和57年4月10日より調査が開始された。前回同様、表土除去、遺構確認を併行して行った。土棄場の充分な確保ができず、廃土は未掘区、調査終了区へ移動しながら行った。第3

調査区は遺構が集中し、重複住居跡も多く、一部は農道下かかっていたため、迂回路をつくり調査を進めた。その結果第5～第22号住居跡、溝、建物跡、土壙等が検出された。弥生中期の20～22号住居跡周辺を精査したところ、埋没した旧地形が検出された。第3調査区は夏季に台風による大雨で二度水没しており、この区域で6ヶ月を費すこととなった。

第4調査区は9月～10月まで調査が行なわれた。遺構確認は東、西に分けて行なわれ、2軒の住居跡と溝が検出された。旧地形の検出も併せて行なわれた。

第5調査区は第4調査区西側と併行して調査が実施された。遺構は第3、4調査区に比べ、確認面が比較的浅く、比較的確認しやすかった。遺構確認は東側から行なわれたが、第5調査区は五個期を中心とした比較的短期間に営まれた住居群と思われ、精査したところ、8軒の住居跡と方形周溝墓が検出された。第5調査区は12月いっぱいまで調査が行なわれ、11月より併行して第6調査区の調査が実施された。第6調査区は東側にゆるく傾斜を示し、肩部で土壙一基が確認されたのみであった。

昭和57年12月20日までに全ての調査を終了し、3月25日、遺跡全体の航空写真を撮影して、同年12月25日、現場における調査を全て終了した。



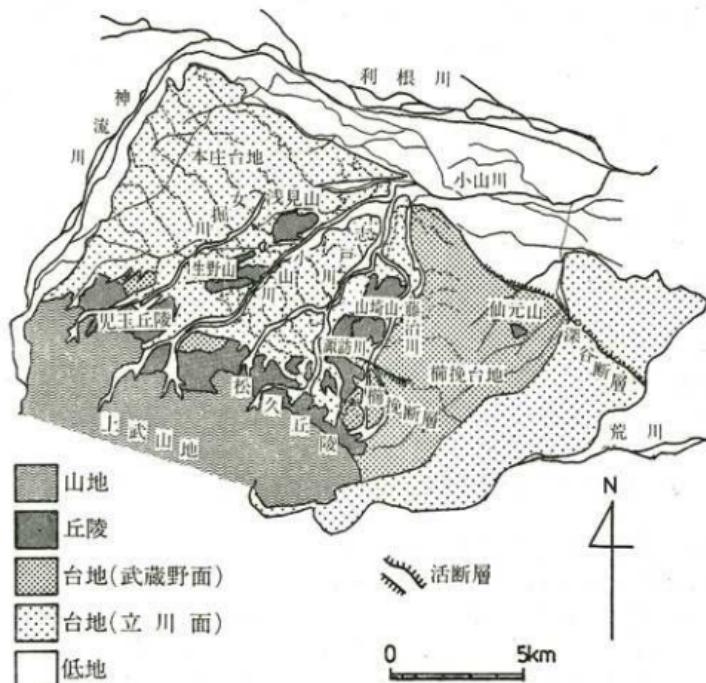
II 向田・権現塚・村後遺跡をとりまく地理的環境

1 遺跡の位置と周辺地域の概観

本遺跡は、埼玉県北西部の児玉郡美里村大字下児玉字村後、国鉄高崎線本庄駅南約3kmの所（東経 $139^{\circ}11'$ 、北緯 $36^{\circ}12'$ ）に位置する。発掘調査地点は、小山川右岸側の上越新幹線と関越自動車道にはさまれた川沿いの桑畠地帯である。

本遺跡が位置する埼玉県北西部の地形を概観すると、この地域は関東平野の北西縁部にあたり、山地が平野に移り変る地形の境いとなっている。南西より北東側へ、順に山地、丘陵、台地、低地が配列し、高度が低くなるとともに地表の傾斜や起伏もゆるやかになっている（第1図）。

山地は上武山地と呼ばれ（村本、1975）、城峯山（1037.7m）、不動山（549.2m）、陣見山（530.9m）鐘撞堂山（330.2m）を連ねる分水嶺によって、南側の荒川流域と、北側の神流川・小山川流域に分



かれる。上武山地の北東山麓には、標高120～140mの児玉丘陵・松久丘陵が低地の方へ向って岬状に張り出している。また、これら山麓の丘陵の北東側、さらに低地寄りの所には、それぞれ生野山(139m)・浅見山(110m)、諏訪山(110m)・山崎山(117m)と呼ばれる標高100～130mの残丘状の丘陵が台地面の中に残されている。

山麓の丘陵と低地との間は、標高50～110m、平均勾配約1000分の5程度のゆるやかな扇状地性の台地となっている。この台地は、諏訪山・山崎山の東側を流れる藤治川を境にして、西側は本庄台地、東側は櫛挽台地と称されている(村本、1975: 堀口、1980)。本庄台地の生野山・浅見山より北側の地域は、等高線の形態からみると、主に神流川によって形成された扇状地で、南側は小山川・志戸川・藤治川等の諸河川によって形成された合流扇状地と考えられる。北部の台地面は、標高110m付近を扇頂として等高線が比較的めらかに同心円状に走っている。これに対し、南部では等高線が小山川・志戸川・藤治川の川筋のところで屈曲し、台地面がこれらの河川によって開析されていることがわかる。櫛挽台地は主に荒川によって形成された扇状地で、形成時代の違いから、より古い櫛挽面(武藏野期)と新しい寄居面(立川期)の2面に分けられている(堀口、1974、1980)。本庄台地の形成時期は、櫛挽台地の寄居面と同じ立川期と考えられている。

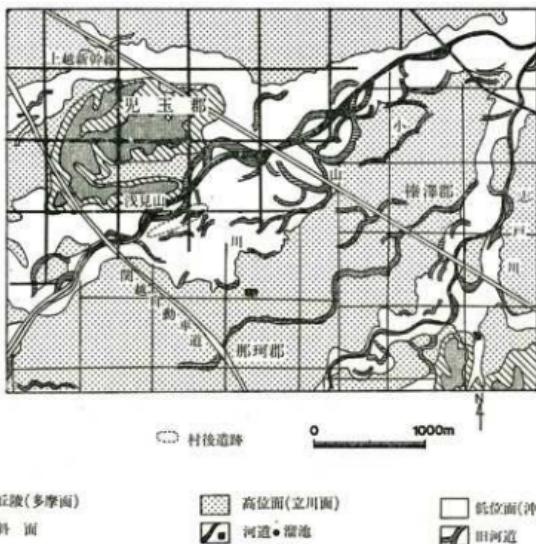
本庄台地、櫛挽台地の前面にひろがる低地は、妻沼低地と呼ばれる(村本、1975)。両台地と妻沼低地との境は、比高数m～最大約10mの段丘崖となっている。この付近の妻沼低地は、標高約40～50mで、主に利根川によってつくられたものである。地表面には、比高約1m前後の微高地や網状を呈した旧河道が数多く認められる。この地域における低地の微高地は、もっと下流の加須低地や中低川地に分布するいわゆる自然堤防とは違って、網状流路における旧中洲と考えられている(中山ほか、1979)。

櫛挽台地北東部の深谷付近と、上武山地山麓の丘陵と残丘状丘陵との間には、それぞれ深谷断層・櫛挽断層の2本の活断層の存在が報告されている(松田、1974: 松田ほか、1975)。深谷断層は、熊谷市三ヶ尻から深谷本町の東方を通り岡部付近まで連続する延長約10kmの断層で、断層崖の一般走向はN-45°-W、北東落で、崖の比高は最大約10mである(松田ほか、1977)。また、櫛挽断層は諏訪山の南側で明瞭に認められるが、松田ほか(1977)によると、深谷市下郷から藤岡市西平井の西方まで延長約23kmの断層で、一般走向はN-70°-W、南西落で、垂直変位量は台地上で最大約3mである。

2 地形分類からみた遺跡の地形環境

本遺跡が位置する本庄台地南部は、先にも述べたように、現在は小山川・志戸川・藤治川によってかなり開析されている。遺跡をとりまく現在および過去の地形環境を明らかにするためには、より細かく地形を観察し、その配置性格などを系統的に理解することが必要である。そこで、本遺跡を中心、空中写真判読と一部現地調査によって地形分類を行った(第2図)

この付近は、大きく本庄台地として一括されているが、詳細にみると現河道沿いの相対的に低い地域と、そこよりやや高く、場所によっては比高約3mの段丘崖で接している相対的に高い地域と



第2図 村後遺跡周辺の地形分類図

に分けられる。前者（低位面）は、後者が河川によって開拓されてつくられた沖積面で、後者（高位面）は、掘口（1980）の立川面に相当する。

高位面は現在圃場整備が完了し、それ以前の地形はよくわからないが、1964年撮影の空中写真では、高位面上を南西から北東へ向う小山川あるいは志戸川の旧流路が幾筋か認められる。小茂田の集落東側の比高約2.5mの崖で、高位面の堆積物が見られる。厚さ約50cmの耕作土の下は、厚さ約1mの植物遺体を含む橙色斑入り黄灰色凝灰質シルトとなっている。これは大宮台地などで見られる風成火山灰（いわゆる関東ローム層）とは層相が異なる。ローム層堆積後にも、流水の影響を受けるような環境にあったことが推定される。また、志戸川と八高線の交差する地点より約500m下流の赤尾付近では、現地表面下約1.2~1.5mに赤褐色の凝灰質シルト層が認められる。これは、志戸川の氾濫積物の下に埋没したローム層と思われる。これらの観察から、本庄台地の立川面形成後にも小山川・志戸川の氾濫が台地面上に及んだと考えられる。

低位面上には、多くの蛇行した旧河道が複雑に残されている。そのうち最も明瞭なものは、小山川の現河道に沿って蛇行しているものである。これは、陸軍陸地測量部作成の迅速図（1888年）や1947年撮影の空中写真では、小山川の河道となっているところである。その他の旧河道は断片的で、いつの時代のものかはわからない。低位面上の旧河道と旧河道の間は、旧河道との比高約1~2mの微高地となっている。その表層地質は、黄褐灰色の小砾混りのシルト～細砂で、主に柔軟として

利用されている。これらの微高地は、妻沼低地のそれらと同じように、網状流路における旧中洲と考えられる。

小山川沿いの低位面は浅見山の東側で幅が広がり、志戸川との合流点付近では幅が狭まる。志戸川でも、小山川との合流点付近より約2km上流の山崎山北側で、低位面の幅が広くなっている。一般的には、現河道に沿う冲積面は下流にいくに従って広くなるが、ここでは途中で広がっているのが特徴である。また、この付近では、低位面と高位面との境の段丘崖の平面形は直線ではなく、蛇行した小さな円弧の連続した形となっている。これは、河川の側岸作用が卓越していることを示唆する。これらの低位面の特徴は、深谷断層と拗巻断層による扇状地の変位にともなって、河川が影響をうけたためと考えられる。

村後遺跡は、こうした特徴をもつ下位面の標高62~64m、現小山川の河道から約200~300m南側の桑畠の中に位置する(第2図)。遺物・遺構は、厚さ約0.5~1mの表土の下に埋没していた。地形分類図からは、村後遺跡が位置する所は、近い過去において河道が安定せずしばしば洪水氾濫を受けるような地形環境であったことが推定される。しかし、遺跡の立地当時も同じような状況にあったのだろうか。それについては、次節で考察する。

3 村後遺跡の立地と埋没について

本遺跡では、検出された遺物・遺構の時代の違いと、遺構の基盤となっている地形の違いから、遺跡の性格を大きく東部、中央部、西部の3つの部分に分けて考えることができる。

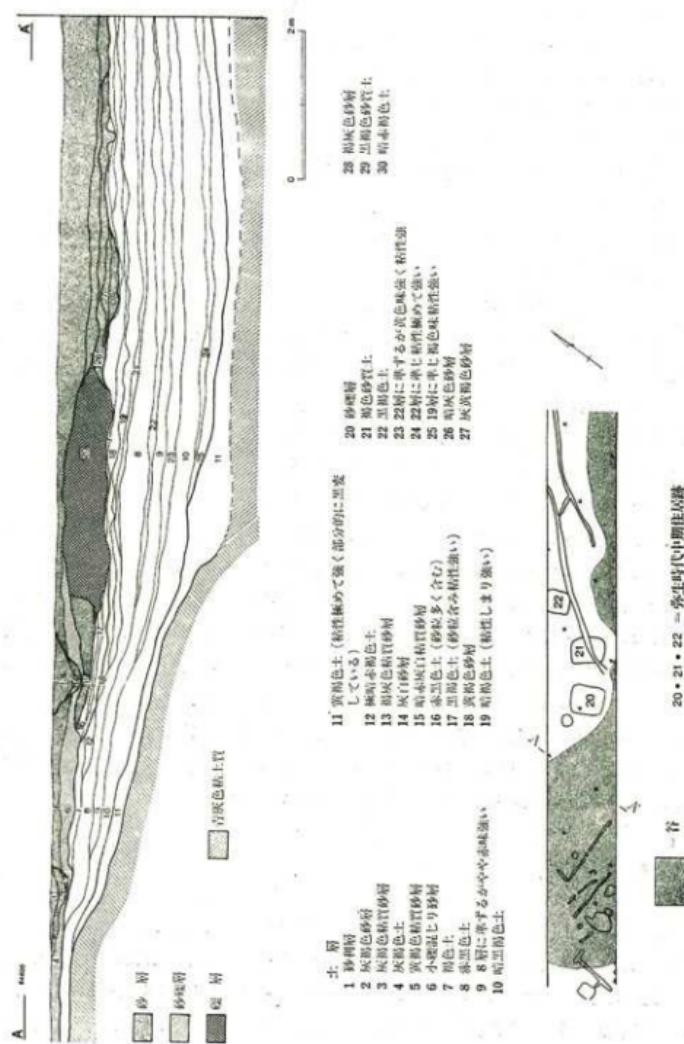
東部では、主に古墳時代の五領期(3~4世紀代)の住居跡と方形周溝墓が、西部では5世紀代?から8世紀代にかけての住居跡が検出された。そして、中央部では弥生時代中期と思われる住居跡が認められた。それぞれの遺構の基盤となっている地形は、遺跡の東部と西部ではほぼ平坦な様な面である。しかし、中央部では比高約2mの蛇行した谷地形が認められ、住居跡はその谷の肩のところに位置している(第3図)。

従来、美里村およびこの周辺では弥生時代の遺跡の発掘調査例は少なく、今回村後遺跡において弥生時代と思われる遺構が低地内で発見されたことは、この地域の弥生時代とそれ以降の地形環境を知る上で、大変重要なことである。以下、遺跡中央部の谷を埋めている堆積物の断面観察と、梅沢ほか(1981)が復元したこの地域の条里にもとづいて、上述の問題について考察する。

(1) 谷埋め堆積物の観察

第3図は、遺跡中央部で弥生時代と思われる住居跡の約10m西側の谷を埋めている堆積物の断面である。最下部の11層はチャコレート色の固い粘土質の地層で、住居跡はこの地層と同じ層準のところから掘り込まれていた。また、住居跡のすぐ北西隣には、直径1.5cm、深さ約1mの土壙があり、さらに深掘りしたところその底のはうは、ローム層と思われる茶褐色の軟灰質シルト層であった。

住居跡の南側は、比高約2mの深い谷(凹地)となっている。谷埋め堆積物の下から約1mまでには、黒色の腐植質粘土層がほぼ水平に堆積している。上部約1mは砂礫質の堆積物で、何回も(少く



第3図 遺跡中央部平面図・谷部土層埴装図

とも6回) 河川がそれぞれ以前の堆積物を削って、あらたに砂礫を堆積させていった様子が読み取れる。25および24相当層には、弥生時代中期の土器片が、9層相当層には古墳時代和泉~鬼高(4~5世紀代)の土器片が含まれていた。また、9層上部には、白色の軽石と思われる薄層が約1~3cm幅で連続して認められる。これは、4世紀前半に噴出したと考えられている淡間“C”降下軽石層(新井、1979)と考えられる(227~230ページ参照)。さらに、E層にも火山灰と思われるごく薄い白色層が認められる。これは層準から、6世紀中~後期頃に噴出したとされている二ツ岳軽石層“FA”(新井、1979)の可能性がある。

谷埋め堆積物の珪藻および花粉分析の結果(223~229ページ)からは、ほぼ9層までは水域の安定した池沼であり、その後イネ・ヨモギ・オモダカガマなどが繁茂する水深の浅い不安定な水域となつたことがわかっている。

以上の観察と分析の結果から、弥生時代の住居は当初比高約2mの深い谷を望む微高地状の台面につくられたと推定される。その後谷は池あるいは沼のような状態となり、穂やかに細かい物質や植物遺体の堆積が進み、徐々に浅くなつていった。そして、9世紀頃には、沼はほぼ埋め尽くされ、弥生時代の住居跡も完全に沖積層の下に埋没した。その後しばらくして、小山川の氾濫がしばしばこの地にも及ぶようになり、遺跡東部と西部に立地していた古墳時代から奈良時代にかけての住居跡も、砂礫質の河成堆積物の下に埋没してしまったと考えられる。

(2) 児玉郡と那珂郡、榛澤郡の条里境界と地形との対応

六反田遺跡を調査した梅沢ほか(1981)は、陸軍陸地測量部作成の迅速図を基本に各種地形図と空中写真を使い、また各郡毎に存在する式内社・式外社を考慮して条里を復元した。その復元された条里を、村後遺跡周辺の地形分類図(第2図)に重ねてみると、ひとつの興味深いことが推測される。すなわち、復元された条里に従うと、児玉郡・那珂郡と榛澤郡の条里の境が、村後遺跡付近では現在の小山川の流路と一致していない。条里を施行する場合には、一般的には小山川のような自然の障害を境界としたと考えられる。したがって、この地域での条里施行時には、小山川は現在の流路より約1000m南側の、地形分類図の高位面と低位面の境付近を流下していたと考えられる。もしそうであるとすれば、村後遺跡の住居跡が小山川の氾濫によって現在のように河成堆積物の下に埋没したのは、少くとも条里施行の時期以降と推定することができる。

4まとめ

現在、小山川は村後遺跡の右岸約200~300mの沖積低地内に位置している。しかし、検出された弥生~古墳時代の住居跡は、ローム台地と思われる当時の微高地上に位置し、洪水などのあまり及ばない比較的穂やかな地形環境にあったと考えられる。その後少くとも条里が施行されて以後、小山川は村後遺跡の南側から北側へと移動し、それにともなって村後遺跡は川が運搬してきたシルト・砂・礫などの下に埋没してしまったと推定される。

従来、この地域の台地面や低地面では、縄文~弥生時代の遺跡の発掘調査の例は少ない。坂本(1976)は、神流川扇状地では縄文時代の遺跡の多くが地下深く埋没し、発見される機会が少ない

と考えている。村後遺跡の例だけから推論するのは危険ではあるが、小山川沿いの低位面などの下にも、これまであまり発見されていない縄文～弥生時代の遺物、遺構が存在している可能性がある。

本章をまとめるにあたり、美里村教育委員会の岡本幸男氏と長瀧敬康氏には、資料の提供や現地調査の便宜をはかっていただき大変お世話になった。ここにお礼申し上げます。（平井 幸弘）

文 献

- 1 新井房夫（1979）：関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、157、41～52
- 2 梅沢太久夫・石岡憲雄ほか（1981）：『六反田遺跡』、岡部町六反田遺跡調査会
- 3 岡本幸男・篠崎 薫・長瀧敬康ほか（1983）：『東京電力美里線 埋蔵文化財調査報告（白沢・柳町・森浦・向田・向・東宮平・峯・栗山）』美里村遺跡発掘調査報告書第1集、美里村遺跡調査会、129ページ
- 4 神沼幹夫・小久保 徹・鈴木敏昭（1978）：『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 5 板本和俊・佐藤忠雄・斎藤国夫・市川 修（1976）：『大御堂棺下・女塚遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第28集、埼玉県遺跡調査会
- 6 菅谷浩之・笠森健一（1976）：『宮下・鍬之口遺跡発掘調査概報』、美里村教育委員会、13ページ
- 7 菅谷浩之ほか（1978）：『日の森遺跡発掘調査概報』、美里村教育委員会、19ページ
- 8 中山正民・原 高則・小野口 雄（1979）：利根川中流及び中川流域における沖積平野の地形、埼玉大教育学部紀要（数学・自然科学）、28、81～89
- 9 堀口万吉（1974）：関東平野西部の地形区分と段丘面変動、垣見俊弘・鈴木尉元編『関東地方の地震と地殻変動』、ラティス、119～127
- 10 堀口万吉（1980）：埼玉県の地形と地質、埼玉県『埼玉県市町村誌』、274～325
- 11 松田時彦（1974）：東京付近の活断層について、東京都防災会議『東京直下型地震に関する研究（その1）』、59～61
- 12 松田時彦・山崎晴雄・金子史郎（1975）：西関東の活断層、東京都防災会議『東京直下型地震に関する研究（その2）』、75～108
- 13 松田時彦・羽田野誠一・星野由尚（1977）：関東平野とその周辺の活断層と主要な構造性線状地形について、地学雑誌、86、92～109
- 14 村本達郎（1975）：埼玉県の地形区分と名称、埼玉大紀要（社会科学編）22、11～14



第4図 向田、村後周辺遺跡分布図

III 向田・権現塚・村後遺跡周辺の歴史的環境

向田・権現塚・村後遺跡は、埼玉県児玉郡美里村大字小茂田・下児玉に所在する弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺跡である。

美里村は本庄市の南側に、小山川を隔てて隣接し、岡部町・児玉町と接する。美里村周辺は南側から西側にかけて上武山地より伸びる丘陵に囲まれた扇状地形を呈している。

向田・権現塚・村後遺跡は県道蛭川・普濟寺線建設に伴って調査が行なわれた。両遺跡は県道本庄・寄居線を挟んで東西に対峙し、直線距離にして約800mを測る。遺跡は標高63~65mに位置し、両遺跡は埋没谷によって隔てられている。

遺跡周辺には女堀川・身鶴川・志戸川・藤治川など、上武山地に水源にもつ諸河川によって開拓され、向田・権現塚・村後両遺跡とも身鶴川右岸・現河川より50~200m南側の洪積扇状地上に位置している。

向田・村後遺跡の周辺、児玉郡は古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が卓越し、あたかも遺跡の巣窟であるかの如き觀を呈している。

東北新幹線・関越自動車道建設、或いは周辺の圃場整備事業に伴って数多くの遺跡が調査され、概期の様相に様々な検討が加えられてきている。

遺跡の立置する扇状地低位面では、現在までのところ、縄文時代に属する遺跡は調査例が少ない、恐らく度重なる河川の氾濫によって埋没しているものも数多いと思われる。

弥生時代の遺跡も縄文時代と同様検出例は少ない。まとまった遺跡では寄居町甘粕山遺跡で弥生前期から中期にかけての良好な資料が得られている。また同、神明ヶ谷戸遺跡では環濠集落が調査されている。本庄市大久保山で櫛描文をもつ弥生後期土器が検出されたほか、塚本山古墳群・飯玉東遺跡では弥生後期の住居跡が調査されている。

弥生時代については全県的に遺跡、資料とも検出例に乏しい。地域は異なるが行田市池上遺跡では弥生中~後期の環濠集落が調査され、住居跡内からは炭化米が検出され、稻作の可能性を淡くしている。

古墳時代前期には、岡部町後森沢遺跡群、石荷B遺跡、美里村志戸川南遺跡において、前方後方形周溝墓が調査されている。今回、村後遺跡における一例の追加は、不明な点の多い古墳時代初頭期の問題に新たな一例を追加することになろう。

3者とも身鶴川・志戸川に面した低位面に位置している。身鶴川・志戸川は岡部町で合流し、小山川と名を変え、利根川に注いでいる。この3者が同じ地域で集中して検出されていることは興味深い事実であろう。また発生期古墳の年代観、方形周溝墓との関係など、不明な点の多い概期に新たな問題を提起しているのが現状であろう。

古墳時代前期から後期にかけての児玉周辺にも大集落が築かれるようになる。後張遺跡からは、住居跡軒が調査され、多量の遺物が出土しており、最も纏った資料と言える。

向田・村後周辺では古川端・東谷・電電下・飯玉東・諏訪遺跡があり、S字口縁甕が出土してい

る。県内の土師器編年は、当該地域での一連の調査で得られた豊富な資料をもとに検討されてきたことは周知の通りであるが、周溝墓の隣接した住居跡群からはS字口縁甕の出土はなく、形態共に明らかに前述の遺跡群より遅ものと思われる。

この段階には、前代からの遺跡も含めて、纏った集落形成が行なわれてきており、扇状地低位面上に立置している遺跡の多く存在している点は注目に値しよう。

古墳時代後期から奈良・平安時代にかけては、児玉周辺の遺跡は飛躍的に増加している。古墳時代後期では前述の後張遺跡を始め、宇佐久保・古川端・ミカ神社前・ミカド・若宮台等の諸遺跡が報告されている。

概期の遺跡立置は基本的に前代からの立置を踏襲していると思われるが、地形分類上の低位面に沿った台地上により濃密な分布を示すようになる。

また、この段階では神流川扇状地と身鶴川扇状地に遺跡の集中する傾向が認められると考えられている。

河川によって開拓された残丘上には多くの古墳群が築造されている。向田・村後遺跡の立置する身鶴川扇状地には、長沖古墳群・生野山古墳群・塚本山古墳群・秋山古墳群・諫訪山古墳群・西山古墳群・千光寺古墳群・広木大町古墳群などがあり、広木大町古墳群では鬼高期の住居跡を切って古墳が築造されており、集落と墓域との明確な分離を形成されるようになる一例を示している。

奈良・平安時代では遺跡は高位面にも積極的に進出するようになる。

児玉周辺の条理制を復元した梅沢氏によれば、条理施行のを9世紀代に求めており、集団的な農業開発、乾田耕作によって集落の増力したことが考えられる。

児玉工業団地の造成に伴い、古井戸・将現塚遺跡が調査されているが、上泥の問題とも相俟って慎重な検討が加えられる時期にきていると言えるだろう。

現在、向田・村後をとりまく周辺地域では、圃場整備事業が進行し、多くの遺跡が調査されてきている。資料の蓄積と共に、地域的な様々の解明に一層の努力が払わなければならないであろう。

文 献

岡本幸男「美里村志戸川南遺跡」 埼玉県遺跡調査報告会 レジメメ 岡本氏の御好意により資料を実見させていただいた。

両部町教育委員会 1978 「後様沢遺跡群の調査」 両部町教育委員会

柿沼幹夫他 1978 「東谷・前山2号墳・古川端」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集

〃 1979 「下田・諫訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集

児玉町教育委員会 1980 「長沖古墳群」 児玉町文化財調査報告書 第1集

埼玉県教育委員会 1982 「新編 埼玉県史資料編 2」

古墳・奈良平安時代の遺跡

- | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 久城前遺跡 | 2 後張遺跡 | 3 諫訪遺跡 | 4 雷電下遺跡 |
| 5 塚本山古墳群 | 6 東谷遺跡 | 7 長沖古墳群 | 8 生野山古墳群 |
| 9 村後遺跡 | 10 向田遺跡 | 11 飯玉東遺跡 | 12 古川端遺跡 |
| 13 東光寺裏遺跡 | 14 石蔵B遺 | 15 伊勢塚遺跡 | 16 広木大町古墳群 |
| 17 宮下遺跡 | 18 志賀神社前遺跡 | 19 宇佐久保遺跡 | 20 北貝戸遺跡 |
| 21 烟中遺跡 | 22 諫訪山古墳群 | 23 清水谷遺跡 | 24 北坂遺跡 |
| 25 平原遺跡 | | | |

IV 向田、権現塚遺跡の調査

1 遺跡の概要と調査の方法

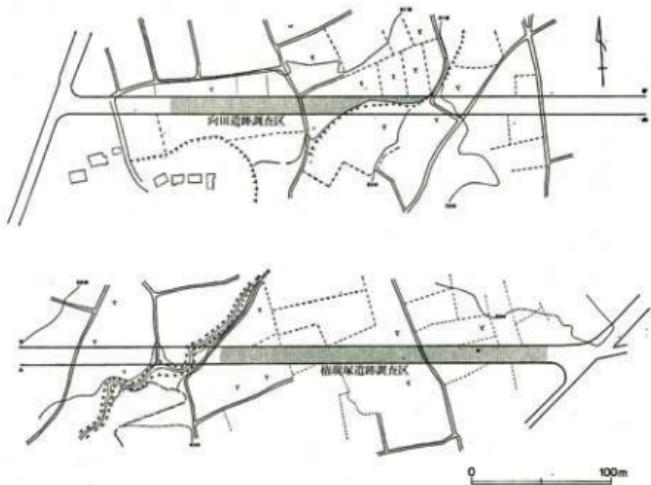
美里村大字小茂田字向田に所在する向田遺跡は、真近に聳える大久保山の丘陵とその南麓を東流する小山川の自然堤防、及び周囲の扇状地に形成された遺跡の密集地帯の一角にある。

向田遺跡の立地を地形的にみると、神流川による洪積扇状地上にあり、遺跡の近辺は桑園として土地利用されている。遺跡の東から南にかけて比高差約1mを有する浅い谷が入り込み、遺跡はこの谷地形によって画された微高地状の景観をもつ台地（標高61m）に占地している。

調査区は県道本庄・寄居線から東に延びるバイパス路線のうち約3000m²を対象に設定されたが、遺構が検出されたのは調査区中程を南北に抜ける農道以東の微高地縁辺部に集中し、農道以西には全く分布していない（第5図）。

調査は、第IX系の座標軸に沿って設定した1辺5mのグリッド方式に基づき進められた。グリッド名称は数字（西→東）とアルファベット（北→南）を組み合わせて付してある。基本杭F-22区、北東杭の座標はX=+22915, 491, Y=-57656.61を測る。

遺跡の基本層序は、表土（第1層）の下に5~10cmの厚さの黄褐色を呈するローム質土が堆積する。遺構はこの黄褐色土を掘り込んで構築されており、実質的な遺構確認面にあたる（第2層）。非



第5図 遺跡位置図

常に粘性が強く硬いため、乾燥すると表面がひび割れ、造構の遺存状態には芳しくなかった。

第3層は黒褐色土が、第4層には明褐色のローム質土がそれぞれ堆積する。両層とも粘性が強く酸化鉄の集積が認められる。以下灰褐色を呈する疊層（第5層）、暗褐色砂層（第6層）に移行する。

調査の結果検出された造構には、9軒の竪穴住居跡の他、土壙墓1基と溝跡がある。内訳は

古墳時代前期の住居跡（3号、4号、8号住居跡）

平安時代の住居跡（1号、2号、5号、6号、7号、9号住居跡）

土壙墓（平安時代）

溝跡（近世以降）

検出された竪穴住居跡は総じて掘り込みが浅く、遺物の出土量も少なかった。古墳時代の住居跡は3号住居跡が五領期に、8号住居跡は一部のみの調査で遺物も僅かであるため明確ではないが和泉期の所産と思われる。

平安時代の竪穴住居跡は6軒発見された。6号住居跡と7号住居跡が重複する他は同時代の住居跡相互の重複はない。7、9号住居跡を除く他の住居跡からは羽釜が検出されている。

土壙墓は平安時代の2号住居跡廃絶後に重複して構築されていた。一種の廐屋墓といえよう。また出土鉄釘に木質が付着していることから、本来木棺墓であった可能性が高い。

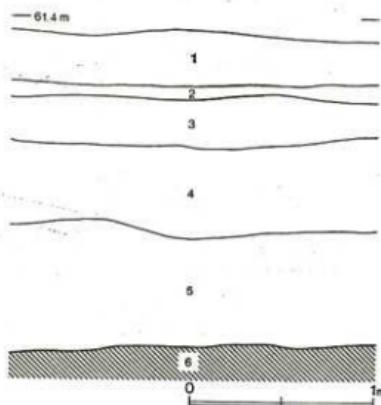
溝は検出された住居跡群の西側に発見され、調査区に直交するように南北方向に延びている。時期は不詳であるが、近世以降と考えられる。

向田遺跡調査の概要は以上である。調査区の制約から、集落全体の様相は不明とせざるを得ないが、今回検出された古墳時代及び平安時代に位置づけられる住居跡群は、集落の南端部に相当するもので、集落の中心はむしろ調査区の北側に展開していると考えられる。

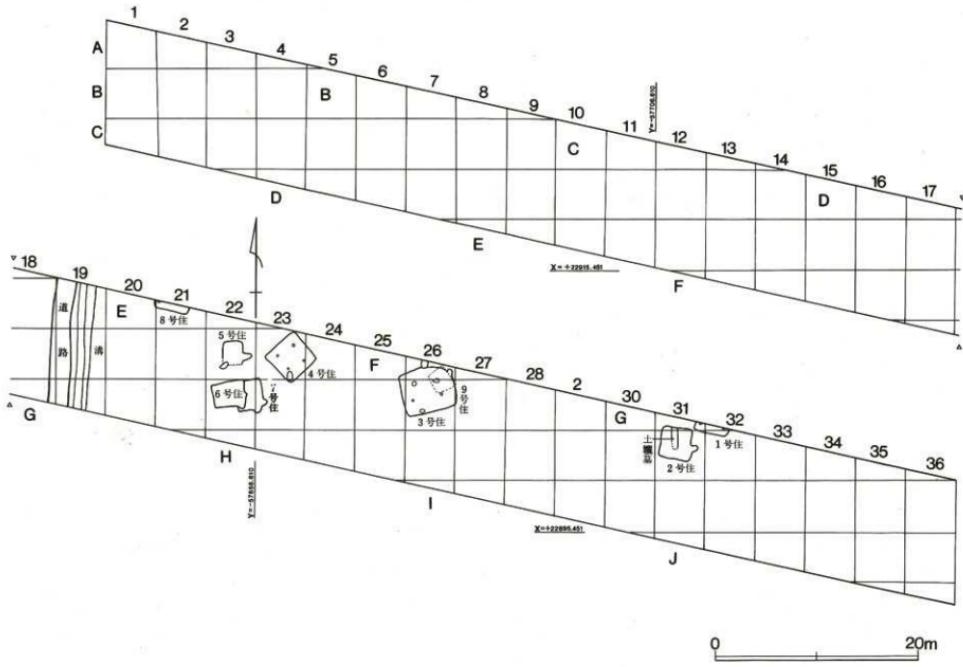
権現塚遺跡は向田遺跡より東へ約300m、浅い谷地形を隔てた対岸に位置する。標高は約63mを測る。当初土師器片が散布する状況から造構の遺存する可能性が予想されたため、向田遺跡の調査と一部併行して重機による表土除去とそれに続く造構確認調査を実施した。

その結果、確認面付近から若干量の土師器、須恵器片の出土はあったものの造構については調査区東寄りの地点で、土壙が1基検出されただけであった。

この土壙からは土師器片が数片出土している。和泉期の所産と考えられる。



第6図 基本土層図



第7図 向田遺跡全測図

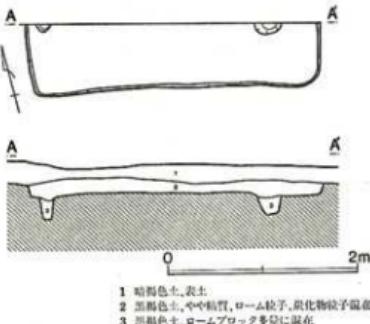
2 向田遺跡の遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物

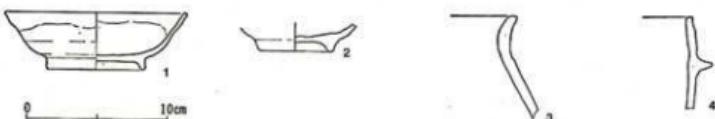
1号住居跡(第8図)

調査区で最も東寄りのG-32区を中心に位置する。調査できたのは全体の約1/6程度で、大半は調査区域外にあるため、規模、カマド等の詳細は不明である。平面プランは方形を呈するものと考えられ、東西径は3.12mを測る。確認面からの深さは約10cm前後で非常に浅く、桑根の擾乱もあり床面の残存状態は余り良くない。また住居内の施設としての柱穴状のピットが2か所検出された。覆土は暗褐色を呈する表土(耕作土)につづき、基本的には黒褐色土で構成される。二層はやや粘性を持ち、炭化物粒子、ローム粒子を含む。ピット内覆土も黒褐色を呈し、ロームブロックが比較的多く含まれていた。

遺物の出土量は非常に少なく、図示した灰釉壺、高台付塊、甕、羽釜の他は殆どが細片であった。



第8図 1号住居跡



第9図 1号住居跡出土遺物

1号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉壺	1	口径 12.8 器高 4.0 高台径 4.8	体部丸みを持って立ちあがり、上位で弱く屈曲する。口は口縁から体部上半にかけられている。	体部下半及び底部へラケズリ調整。胎土緻密で、精選。黒色微粒子含む。焼成堅敏。灰色。	フク土。口縁1/2。底部1/2残存。
高台付塊	2	高台径 6.1 現在高 2.0	高台部貼付け。底部回転糸切り痕残る。器面の磨削激しい。	胎土砂粒、茶色粒子含む。焼成やや不良。淡橙褐色。	フク土。底部のみ残存。
甕	3		口縁部小片のため全体の形状不明。口縁部外反。器壁厚い。	内外面とも横方向のナデ。胎土微砂粒やや多く含む。焼成良。褐色。	口縁部小片。
羽釜	4		口縁部直立。胴部の張りは認められない。鈎は断面三角形で水平方向に伸びる。	胴部のヘラケズリの有無は器面が観れているため不明。口縁部はコナデ。砂粒、小疊含。焼成良。褐色。	フク土。口縁部小片。

2号住居跡（第10図）

2号住居跡は1号住居跡に近接するH-31区を中心位置し、主軸方位はE-7°-Sを測る。

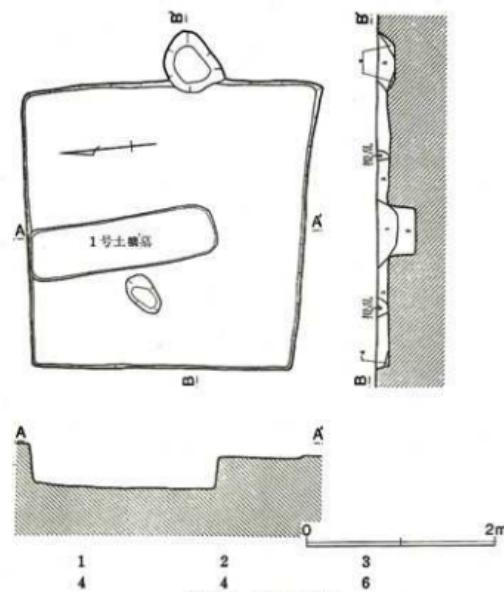
平面プランは、3×3mのはば方形を呈するが、南東コーナーが若干張り出す傾向を持つ。壁高は中央部で10~15cm程度で、床面はほぼ平坦である。ピットは1か所検出されたが、他の施設は認められなかった。

カマドは浅い皿状の掘り込みを有する小規模なものである。

また調査中に住居跡中央部からやや北寄りの位置で床面が途切れる箇所が発見されたため、

精査の結果長径202cm、短径54cm
床面からの深さ35cmを測る隅丸

長方形の土壙が検出された。底面直上より二個体の塊、壁際より鉄釘十数点が出土したことから土壙墓と考えられる。この土壙墓が住居廃絶後に構築されたことは床面及び堆積状況から確認された（第23図）。遺物総量は極めて少ない。覆土中より羽釜口縁部片、甕が出土している。



第10図 2号住居跡



第11図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	推底径 21.0	全体の形態は不明だが、大型の 変形土器と思われる。須恵質。	外面へラケズリ痕跡が認められる。 内面の器表は荒れ、部分的に 剥落、胎土砂粒、小疎含。焼成良好。 外面茶褐色、内面黄灰色。	体部下半部 残存。フク土。
羽釜	2		羽釜口縁部破片。口縁部内傾。 鋒は断面三角形で水平に伸びる。 全体に形体整う。	口縁部ヨコナデ。胴部残部位 にはヘラケズリ痕は認められない。 胎土微砂粒。小疎含。焼成良好。 明茶褐色。	フク土。口 縁部小片。

3・9号住居跡（第12図）

F—26, G—26区にかけて位置する。古墳時代の3号住居跡と重複して平安時代に属する9号住居跡が営まれている。

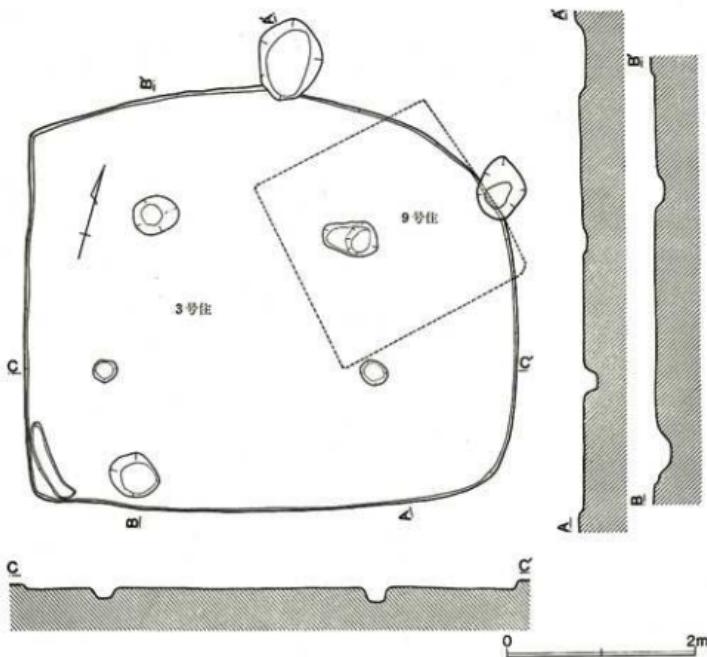
3号住居跡は主軸N—16°—Wを測る。平面プランは本来方形を呈すると思われるが、北辺のプランは非常に不鮮明で、壁高も5cm程しかなかったため充分に確認できなかった。東西5.2m、南北4.5mを測る。ピットは5本検出されたが、配置は不規則で深さも10~15cmと浅い。床面はほぼ平坦である。南西コーナー部に壁溝状の深い溝が一部検出されたが、炉跡、貯蔵穴等の施設は確認されなかった。その他住居跡北壁中央部にかかるて土壤が1基検出された。3号住居跡よりも新しい時期のものと考えられるが、出土遺物は全くなく時期は不詳である。

遺物出出量は少ないが、南西コーナー付近より正立状態で、二重口縁壺形土器の口縁部が出土している。

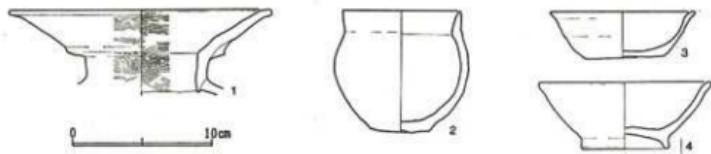
9号住居跡は3号住居跡北東コーナー部にカマドが検出されたのみで掘り込みは確認されなかつた。一応遺物の出土範囲で規模を推定したが、詳細は不明とせざるを得ない。

カマドは約15cmの深さを持ち、底面はかなり焼けた状況がみられた。

遺物は少なく、すべて確認面付近から出土している。須恵器杯、高台付塊の他は小破片である。



第12図 3、9号住居跡



第13図 3、9号住居跡出土遺物

3・9号住居跡出土物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 19.0	二重口縁を呈すが内面に2段目の屈曲はない。外面の段は粘土帶貼り付けにより、シャープなつくりである。口唇端部は水平方向に開く。	内外面ハケ目調整。口唇部ハケ目調整後ナデ。外面一部ハケ目をナデ消す。胎土砂粒、小礫を多く含む。焼成良好で堅紙。外面褐色。内面灰褐色。	口縁部90%残存。胴部以下欠失。フタ土。
小型壺	2	口径 8.4 器高 8.8 底径 4.2	形態にやや歪みあり、胴部丸みを持ち、口縁部は直立気味に立ちあがる。内面は強く屈曲する。底部中央僅かに凹む。	器表面磨滅して調整痕不明。細砂粒、茶褐色粒子含む。焼成良。橙褐色、淡褐色。	フタ土90%残存。
杯	3	口径 10.2 器高 3.3 底径 5.5	須恵器杯。体部丸みを持って立ちあがり、口縁部外反。内面に重ね焼きの痕跡残す。	内外面ロクロナデ整形。底部回転糸切り痕を残す。やや粗い砂粒を多量に含み、器表面ざらつく。焼成良。色調は一定せず外面青灰色、灰色、一部黄褐色。内面灰色。	フタ土。完形。
高台付 塹	4	推定口径 12.2 器高 4.8 底径 6.0	口縁部ゆるやかに外反する。底部は中央部が高い。高台の張り出しあり。酸化焰焼成。	ロクロ整形。底部回転糸切り痕を残す。砂粒、茶褐色粒子多量に含む。灰茶褐色。	フタ土。口縁部、底部残存。

4号住居跡（第14図）

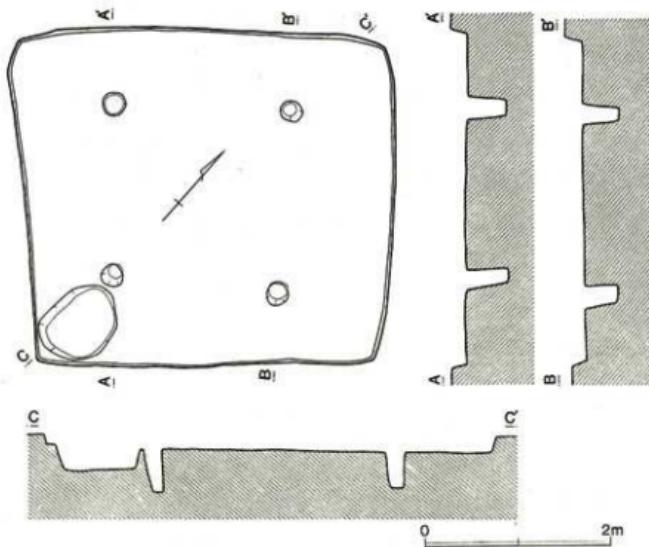
4号住居跡はF-23区に位置する。その西側には平安時代の5号住居跡及び6、7号住居跡が構築されている。

主軸方位はN-47.5°-Eを示し、長径3.92m、短径3.68mの方形に近い長方形の平面プランを呈するが、やや形態は不整である。

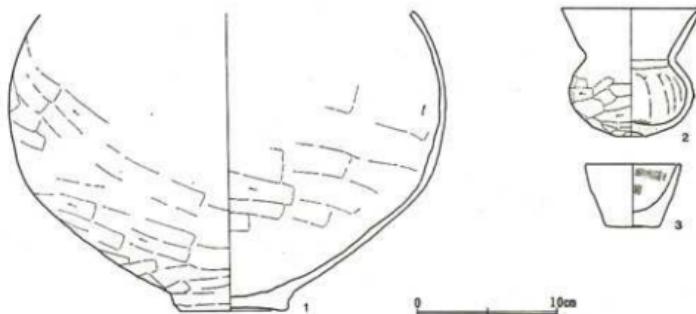
床面はほぼ平坦で堅く、確認面より約15cmの深さをもつ。

炉跡は明確でなく、精査を行なったが検出されたかった。柱穴も床面精査の段階では、乾燥によるひび割れが激しく確認できなかったため、床面にサブトレーンチを設け調査したところ、4本検出された。いずれも主柱穴と考えられ、住居跡の対角線上に規則的に配置されている。床面からの柱穴の深さは40cm前後を測る。北壁側の2本は鉛直方向に掘られているが、他の2本の柱穴はやや斜めに傾いた状態で検出された。

貯蔵穴は南側コーナー部で検出された。平面プランは不整梢円形を呈する。長径約90cm、短径約



第14図 4号住居跡



第15図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底部 7.6 胴部最大径 31.4 残存高21.3	胴下半部のみ残存。底部突出する。胴部中位で強く張りを持つ。黒斑ある。器壁比較的薄い。	外面へラ状工具による削り。砂粒の移動が認められる。内面底部胴部下位ナデ調整。胴中位へラ状工具によるナデ。砂粒を多量に含む。焼成良。淡褐色、黄灰褐色。	貯蔵穴出土

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	2	口径 10.0 器高 872 底径 2.0	形態整っている。口縁部は直線的に外傾して開く。胴部、球状、底部凹む。最大径は口縁部にある。	口縁部横方向のナヂ。胴部ヘラケヅリ。胴部内面は指頭によるナヂ調整。胎土細砂粒、茶褐色粒子含む。焼成良好。淡茶褐色。	フタ土。約60%残存。
	3	口径 6.8 器高 4.5 底径 3.9	器壁厚い。口縁部はやや凹凸あり。底部は平底だが中央部が僅かに凹む。	体部外面一部分僅かにハケ目を残すが、殆どナヂ消されている。内面はハケ目調整を施す。また底部付近に棒状の工具の痕跡を残す。砂粒、小碎含む。焼成良好。茶褐色。	北西ピット出土。ほぼ完形。

70cm、住居床面からの深さ約30cmを測り、底面はほぼ平坦であった。出土遺物は少ないが、貯蔵穴より壺形土器胴下半部が検出されている。

5号住居跡（第16図）

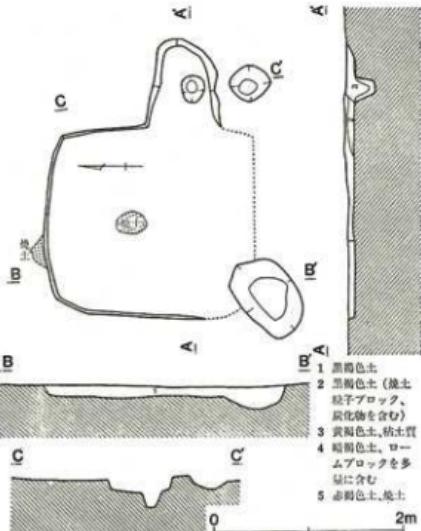
5号住居跡はF-22区にあり、南側には6、7号住居跡が近接して位置する。南壁部は掘り込みが浅く、また柔根による攪乱もあり平面プランは確認しえなかつたが東西長2.0m、南北長（推定）2.2m前後の方形に近い平面プランを呈するものと考えられる。本遺跡で検出された住居跡の中でも最も規模の小さいものである。

床面はやや凹凸を持ち一定しない。壁高は北壁で約10cmを測るが、南壁の立ちあがりは不明である。

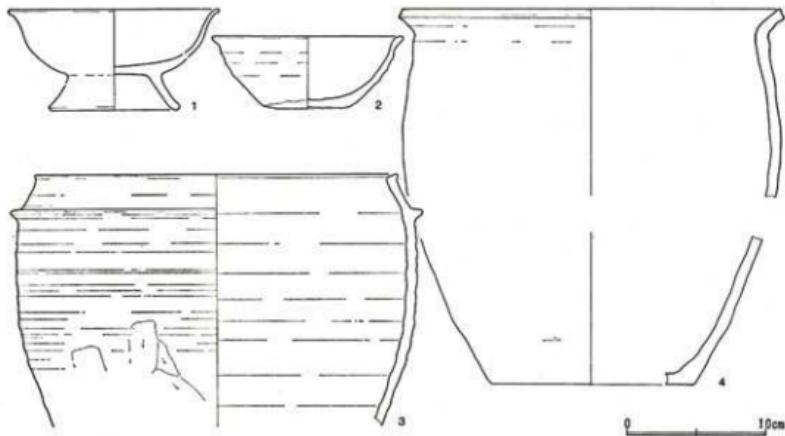
カマドは東壁南寄りの位置に壁外へ

約90cm掘り込んで構築されている。カマドの底面は住居床面と同一レベルで、カマド前面の掘り込みは認められない。また中央部やや南寄りの位置に24×30cm、深さ25cmのピットが検出された。支脚を据えたピットと思われる。カマド南側にも浅いピットが検出されたが、覆土に焼土粒子炭化物粒子を含み土器細片も出土していることから住居跡に伴うものと判断される。

また住居跡南西隅に土壠（長径90cm、短径60cm、深さ24cm）が1基発見された。覆土の状況も住居跡のそれに近似するので一応住居に伴うものと考えておきたい。その他住居中央及び北壁外に浅い焼土の堆積が認められた。遺物は羽釜、甕、高台付焼等が出土しているが量は少ない。



第16図 5号住居跡



第17図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物

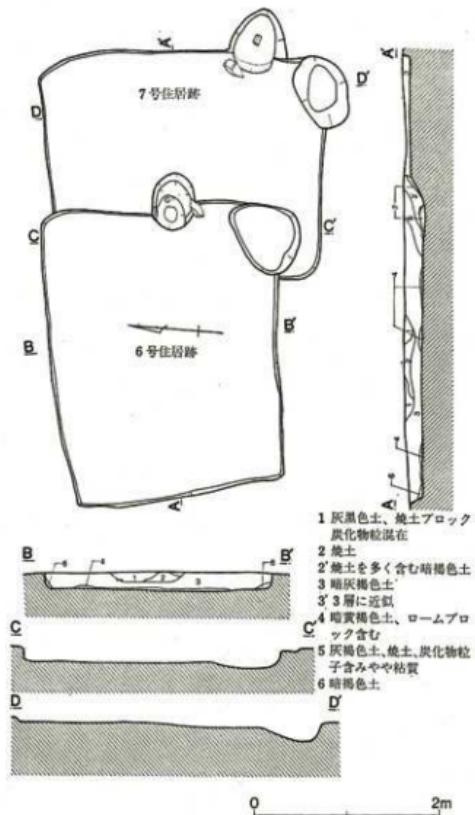
器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付 塊	1 推定口径 15.2 器高 7.2 推定底径 9.0	形態に歪みあり。杯部は丸味を持ち、口縁部は外反する。口縁に向うにつれて器壁は薄くなる。高台は高く、外反。	外面ともナデ調整を施す。胎土に砂粒を多量に含む。焼成良好。淡褐色。	南西コーナー。土壤フタ土。約30%残存。
塊	2 口径 13.6 残存高 6.2 底径 4.7	本来高台付塊であるが、高台部剥落。体部内凹気味に立ちあがり、口縁外反。	ロクロ整形。外面ロクロナデ底部外面に回転系切り痕を残す。胎土砂粒、小球を多量に含み、器表面はざらつく。焼成良。黒灰色。黄褐色。	土壤フタ土70%残存。高台欠落。
羽釜	3 推定口径 26.0 焼成高 18.1	口縁部内傾する。口は水平方向に張り出しが、やや低く貧弱である。最大径は口部にあり、29.8cmを測る。	ロクロ整形。口部貼り付け。ロクロ部ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ痕を残す。胎土砂粒含む。焼成良好。褐色。	フタ土。胴上半の20%残存。
甕	4 推定口径 27.0 推定器高 22.0 推定底径 15.0	胴部上半と胴部下半は接合しないが形態及び胎土等から同一個体と考えられる。口縁部「く」の字状に外反。胴部の張りは弱い。底部平底と思われる。	口縁部ヨコナデ。胴下位にはヘケケズリが施されている。胎土精選されている。微砂粒含む。焼成良好。色調淡褐色。	フタ土。胴上半20%、胴下半10%残存

6号住居跡（第18図）

G-22区に位置する。平面プランは長軸3.2m、短軸2.45mを測るやや形態の崩れた長方形を呈する。特に東壁部では中央に設けられているカマドを込んで、その両側の壁ラインは約10cmの段差を有する。主軸方位はN-81°-Eを示す。

壁高は北壁部で約16cmを測る。床面の状況はほぼ平坦であるが、住居中央部を中心に暗黄褐色土（ロームブロック混り）の薄い堆積が認められた。

カマドは東壁中央部を掘り込んで構築されている。長軸60cm、短軸45cmの小規模なもので底面の掘り込みも浅い。またカマド壁際に左右各1枚、片岩系の板石が下部が埋め込まれた状況で検出された。カマド袖石と考えられる。またカマド内中央より左寄りの位置に長さ20cm程の円柱状の疊が



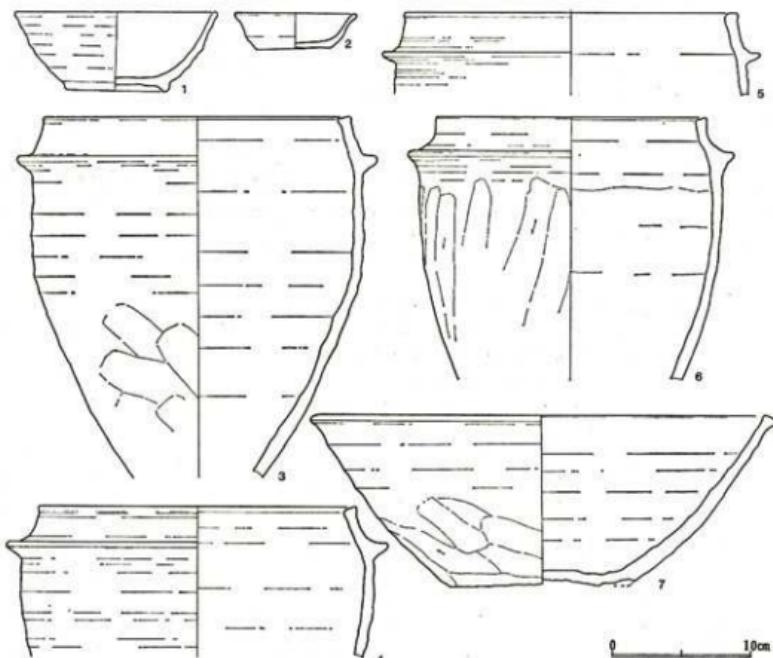
第18図 6、7号住居跡

立ったままの状態で出土した。下部の 5cm が埋め込まれ、先端部は欠けている。支脚に利用されたものと考えられよう。

またカマド右側の東南壁コーナー部に貯蔵穴と思われる土壙が検出された。南北 80cm、東西 75cm の倒卵形に近い形態を持ち、壁ラインの外側に張り出して設けられている。床面からの深さは約 5 cm と非常に浅く、壁はゆるやかに立ちあがる。

出土遺物は本遺跡で検出された住居跡のなかでは最も豊富で、壺、高台付塊、羽釜、浅鉢等がある。但し、いずれも床面より若干浮いており、確実に住居に伴うとは言い難い。

なお 6 号住居跡は 7 号住居跡と切り合い関係にあるが、明らかに 7 号住居跡を裏して 6 号住居跡を構築している。新旧関係は 7 号住居跡（旧）→ 6 号住居跡（新）である。



第19図 6号住居跡出土遺物

6号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付塊	1	口径 14.4 器高 5.8 底径 7.0	口縁部にやや歪みあり輪円形を呈する。外面ロクロ痕跡顯著。貼り付高台は低く貧弱。体部は丸みを持って立ちあがり口縁部を僅かに外反させる。	ロクロ整形。底部外面は磨滅、剥落部分もあり調整痕不明。細かい砂粒含む。焼成良好。色調は黄褐色を呈するが、部分的に灰色から灰白色を帯びる。	フタ土。80%残存。

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	2	口径 8.6 底径 5.3 器高 2.7	小ぶりで浅い壺。酸化焼成。 体部は腰が弱り、口縁部はやや肥厚させて外反する。底部は平底。 器形に若干歪みがある。	底部回転糸切り痕を残す。体部内外面ヨコナデ。全体の作りはやや薄。砂粒、茶褐色粒子含む。焼成良好。赤褐色、黄褐色。	フク土。70%残存。
羽釜	3	口径 22.0 残存高 26.1	口縁部形態に歪みあり、梢円形を呈する。口縁部内傾し、上面に浅い沈窓上の凹みを持つ。鉄部は丸みを持ち水平方向に約1cm突出する。最大径は鉄部にあり26cmを測る。底部欠失。	ロクロナダ調整。胴部凹凸は比較的顯著で、下半部はヘラケズリが施される。胎土には細かい砂粒の他、小礫が少量混じる。焼成良好。灰色、部分的に黄褐色。	フク土。口縁部80%、胴部60%残存。
羽釜	4	推定口径 22.8 残存高 10.9	胴部下半と底部欠失。口縁部は内傾し上面は平坦。体部は先端に丸みを持ち、やや斜め上方に張り出す。胴部残存部にはヘラケズリ痕は認められない。	ロクロナダ調整。胴部外面凹凸あり。胎土に砂粒を含むが比較的精選されている。焼成良好で、堅く焼き締まる。褐色～茶褐色。	フク土。口縁部25%残存。
羽釜	5	推定口径 24.0 残存高 5.9	胴部の大半と底部欠失。胴部口縁部はほぼ直線的で口縁の内傾度は弱い。体部はやや幅狭で水平方向に突出する。	ロクロナダ。細かい砂粒を多量に含む。焼成良。橙褐色。	フク土。口縁部残存。
羽釜	6	推定口径 19.5 残存高 19.0	口縁部下半は内傾するが、中位で屈曲して直立気味に立ちあがる。最大径は鉄部に持ち22.6cmを測る。胴部の張りは弱く、ゆるやかにすぼまる。胴部中位以下に煤付着。	ロクロナダ調整。胴部外面は縱方向のヘラケズリが施される。内面に成形時の粘土積みあげ痕が残る。小礫若干含む。焼成良好。褐色から黄褐色、一部灰褐色。	フク土。口縁部45%残存。
擂鉢	7	口径 32.0 残存高 12.4	外面にロクロ調整による凹凸あり。器面は全体的にやや磨滅。底部外面は剥落しているため、凹凸激しい。口縁部肥厚。	胴下半部斜方向のヘラケズリ。その後難なナダ調整を施す。胎土砂粒を多く含む。焼成やや不良。灰黒色～黄灰色。	フク土。70%残存。

7号住居跡(第18図)

G-22、23区に位置する。6号住居跡によって西壁部を壊されているが、長軸3.05m、短軸2.33mの南北に長い不整隅九長方形プランを呈するものと考えられる。主軸方位は、6号住居跡とほぼ同じN-84°-Wを指す。

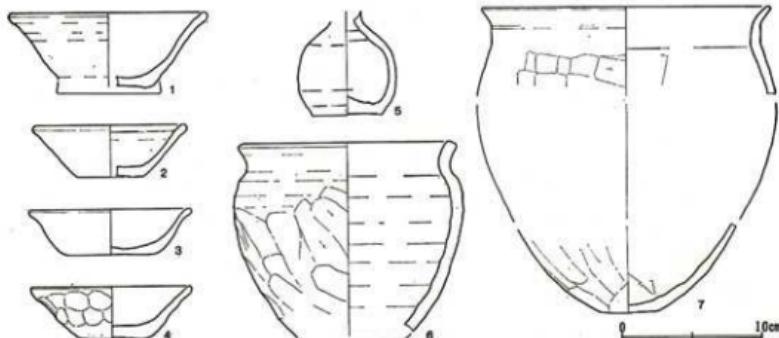
住居跡の掘り込みは北壁部で5cmと非常に浅いが、床面はほぼ平坦で貼床は認められない。

カマドは東壁部南寄りの位置に設けられている。長さ70cm、幅60cm、確認面からの深さ約15cmの大きさで底はたらい状を呈する。カマド左袖部前面には袖石に使用されたと思われる板石が横に倒れた状態で出土した。右袖部には残っていない。またカマド中央部から支脚と考えられる角柱状の礫がやや斜めに傾いた状況で検出された。長さ約22cmで下部7cmは埋め込まれていた。上端部は完

存し、若干磨り減ったような状況が窺えた。

また東南壁コーナー部には長さ80cm、幅56cmの梢円形を呈する貯蔵穴が検出された。確認面からの深さは約20cmで底面は舟底状を呈する。

遺跡物の出土量は少ない。坏類、甕の他、灰釉小瓶が覆土上面より検出された。



第20図 7号住居跡出土遺物

7号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付 坏	1	推定口径 13.8 残存 5.9	高台部欠損。体部は直線的。口 縁部は外反気味に開く。口縁内面 やや凹む。	外面ロクロナデ調整。底部回 転糸切り痕残る。胎土に微細砂粒 茶色粒子含む。酸化焰焼成、やや 不良で軟質。橙褐色。	フタ土。口 縁部半残存。
坏	2	推定口径 10.5 器高 3.7 推定底径 4.6	やや小ぶりの坏。体部は直線的 に開き口縁部肥厚気味に僅かに外 反する。内面ロクロ凹凸があるが内 外面ともに比較的平滑。	ロクロナデ調整。底部回転糸切 り後周縁部をナデ消す。胎土微細 砂粒、茶色粒子含むが比較的精選 されている。焼成良好、堅緻。暗 褐色、暗黄褐色。	フタ土。少 残存。
坏	3	推定口径 11.3 器高 3.3 底径 6.1	体部丸みを持ち、口縁部は外反 する。底部平底。全体に磨滅が激 しい。	磨滅のため調整痕不明。底部に は糸切り痕と思われる条線が一部 認められる。粗い砂粒含む。焼成 良。酸化焰焼成。橙褐色。一部黄 褐色。	フタ土。底 部%、口縁一 部残存。
坏	4	口径 11.2 器高 3.8 底径 4.5	体部直線的に開く。外面及び底 部は非常にざらつく。底部から体 部下半に形成時の垂ぎ目状の痕跡 残る。底部へ体部下半器壁厚い。	体部外表面指頭による押え。口縁 及び内面はロコナデ、平滑。細か い砂粒含む。酸化焰焼成で硬質。 茶褐色、一部黒ずむ。	フタ土。口 縁%、底部完 存。

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉小瓶	5	底径 5.0 残存高 7.4	口縁部欠失。手付瓶の可能性もある。胴部は内凹する。肩部の張りは弱く、なだらかに頸部に移行する。	頸部内面しぶり目残る。体部下端ヘラケズリ。底部は回転系切り底部内面にらせん状の棒状工具による痕跡残る。胎土に黒色粒子含み精選。堅敏。明灰色～灰色。	フタ土。胴部以下の70%残存。
甕	6	口径 14.7 現存高 13.6	底部欠失。口縁部は弓状に括れ外反する。器壁厚い。内外面ロクニによる凹凸残る。	口縁部コナデ。胴部ロクロ整形。外面縦及び斜方向のヘラケズリ。粗い砂粒多量に含む。焼成良。橙褐色、淡黄褐色。	フタ土。70%残存。
甕	7	推定口径 20.4 推定高 21.7 底径 4.1	コの字状口縁に近似するが、外面肩部の段は不明瞭。胴部の器肉も厚い。胴部中位は欠失するが、同一個体と思われる。	口縁部コナデ。胴部上位では横下位では縦、方向のヘラケズリ内面木口状工具によるナデ。砂粒多量に含む。焼成良好。茶褐色。	貯蔵穴出土口縁部4、底部及び胴下部1残存。

(8) 住居跡 (第21図)

本遺跡で検出された住居跡のなかで最も西寄り (E-21区) に位置する。住居の大半は調査区域外にあるため、全体の1/4程度しか確認しえなかった。

東西長3.42m、南北方向は調査区内で1.2mを測り、方形もしくは長方形の平面プランを呈するものと考えられる。

床面はほぼ平坦だが、東壁寄りに擾乱がみられた。壁高は確認面より約20cmを測る。

付属施設としては調査区北壁に接してピットが1本検出されたのみである。

遺物は土師器高杯脚部等細片が微量出土している。

(2) 溝 跡 (第22図)

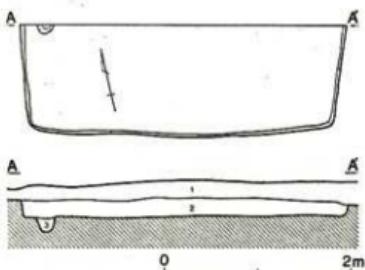
調査区を横切る農道の東側に検出された。溝の西側の立ちあがり部分が農道にかかり調査できなかったため、正確な規模は不明であるが、残存部分で幅5.8mを測る比較的大きなものである。

この溝は調査区内ではほぼ南北方向に伸びており長さ約12mに亘って検出された。

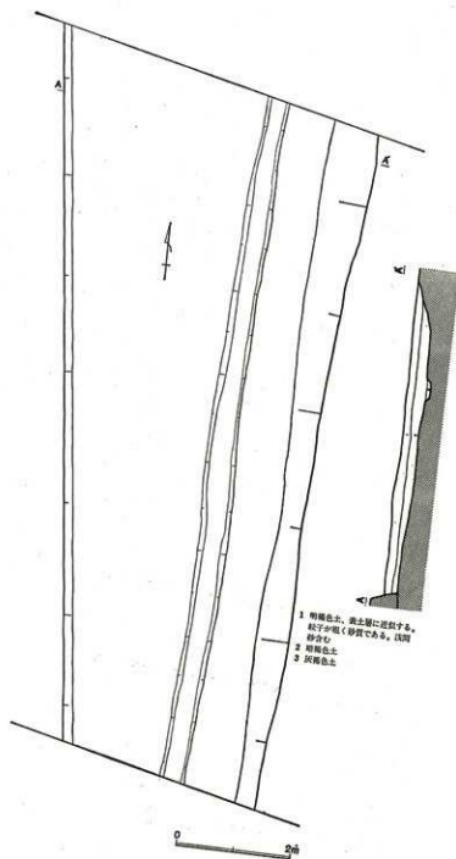
溝底は2段の掘り込みを持ち、1段目の底面は確認面より30～50cmの深さで若干起伏がみられる。全体的にみると北から南へ緩やかに傾斜している。

2段目の溝は東壁の立ちあがり部分から約70～90cm西へ偏った位置にあり、主軸方向(南北)に平行して延びている。上面の幅は広いところで50cm、下底部のそれは40cm程である。

覆土は基本的に3層に分かれるが、1、2層には天明期に降下したと思われる火山灰(浅間A)が多量に含まれる。全体的に砂質の強い覆土であるが、堆積状況も単純で當時水が流れたような様



第21図 8号住居跡



第22図 溝 跡

相は窓われない。

遺跡は土器部の細片が微量出土しただけで時期決定の根拠となるものはないが、覆土中の浅間砂の存在や溝の形態から近世以降の掘削と考えられよう。

(2) 土墳墓と出土遺物(第23図)

本遺跡で唯一発見された土墳墓で、第2号住居跡調査時に検出された。当初土壌の性格が不明であったが、形態及び出土遺物から土墳墓(木棺墓)と推定したものである。

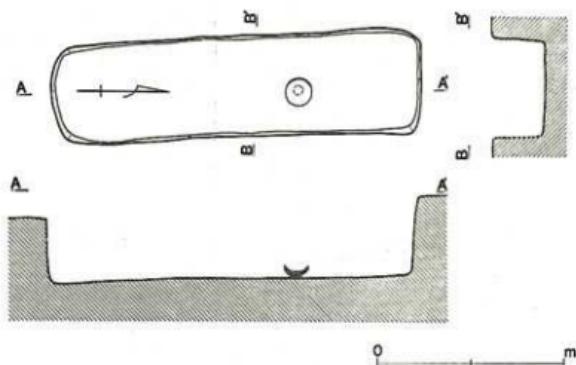
この土墳墓は第2号住居跡中央部より北に偏った位置にあり住居の床面を掘り下げて構築されている。2号住居跡廃絶後に作られたことは、土層の堆積状態等から明白である。

形態は長径202cm、短径54cmの南北に長い隅丸長方形を呈する。住居跡床面からの深さは35cmを測り壁はほぼ垂直に掘り込まれている。また土墳墓の北辺は2号住居跡の北壁と接している。床面は凹凸をほとんど持たず平坦である。主軸方位はN-4°-Wを示す。

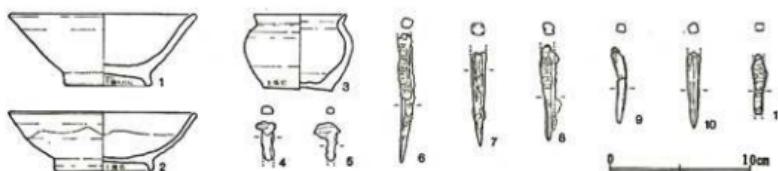
覆土は2層に分かれる。上層は黒褐色を呈し軟かい。下層は黄褐色土で粘性を持つ。地山の土に非常に近似しており壁の検出が難しかったため、サブトレントを設け確認した。掘削した土をそのまま埋め戻したものと考えられる。

遺物は中央やや北寄りで土壌の底面より僅かに浮いた位置から灰釉塊と高台付塊が2枚重なった状態で検出された。灰釉塊が上に、高台付はその下にあり、2枚共やや西に傾いていた。恐らく副葬品と考えられる。

また壁際より10数点の鉄釘が検出された。小片が多く完存するものはないが、釘の表面には木質が錆着している。このことから土墳墓も本来木棺墓であったものと考えられる。その他上層より小型壺が検出されている。



第23図 1号土墳墓



第24図 1号土壙墓出土遺物

1号土壙墓出土遺物

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付 塊	1 口径 13.4 器高 5.1 底径 5.7	体部は直線的に開き、口縁部僅かに外反する。体部外面口クロによる凹凸感が微弱。全体にややざらつく。高台は貼り付けによる張り出しが弱い。底部外面に回転系切り痕残る。	ロクロ整形。胎土に砂粒を多量に含む。茶色粒子も顯著である。半還元焰焼成か。焼成やや不良。色調は茶褐色～灰色を呈す。	棺底。完存。
灰釉塊	2 口径 13.0 器高 4.2 底径 6.6	器内は薄い。体部から口縁部にかけ内輪氣味に開く。高台部は貼り付け手法によるものと思われる。釉は口縁から体部上半にかけて付けられているが薄い。底部外面に薄く墨痕残るが判読不可能。	ロクロ整形。胎土緻密で精選されている。微細な黑色粒子含む。底部外面に回転系切り痕残す。焼成良好。堅緻。色調灰色。	棺底。完存。
小型壺	3 口径 6.4 器高 5.3 底径 4.8	小型の薬壺に似た壺形土器。底部やや上げ底。胴部中頃よりやや上位に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。外面に有機物付着する。	ロクロ整形。胎土に砂粒含むが比較的精選。口縁部ヨコナデ。底部回転系切り。焼成良好。酸化焰焼成。色調赤褐色。	フク土。完存。
鉄釘	4	角釘頭部。残存長2.8cm。		
鉄釘	5	角釘頭部。錆化著しい。残存2.7cm。		
鉄釘	6	角釘。頭部欠。木質付着。9.1cm。		
鉄釘	7	頭部欠。木質付着。6.6cm。		
鉄釘	8	頭部欠。木質付着。6.7cm。		
鉄釘	9	頭部欠。木質顯著でない。5.4cm。		
鉄釘	10	頭部欠。一部木質残る。5.4cm。		
鉄釘	11	頭部及び先端欠。木質残る。4.3cm。		

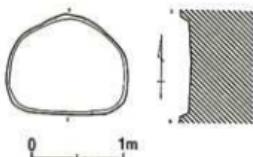
3 権現塚遺跡

第1号土壙（第25図）

権現塚遺跡は遺跡の概観でも記したように、当初遺構の存在が予想されたため全面にわたり表土を除去し遺構の確認に努めたが、結果的には土壙1基が検出されただけであった。そのためグリッド設定も行なわず、検出された土壙の位置は路線杭を基準に測定した（第5図黒丸）。

第1号土壙は不整円形のプランを呈し、東西長130cm、南北108cm、深さ約10cmを測る。底面はほぼ平坦でたらい状の形態を有する。

遺物は覆土より土師器高杯、甕の破片が出土しているが、小片のため実測可能なものはない。和泉期の所産と思われる。



第25図 第1号土壙

V 村後遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観と調査の方法

村後遺跡は、身飼川左岸にある自然堤防上の遺跡である。発掘調査は、自然堤防上北端に沿って実施された。現地表面の標高は63~65m前後で、ほぼ平坦な地形をなすが、流路変更によって生じた段丘が隨所に認められる。

調査はグリット方式を用いた。グリットラインを、関東地区座標原点第IX系に従って合わせた。

グリットは1辺10mの大グリットを設定し、大グリット内を4分割し、1辺5mの小グリットを設け、各々a~dとした。

グリット名称は発掘区西端より東へ向かって1~60まで設定し、南から北に向かってイ~マを設定した。このうち、発掘区に系わるのはロ~マであり、全体測量図にはその旨を示した。また、小グリットは北西コーナー杭を基準とした。

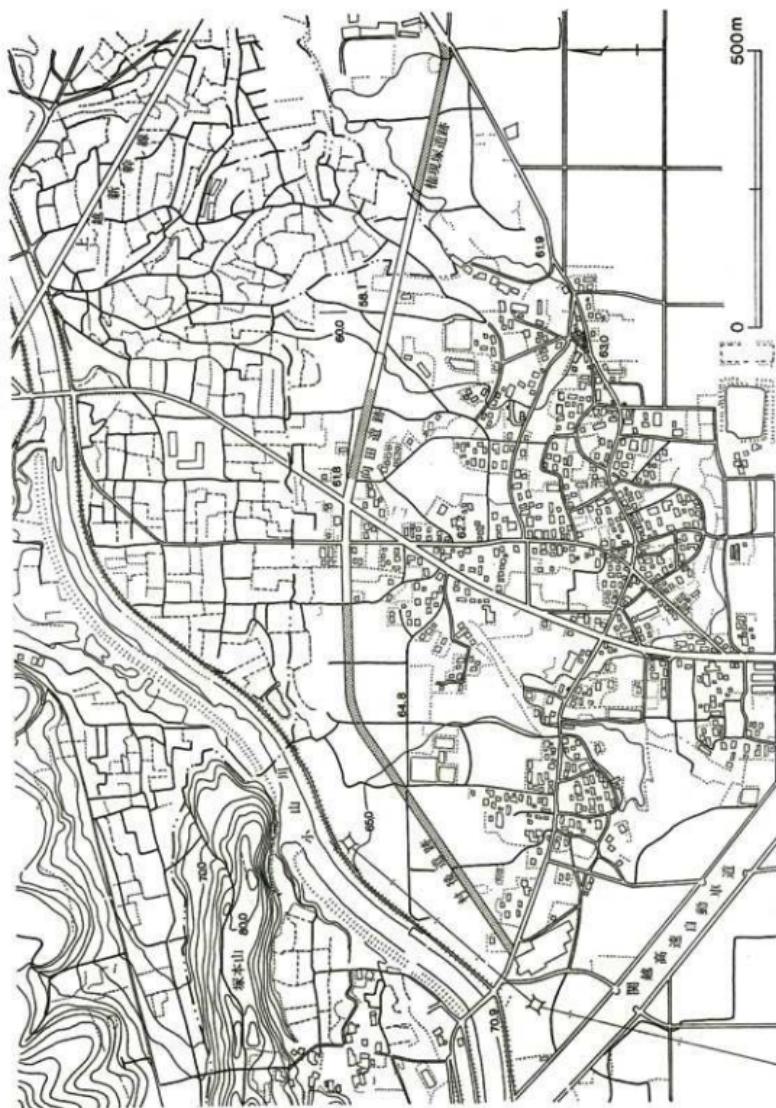
遺物は全てグリット単位で取り上げた。

調査区の基本土層は第27図に示した。土層は概ね砂粒を多量に含み、粘性に欠けるものと、粘性が強く、細砂を混入するシルト質土層とからなる。1~8層が前者に、9~12層が後者に比定されよう。このうち、古墳時代後期~奈良平安期の遺構は9層上面で確認された。弥生時代から古墳時代初頭の住居跡は更にその下層、13層で確認され、9層に対比される暗黒褐色粘質土を覆土に有していた。もとより、本地域は身飼川の氾濫源にあたり、各地区的微視的な土層堆積も一様ではないが、以上のような傾向が窺えた。

調査区域は幅12m、東西に800mを計り、発掘の進行上、更宜的に調査区を1~5区に分割した。

弥生時代の遺構は、25区から26区にかけてと、36区から37区にかけて2箇所で検出された。このうち、20~22号住居跡は、弧状に配列しており、周辺の地形確認を行ったところ、埋没谷に面した舌上の膨り出し部に位置することが明らかとなった。同様に、24号住居跡も、台地肩部に位置している。谷の最下層では弥生式土器、石器等が出土している。谷埋没土の珪藻分析によって、沼地状の地形を呈していたことが推定されている。

古墳時代初頭の遺構は、5区41~49区にわたって検出された。位置的には、谷を隔てた東側方向で、ほぼ平坦な地形を呈している。25~32号住居跡がこれに概当する。各住居跡とも隅丸方形を呈し、床面の状態も概ね良好で、地床炉をもつ。遺物は多くが覆土内からの出土であるが、32号住居



第26図 遺跡位置図

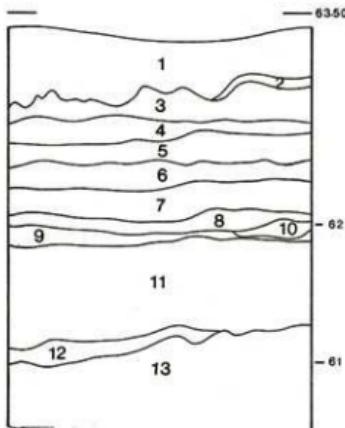
跡では、床面から、壁に接して多くの遺物が出土している。

方形周溝墓はハ～ニー41～44区にかけて検出された。遺構北側は調査区域外となっているため正確な形状は不明だが、周溝の配列から、前方後方形を呈するものと思われる。

1区から2区西端にかけては旧河道遺跡となっており、砂礫が厚く堆積しており、遺構等は検出されなかった。

6区は東側に向かってゆるやかに傾斜しており縄文時代早期の土壙1基が確認されたに過ぎない。遺跡全体の遺構配列を通観すると、谷を中心として、東西に2箇所の遺構配列のあることが目につく。谷形成の正確な時期は定かではない。しかしながら、最下層から、弥生時代中期後半の土器が単純に出土している点、また弥生期の住居跡が谷の肩部に沿うように位置している点は、概期に谷の地形的な制約が大きく作用していたことが推察されよう。また、カ-27a区においては、谷の下面より和泉期の土器群が集中して出土していたこと、古墳時代住居跡の確認面である暗黒褐色粘質土は、谷に向かって傾斜して落ちこんでおり、落ち込み部には、何等遺構等が検出されなかつたことは、少くとも古墳時代後半に至るまで自然地形の影響が強く、遺構もそれに沿って構築されていたであろうことは推察に難くない。

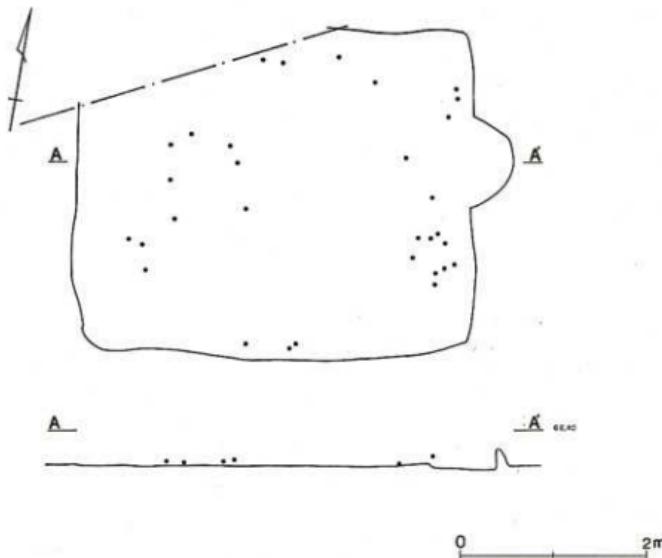
- 1層 耕作土
- 2層 赤褐色土（酸化鉄含みしまり強、粘性弱）
- 3層 黄褐色土
- 4層 黄色土層
- 5層 灰赤褐色砂質土
- 6層 暗灰褐色砂質土
- 7層 暗灰黄褐色砂質土
- 8層 灰褐色粘質土
- 9層 暗黒褐色粘質土
- 10層 灰黄黑褐色粘質土
- 11層 灰黒褐色粘質土
- 12層 暗青灰色粘質土
- 13層 球層



第27図 基本土層

2 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



第28図 第1号住居跡遺物分布図

第1号住居跡（第28～31図）

第2調査区西端Ⅰ—8区で検出された。本住居跡は調査区の最西端に位置する。

遺構は確認された時点で遺物の大半が露呈しており、精査したが壁の立ちあがりを確認することはできなかった。従って住居プランは遺物出土状態、柱穴配列などから推定復元した。

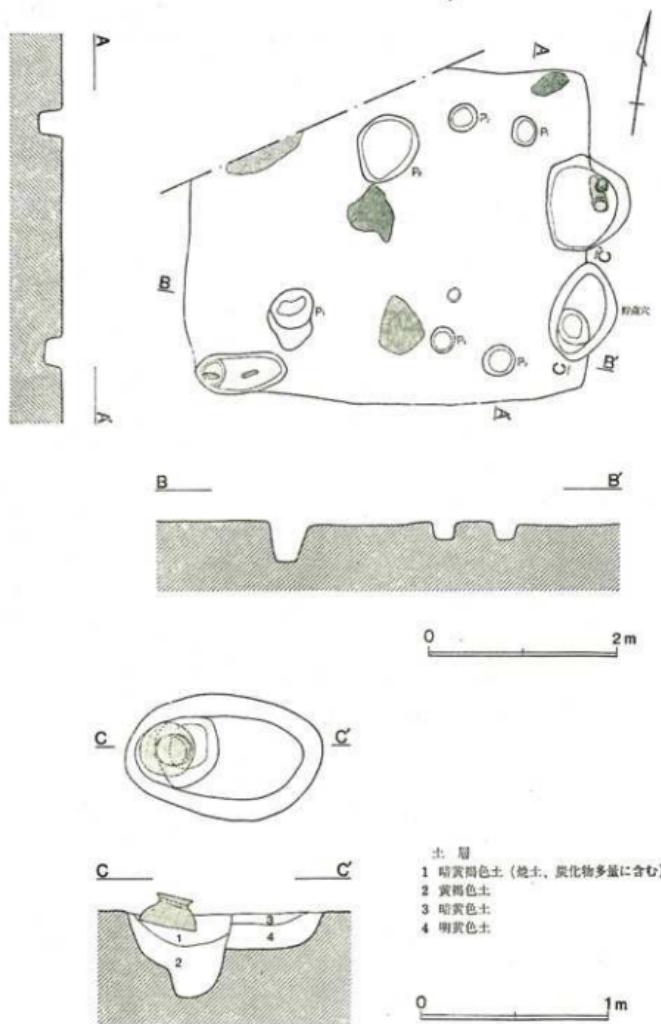
遺構は長方形プランが推定され、主軸はN—82°—Eにもつと思われる。

本遺構に伴なうと思われる柱穴は6個検出された。 $P_1—P_2$ と $P_3—P_4$ は併列して配されている。深さは $P_1=24\text{cm}$ 、 $P_2=20\text{cm}$ 、 $P_3=18\text{cm}$ 、 $P_4=20\text{cm}$ 、 $P_5=35\text{cm}$ 、 $P_6=38\text{cm}$ を測る。

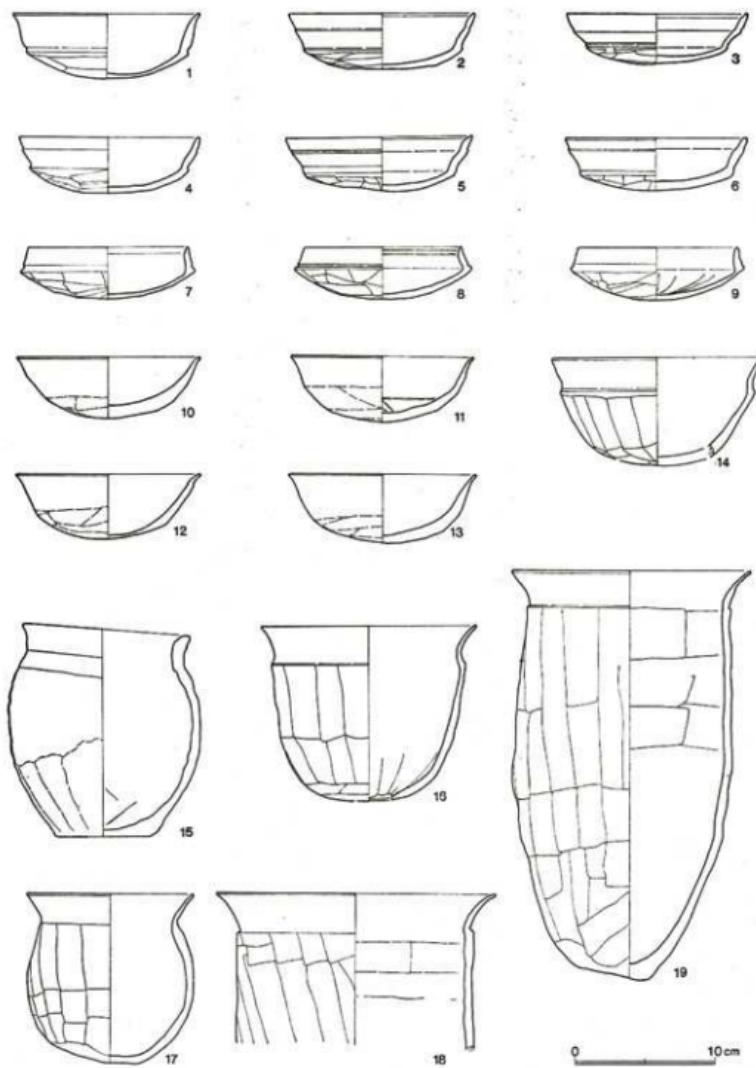
床面には焼土、炭化物がブロック状に堆積しており、部分的に火熱を受けた痕跡が認められる。

カマドは検出時に大半が損失しており、焼土の堆積が僅かに認められたに過ぎない。

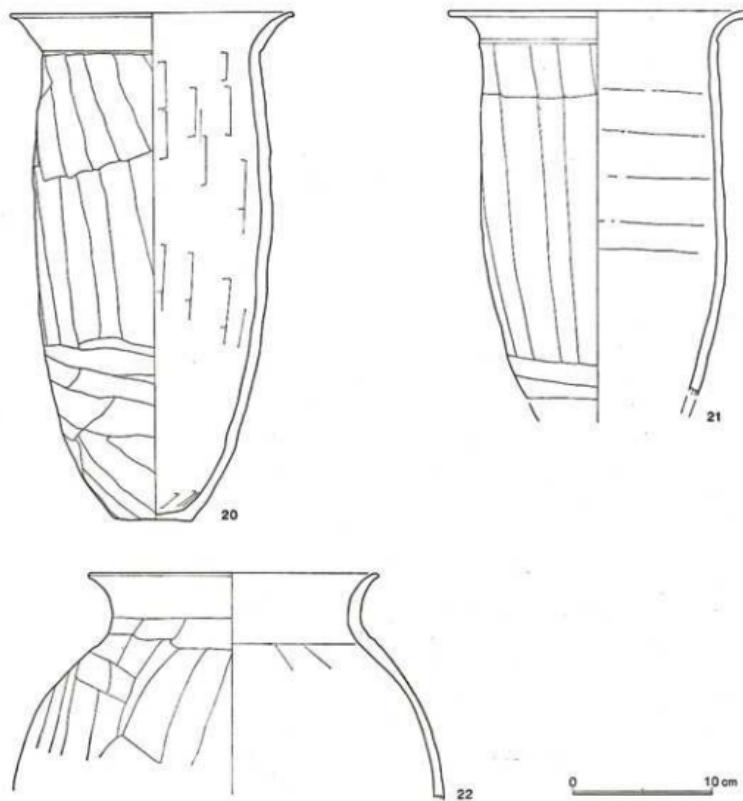
貯蔵穴は2基検出された。一基はカマド北側、他は P_3 に近接して検出された。



第29図 第1号住居跡



第30図 第1号住居跡出土遺物



第31図 第1号住居跡出土遺物

貯蔵穴は土壤と重複している。長径58cm、短径35cm、貯蔵穴部分の深さ42cmを測り長椭円形を呈する。

遺物は壺、甕、長甕、鉢など、床面上で多量に確認されているほか、貯蔵穴からは壺(第31図22)が検出されている。

第1号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 13.6 器高 4.7	口縁は円みをもち、端部が外反する。口縁に比して底部小さく、沈線彫り、稜をもつ。	口縁をつまみ上げるようにヨコナデ。底部は横方向のヘラケズリ	完
杯	2	口径 13.5 器高 4.1	口縁は外反し、口唇端は尖り気み内面にゆるやかな稜。立ち上がり有段。底部は平底気味。	口唇端つまみ上げるようにヨコナデ。内面はナデ。底部はヘラケズリにより平底気味に作出。	完
杯	3	口径 13.2 器高 3.7	口縁は内彎気味に立ち上がり、端部は平坦、立ち上がり有段。底部は丸底気味。口唇内面に稜をもつ。	口唇端部をつまみ上げるようにヨコナデ、内面ナデ、底部はヘラケズリにより丸底気味に作出。	完
杯	4	口径 13.1 器高 4.0	口縁は丸味をもって外反し、有段、底部は鋸い稜をもち、丸底気味。	口縁はヨコナデ。底部を沈線より稜を作出、底部は横方向のヘラケズリ。	完
杯	5	口径 13.6 器高 3.9	口縁は直線的に外反し、棒状工具による沈線により段を併出。底部は平底気味。口唇内面に稜をもち口縁内面は凹凸を有する。	口唇端をつまみ上げるようにヨコナデ。底部はヘラナデを加え稜線を作出、底部は横方向のヘラケズリ。	完
杯	6	口径 13.2 器高 3.8	口縁は丸味をもって外反、口縁上部にゆるい段をもつ。底部は段をもち、平底気味となる。	内面ヨコナデ。口縁をヨコナデ、底部上面にヘケナデを加え、底部は横方向にヘラケズリを施す。	完
杯	7	口径 11.7 器高 3.8	口縁は直線的に内反し、内面端部に段をもつ。円底気味の底部を有し、肩部に沈線を彫らせ、稜を作出。	口唇をつまみ上げるようにナデを施す。底部は横方向のヘラケズリ。	完
杯	8	口径 11.5 器高 3.8	口縁内反。立ち上がりに段をもつ。口唇端は内そぎ状で、内面に2条の稜をもつ。底部丸底気味。	口縁ヨコナデ。立ち上がり部にヘラナデを加える。体部は横方向のヘケケズリ。	完
杯	9	口径 11.7 器高 3.8	口縁内反し、端部直立。立ち上がりに沈線が彫り、段をもつ。	口縁ヨコナデ。体部内面に方射状に暗文をもつ。体部横位のヘラケズリ。	口縁一部欠
杯	10	口径 13.5 器高 4.4	直線的に開き、端部外反する。全体的に厚み強い。	内面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ後軽くナデられている。	口縁一部欠 カマド内
杯	11	口径 13.3 器高 4.8	やや円味をもって外反。口端薄く外反する。	内面下半ヘラナデ、上半は横方向のナデ。	完 カマド内
杯	12	口径 13.4 器高 4.8	直線的に開き、端部やや外反する。内面上端にゆるい稜をもつ。	内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ整形。	完 カマド内

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	13	口径 13.7 器高 5.0	直線的に開き端部外反。口唇平坦。厚手のつくり。	内面ナデ、外面ヘラケズリ後全体をナデている。	完 カマド内
	14	口径 15.4 現存高 7.3	立ち上がりに段をもち、直線的に開く。内面にゆるい稜をもつ。	内面ヨコナデ。外面口縁ナデ。体部は縱方向のヘラケズリ。	底部欠
鉢	15	口径 12.3 器高 15.8	口縁は直立し、端部で外反する。最大径を胴上部にもつ。口縁内面に段をもつ。	内面胴部はヘラナデ、口縁ヨコナデ。外面胴上部は丁寧にナデられ、下半にヘラケズリ痕僅かに残る。	完
	16	口径 15.7 器高 12.4	立ち上がり有段で口縁部は丸味をもち外反。ゆるやかに底部に移行する。	内面体下半にヨコナデ残る。上半口縁部はヨコナデ、体部外面縦位のヘラケズリ。	完
甕	17	口径 12.1 器高 12.5	口径と胴部最大径ほぼ等しい。ゆるやかな段をもち、直線的に外反口唇端鋸角、器厚比較的薄い。	内面は丁寧にナデられている。口縁ナデ、体部は縦位のヘラケズリ。	一部欠
長甕	18	口径 20.5	体部に沈線が廻り鋸い段を作出 口縁は丸味をもって外反する。	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ 胴部斜位のヘケケズリ、内面輪郭み痕残る。	体上部残
長甕	19	口径 17.5 器高 29.6	立ち上がりに段をもつ。口唇は内面頗氣味、最大径を口縁に有し底中央部でゆるやかに底部に移行する。	内面に接合時の凹凸残す。内面ヘラナデ、外面口縁ナデ、体部ヘラケズリ、風化著しく、下半部は不明瞭である。	完 カマド内
長甕	20	口径 20.8 器高 36.8	最大径を口縁にもつ。口縁は外反し、端部は強く外方に反る。体中央で若干影り、ゆるやかに底部に移行する。	内面ヘラナデ、口縁は端部をつまみ上げるようにヨコナデ、外面体部ヘラケズリ。	完
長甕	21	口径 2.2 器高 28.3	口縁は強く外彎し、口唇は平坦 下半でやや彎る。最大径を口縁に有する。	内面ヘラナデ、下半は風化のため不明瞭、外面体部縦位のヘラケズリ底部近くで横位ヘラケズリ。	底部欠
甕	22	口径 20.3	最大径を体部にもつ。口縁は一旦強くすぼまり外彎する。口唇は丸味もつ。	口縁ナデ、体部ヘラケズリ、内面、ヘラナデ痕る。	ピット内 体下半欠

第2号住居跡（第32～34図）

第2調査区ウー9～10区にかけて検出された。住居跡北西コーナーが調査区域外となっている。

住居跡は長方形プランを呈し、長径4.2m×短径3.4mを測り、主軸はN-73°-Eである。

壁高は西側で5cm、東側で10cmを測り全体に極めて浅い掘り込みであった。

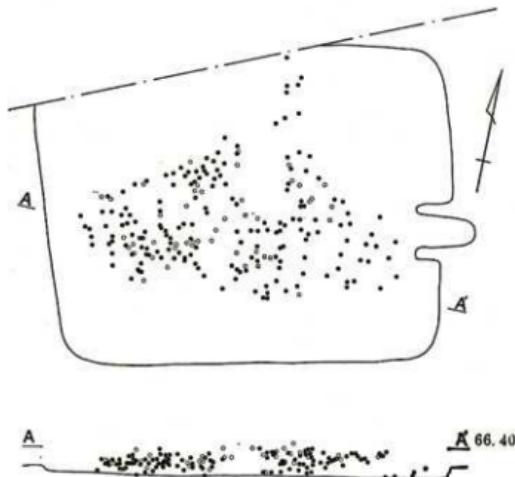
柱穴は7個確認された。 P_1 ～ P_6 は壁に沿って掘り込まれ、いずれも深さ10cm前後の掘り込みを有する。 P_7 は本址に伴なうものか疑がわしい。

床面は凹凸が顕著であるが踏み固められた状態を呈してはいない。

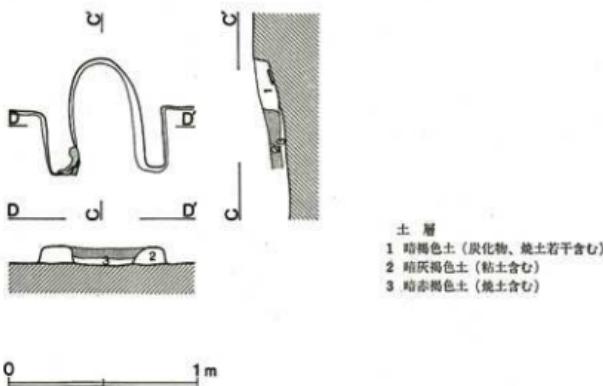
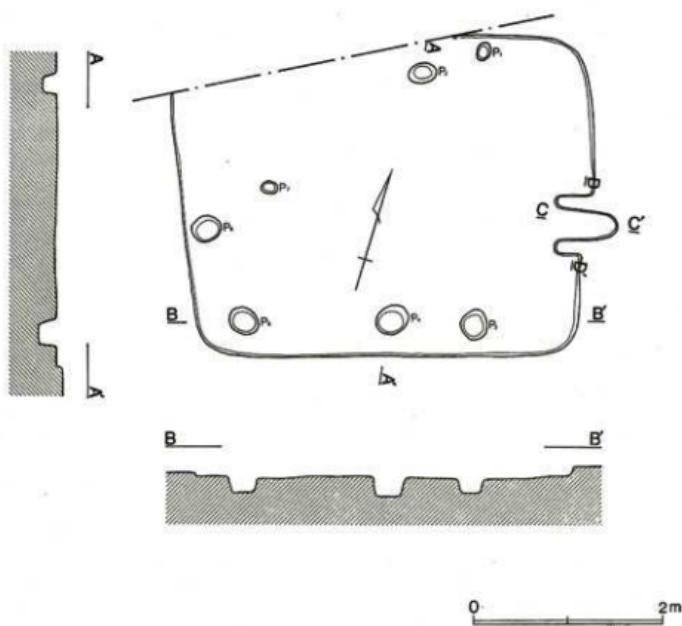
カマドは東壁南寄りに構築されている。据部は壁面より30cm程度膨り出して作出され、焚き口から煙道部にかけてゆるやかな傾斜をもち、煙道部先端で直に立ち上がる。

覆土は燃焼部に浅く焼土が堆積しており、天井部の崩落したものと思われる。焼土を小ブロック状に含んでいる。

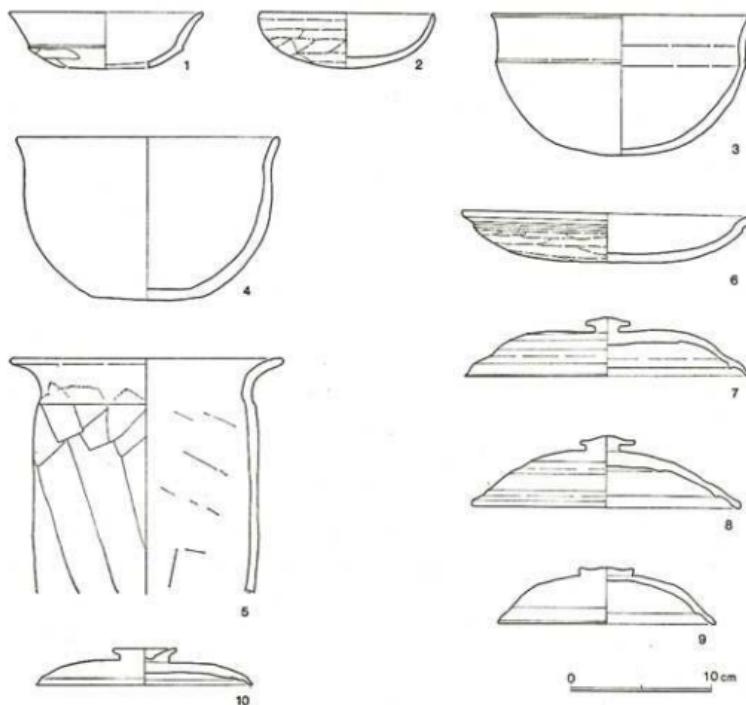
遺物は覆土内から壺、須恵器蓋、鉢、長甕等が出土している。全体に濃密な分布を示しているが流れ込んだような状態を呈し、細片が多く、図示し得る資料は少なかった。



第32図 第2号住居跡遺物分布図



第33図 第2号住居跡

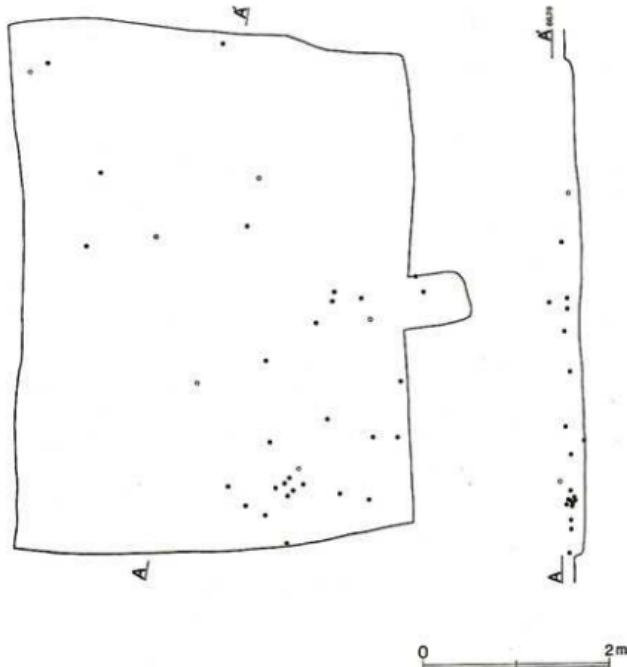


第34図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 14.0 現存高 3.9	口縁は有段で外反し、端部すぼまる。体部は屈曲する。底部欠損し形状不明。	内面ナデ。体部横位ヘラケズリ	完
杯	2	口径 12.7 器高 4.0	底部よりゆるやかに立ち上がり、口唇は内傾する。丸底を呈する。	内面ナデ、外面口唇ナデ、体部はヘラケズリ。	完
鉢	3	口径 16.0 器高 10.1	体部に段をもち、口縁は外反、端部は丸味をもつている。	風化著しく外面は不明、内面は下半にヘラナデ痕僅かに残る。	殆残
鉢	4	口径 19.0 器高 11.7	体部上半で直立し、口縁はゆるく外反、内面に弱い稜をもつ。底部は平底。	器面荒れている。輪積み痕若干残る。内面は丁寧なナデ外面体下半ヘラケズリ後、全面をナデる。	殆残。

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕	5	口径 19.8 現存高 16.7	最大径を口縁部にもつ。口唇は強く外反する。立ち上がりに弱い稜をもつ。	内面ヘラナデ底もつ。上半は比較的丁寧にナデられる。口縁横ナデ体部ヘラケズリ。	体下半欠
杯	6	口径 21.2 器高 3.5	盤状を呈し、口縁に沿って浅く凹線を廻らせ稜を作出。	体部上半横位ヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデ。	殆残
蓋	7	口径 20.8 器高 4.3	つまみは扁平で中央部膨る。天井部は平坦で体裾部で屈曲し、口端は外方に膨る。内面にかえりをもつ。	ロクロ成形、天井部周辺は回転ヘラケズリ、体下半へ口端はナデ成形。	完
蓋	8	口径 16.5 器高 5.2	つまみは扁平で中央部やや突出天井部から体部にかけてゆるやかに彎曲、口端でくびれ、端部は肥厚、内面にかえりもつ。	ロクロ成形、天井部体上部にかけ回転ヘラケズリ、天井部内面に指頭圧痕残る。	一部欠
蓋	9	口径 15.2 器高 4.0	つまみは中央部やや突出、天井部に台状に接合、体部からゆるやかに彎曲し、口端でやや外反する。内面にかえり有する。	ロクロ成形。天井部～体上部にかけ回転ヘラケズリ。天井部内面に指頭圧痕残る。	一部欠
蓋	10	口径 15.7 器高 2.6	つまみは外反し、中央部凹む。口端は内横気味に立ち上がる。かえりは消失、浅い沈線が2条残る。	ロクロ成形、つまみ周辺回転ヘラケズリ、内面天井部に指頭圧痕残る。肉厚。	一部欠



第35図 第3号住居跡遺物分布図

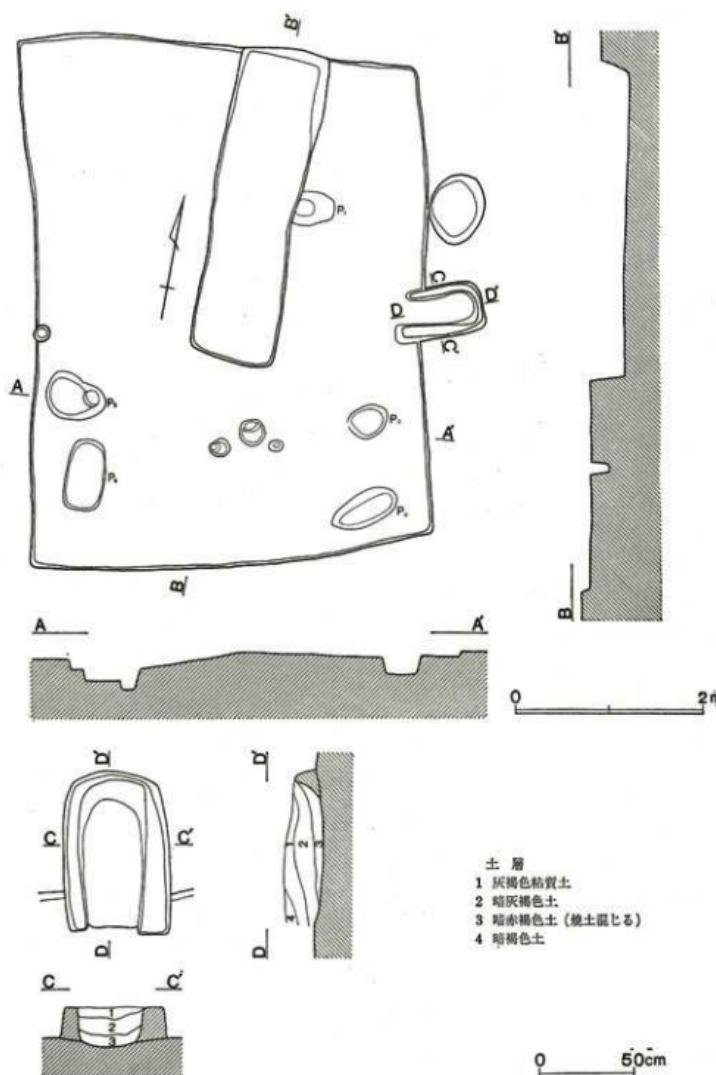
第3号住居跡（第35～37図）

第2調査区西端エ一9～10区にかけて検出された。N-78°-Eを主軸にもつ。

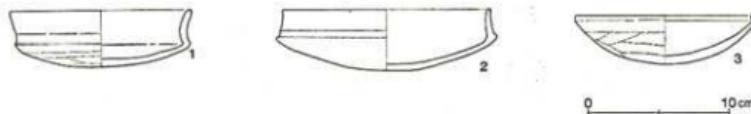
造構は東壁5.0m、北壁5.6m、南・北壁が各々4.3mを測り、台形状のプランを呈する。

西壁中央部から北西コーナーにかけて膨り出し氣味となるほか、東壁中央部から南東コーナー部に向かってゆるくくびれ、南・北壁は若干丸味をもっている。

壁高は10cm前後を測り浅く、発掘調査時の所見では、地山・覆土ともに暗黒褐色粘質土で、覆土に砂粒がやや多く含まれていた。



第36図 第3号住居跡



第37図 第3号住居跡出土土器実測図

第3号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 13.2 器高 3.5	立ち上がり有段で、口縁はゆるやかに外反し、端部は直立気味となる。底部は丸底気味。	内面ナデ、外面口縁ナデ、体部は横位のヘラケズリ、暗褐色。	完
杯	2	口径 15.2	立ち上がりに沈縁が廻り、段をもつ。口縁は内傾、丸底気味の底部を有する。	内面、口縁部ナデ、体部ヘラケズリ、風化著しい。黄褐色。	欠
杯	3	口径 13.0 器高 3.5	ゆるやかに立ち上がり、口縁は内側する。	内面、口縁ナデ、体部ヘラケズリ、風化著しい。黄褐色。	完

第4号住居跡（第38～39図）

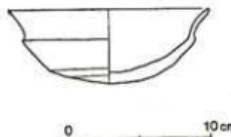
第2調査区東端ラー13区から第3調査区西端ラー14区にかけて検出された。

4号住居跡は長径4.4m×短径5.3mの長方形プランを呈し、住居跡東壁から南壁にかけて、後述する第9号住居跡に切られている。この部分には一部焼土の堆積が認められ、カマドの存在が推定される。

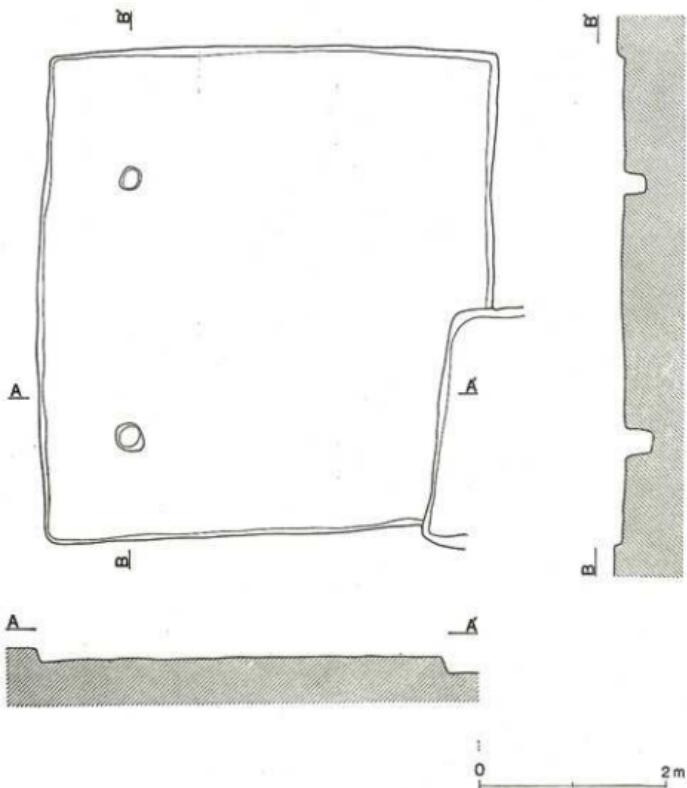
壁高は全体に10cm前後と浅い。床面は、地山が暗黄色の砂質粘質土であり、砂粒分が多いため明確に検出することはできなかった。

本住居跡に伴なうと思われる柱穴は2箇所で検出されたが（P₁・P₂）、東壁側では検出されなかった。P₁、P₂とも径は20cm程度で、床面からの深さは25～30cmをはかる。

覆土は灰黄褐色砂質土一層のみで、覆土中に土師器破片が僅かに混入していた程度である。本住居跡に伴なう遺物は、住居跡北東コーナーに、杯が一点出土したに過ぎない（第38図）。



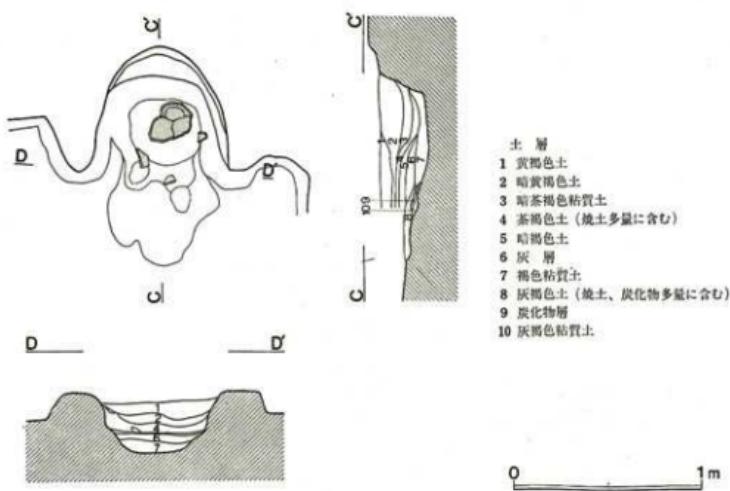
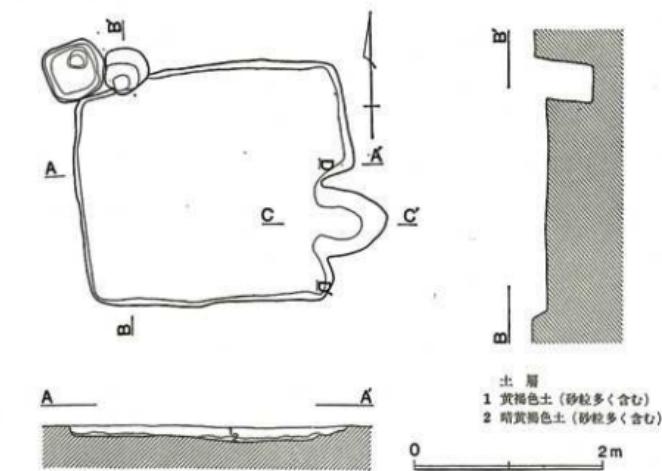
第38図 第4号住居跡出土遺物



第39図 第4号住居跡

第4号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形・態の特徴	手 法 の 特 徴	備 考
坏	1	口径 14.4 器高 5.3	体部肉厚で、丸味をもってゆるく開く。立ち上がりに強い段をもち口縁は外反して開く。口縁部肉薄暗褐色。小縫多量に含む。	内面、口縁部ヨコナデ、体部は立ち上がり部にかけて幅広いヘラケズリ、底径周辺狭いヘラケズリ	完



第40図 第5号住居跡

第5号住居跡（第40～41図）

第2調査区西端ナ—14区で検出され、6・7号住居跡、4、8、9、10号住居跡に近接しており、後述する第10号住居跡の形状とほぼ等しい。

本住居跡は長径3.0m、短径2.5mの隅丸長方形プランを呈し、北西コーナー部はピットによって壁の一部が切られている。

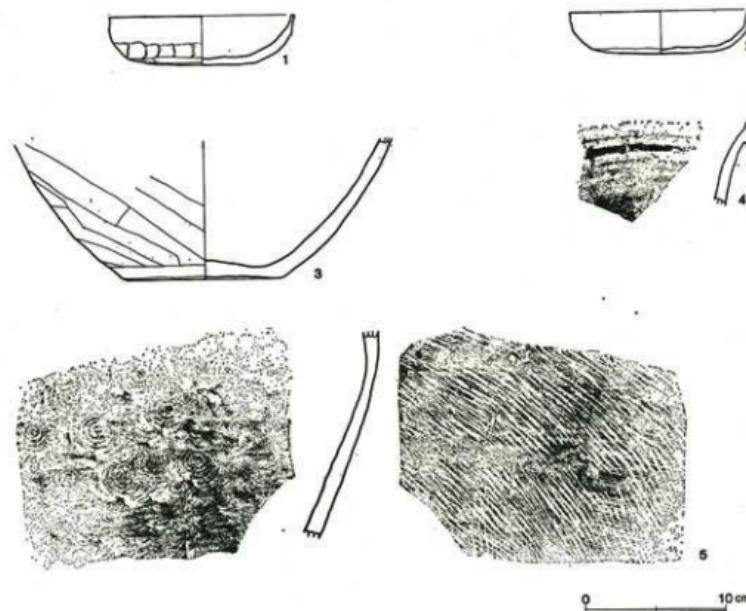
壁高は10～15cm程度をはかる。床面中央部はやや窪んでいる。

住居跡覆土は2層で、いづれも砂質土からなり、覆土内からの遺物の出土は極めて貧弱であった。

カマドは東壁南側のコーナーに接して構築されており、平面形は橢円形を呈する。焚き口部は若干傾斜し、燃焼部は床面より約20cm程度掘り窪められており、凹凸が顕著である。裾部は住居掘り込みの際、同時に作成されたと思われる。内側に膨り出しを有する。

カマド覆土は10層からなるが、焼土層は焚き口部に僅かに認められた程度である。

図示した遺物は全てカマド覆土内からのものである。カマド覆土最下層からは他に須恵器底部、胴部破片が出土している。



第41図 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 13.5 器高 3.6	ゆるやかに立ち上がり、口縁は直立気味で薄くなる。端部で若干肥厚する。暗褐色。胎土細。	面内ナデ、外面底部にヘラケズリ痕残る。体部に指頭圧痕残る。全体ナデられている。	14残。
杯	2	口径 13.2 器高 3.2	底面より内灣気味に立ち上がり、口縁は若干外反する。全体に薄手のつくり、黄褐色。砂粒多。	1とほぼ同じ、口端をつまむようにヨコナデする。内外よくナデられ部分的に指頭圧痕残る。	口縁一部欠
甕	3	底径 11.5 現存高10.0	須恵器甕の底部、中央部が肥厚する。底部凹凸残る。底部周辺に部分的にタタキ目残す。青灰色。砂疊多。	粘土巻き上げ、内面ヨコナデ、成形時の凹凸残す。外側はタタキ目を施した後、斜位にヘラケズリ	底部完 カマド内
甕	4		甕口縁部、口縁端部肥厚し鋭く外方に膨りす。口端鋭く直立気味。内面浅いくびれもつ。青灰色。砂疊多。	粘土巻き上げ、成形後ヨコナデ	口縁部破片
甕	5		胴部破片、内面同心円状のタタキ、外側斜方向のタタキをかえる。器面凹凸顯著。青灰色。砂疊多。	粘土巻き上げ、内外ナデの後、タタキ整形。	胴部破片

第6・7号住居跡（第42～45図）

第3調査区西端ナ-14、15区で検出された。遺構大半はナ-14区に位置する。

6号住居跡北西部に7号住居跡が重複しており、両住居跡とも北側は8号溝によって切られている。

6号住居跡の大半は調査区域外にあるため、全容を明らかにすることはできなかった。

7号住居跡は、南壁が4.1mをはかり、僅かに弧状を呈する。床面は西側から東側に向かってゆるやかな傾斜を示し(A-A')、南壁から西壁にかけて中央部よりも若干高まりをもつ。確認面からの壁高は全体に25cm前後を測る。

柱穴はP₁～P₂が確認された。P₁、P₂共接して掘り込まれており、床面からの深さは10cm前後と浅く南壁中央部に位置し、本住居跡に伴なうか否か不明である。

カマド南側で検出された貯藏穴は径50cmで橢円形を呈し、床面から25cm程度掘り窪められている。

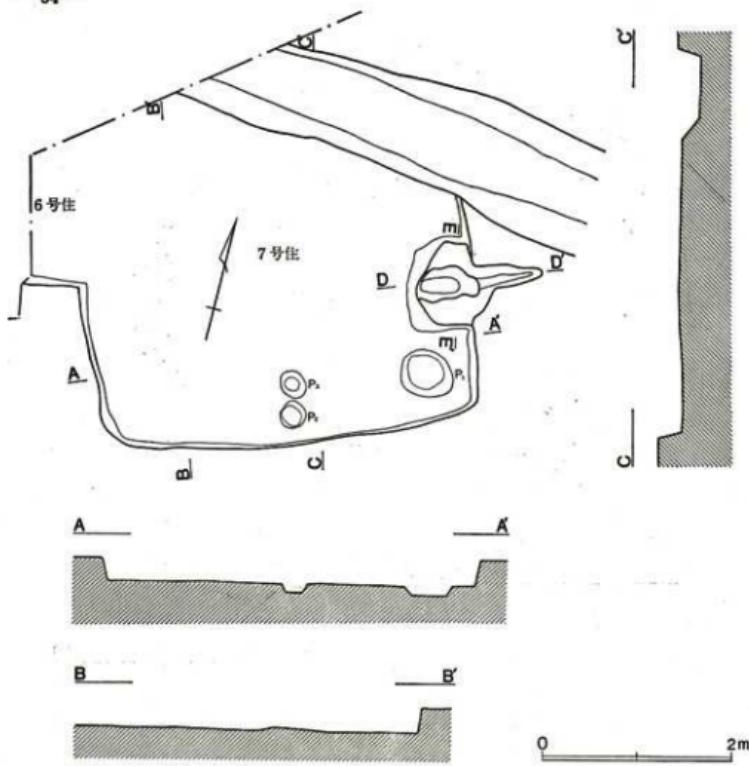
カマドは6号住居跡にのみ検出された。東壁南側コーナーに近接して構築されており、椎部は50～60cmで粘質土をつみあげて構築されている。燃焼部は一段深く掘り窪められ、煙道部に向かってゆるやかに立ち上がる。煙道部は住居外に70cm程度浅く掘り込まれて作土されている。カマド内から高环脚部が検出された。



第42図 第6・7号住居跡遺物分布図

遺物は遺構中央部に集中して検出されたが、全体に散漫な出土状態であり、器形を推定し得る出土遺物は少なかった。

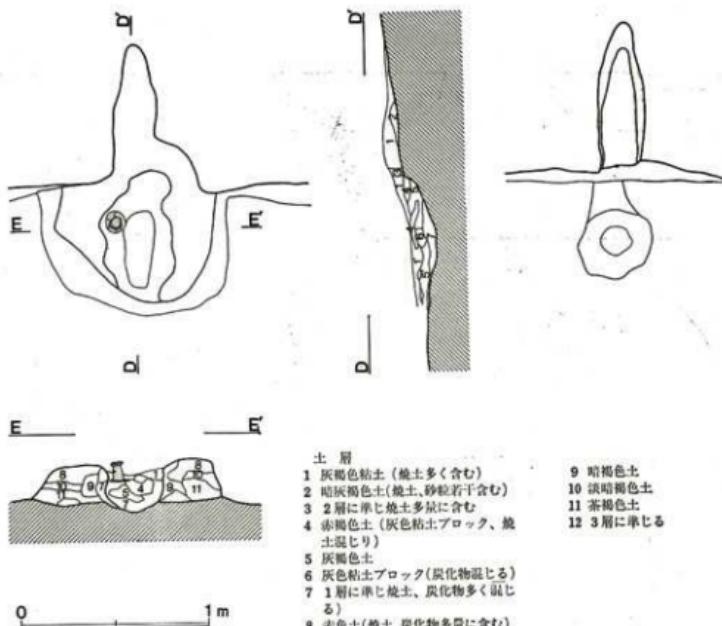
6・7号住居跡の切り合い関係は、両者の覆土とも暗黄褐色砂質土で、不明確であった。遺物の出土位置、床面の状態、出土遺物などから7→6号住居跡と推定される。



第43図 第6・7号住居跡

第6・7号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 12.6 器高 4.2	立ち上がり有段で口縁短かく、 弱い棱をもつ。直立気味に立ち、 端部はやや外反する。丸底量する。 明褐色、胎土細。	体部へラケズリ、内面ナデ、口 縁は横方向のナデ。	1/2残 6住
坏	2	口径 12.6 器高 4.3	丸底量し、立ち上がり若干膨る。 口縁外傾、端部肥す。暗黄褐色 胎土細。	外面幅狭いへラケズリ斜位に施 こす。立ち上がり部横へラケズリ、 内面体部ナデ、口縁丁寧なヨコナ デ。	完 6住
坏	3	口径 10.9 器高 7.3	立ち上がりに段をもち、口縁内 傾端部で外反する。体部は膨り氣 味で扁平気味な丸底へ移行する。 暗褐色。胎土細。	内面ナデ、体部外面横方向へ ラケズリ、口縁内外ヨコナデ。	1/2残、底面 欠 6住



第44図 第7号住居跡カマド

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	4	口径 23.2 現存高 9.5	体部上端ですぼまり、口縁は外傾端部で直立気味になる。くびれ部に3本の平行沈線横走する。最大径を体中央にもつものと思われる。暗黄褐色。砂疎多。	体部内面ヘラナダ痕あり。外面ヘラケズリ、風化著しい。	残 6住
甕	5	現存高15.5	体下半のみ。平底呈し、丸味をもって立ち上がる。内面接合痕残す。黒褐色。砂疎多。	内面ナデ、輪積み痕一部残る。外面ヘラケズリ後ナデ。	体上半欠 6住
杯	7	口径 9.7 器高	立ち上がりに段をもち、口縁外反端部は直立気味となる。体部は円窓もち、丸底呈する。黄褐色、砂粒多。	内面体部ヘラナダ残る。外面体部横方向のヘラケズリ、口縁ナデ。	残 7住



第45図 第6・7号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坏	8	底径 11.2 脚部高 9.4	底面は幅短かく、ゆるやかに開く端部は肥厚する。脚部は円筒状をなし、直線的に立ち上がる。暗黄褐色。胎土細。	脚内面シボリ上をヘラナデ、底部内面はヘラナデを横位に施す。脚部はヘラミガキ、底面内外丁寧にナデ。	カマド内 7住
	9	口径 10.1 器高 3.9	口縁短かく内傾、端部は内削ぎ状を成す。体部ゆるやかに彎曲し、丸底呈する。灰褐色。胎土細。	体部内面ナデ、外面不整方行のヘラケズリ後、全体ナデる。口縁ヨコナデ。	一ロ縁一部欠 7住
坏	10	口径 11.4 器高 5.0	手捏ね状で、器面凹凸著しい。底部より直線的に立ち上がり、口端削ぎ状呈する。底部上げ底気味明褐色。砂粒多。	内面のみナデ整形、外面は成形時の指頭圧痕残す。底部周辺に僅かにヘラケズリ施す。	完 7住
	12	口径 10.1	体上部に最大径有し、上端ですばり、口縁はゆるやかに外反する。灰黄色。胎土細。	内面へケナデ痕残る。外面風化著るしく不明。	体下半欠 7住

第8・9・10号住居跡（第46～50図）

第2調査区東端テー14～15区で検出された。8号住居跡の東壁部分のみテー15区に位置する。

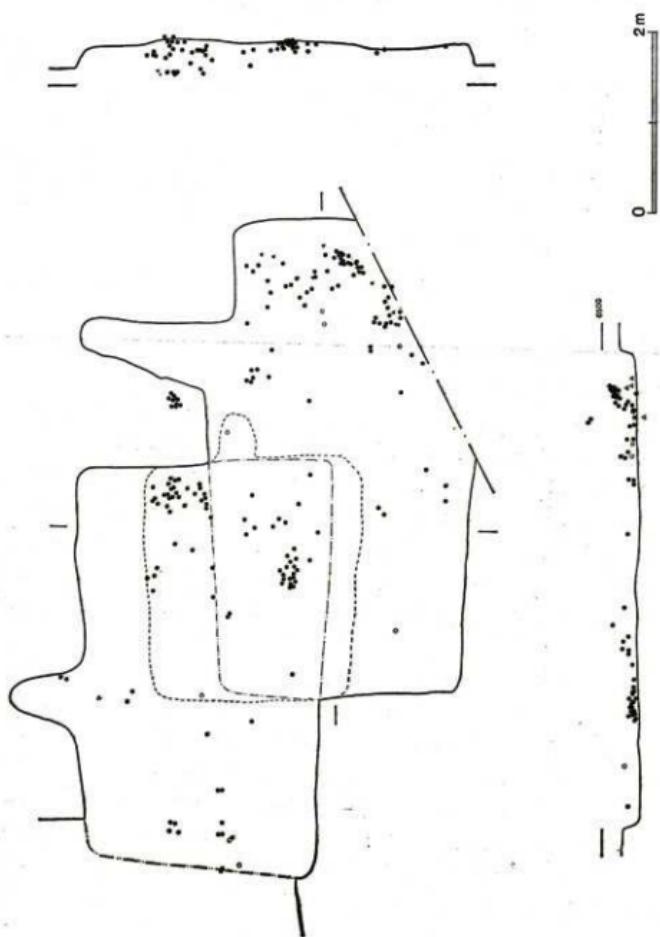
3軒の重複から成り、8・10号住居跡は主軸、住居跡プランともに酷似している。

8号住居跡は主軸をほぼ座標北にもつ。造構西側は9・10号住居跡と重複し、南東コーナー部分は調査区域外となっている。検出された部分から全容を推定すると、長径5.3m×短径3.0mの長方形プランを呈するものと思われる。壁高は15～17cmを測り、床面は住居跡西側、8号住居跡と接する付近ではよく踏み固められている。全体に凹凸が顕著である。カマド東側に貯蔵穴をもち、長径73cm×短径40cm、深さ52cmの長方形を呈する。カマドは北壁東寄りに位置し、黒褐色粘質土を積み上げて構築している（第53図）。

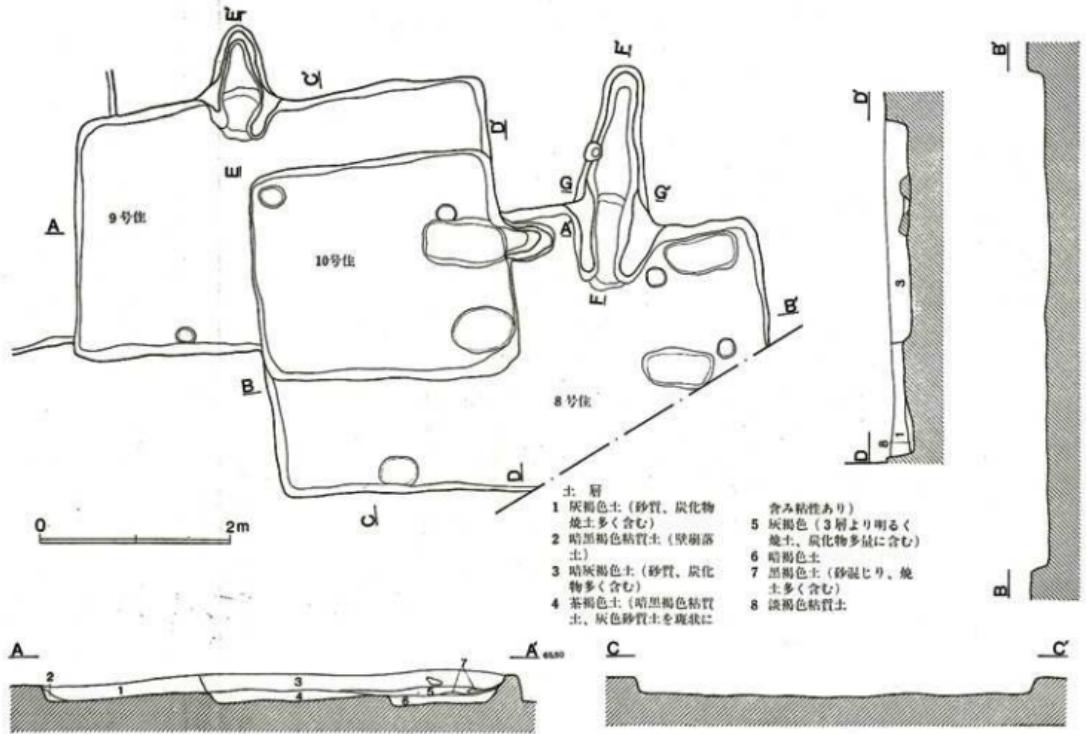
10号住居跡は東南コーナー部 8、9号住居跡と、西壁は4号住居跡と重複する。主軸は9号住居跡と同一方向を示す。長径4.4m×短径2.7mの長方形プランを呈し、8号住居跡よりやや小形である。壁高は15cm前後を測る。床面はよく踏み固められており、東側から西側にゆるい傾斜をもつ。カマドは北壁西側寄りに位置し、黒褐色粘質土を積み上げて構築している。

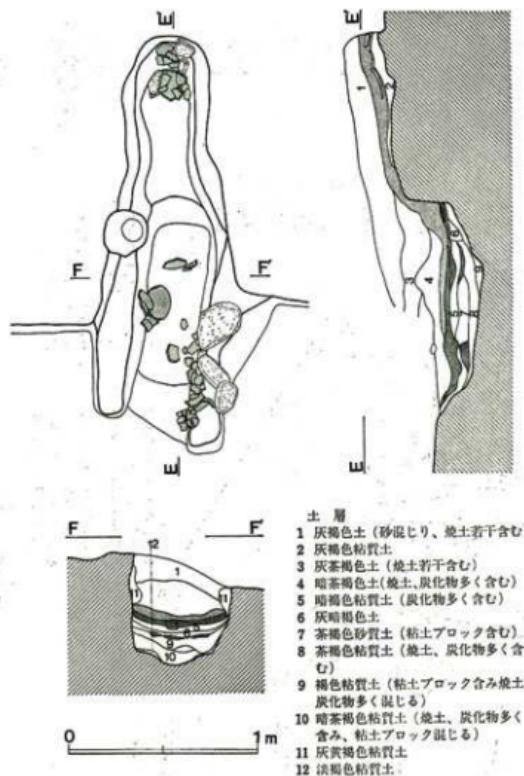
9号住居跡は、8、10号住居跡と重複し、N-13°-Eに主軸をもつ。10号住居跡と重複しているため、立ち上がりを明確に検出できなかったが、長径2.6m×短径2.4mを測り、正方形に近いプランをもつものと思われる。カマドは8号住居跡覆土上に構築され、焼土、炭化物とも貧弱であり、5号住居跡に形態が酷似している。遺物は8号住居跡に最も多く、9、10号住居跡は貧弱であった。

土層観察の結果、住居跡は8→10→9号住居跡への新旧関係が確認された。



第46図 第8・9・10号住跡遺物分布図

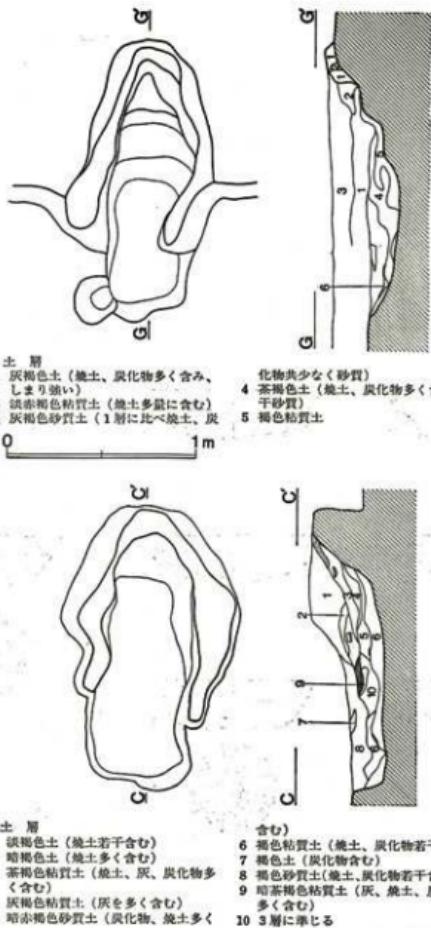




第48図 8号住居跡カマド

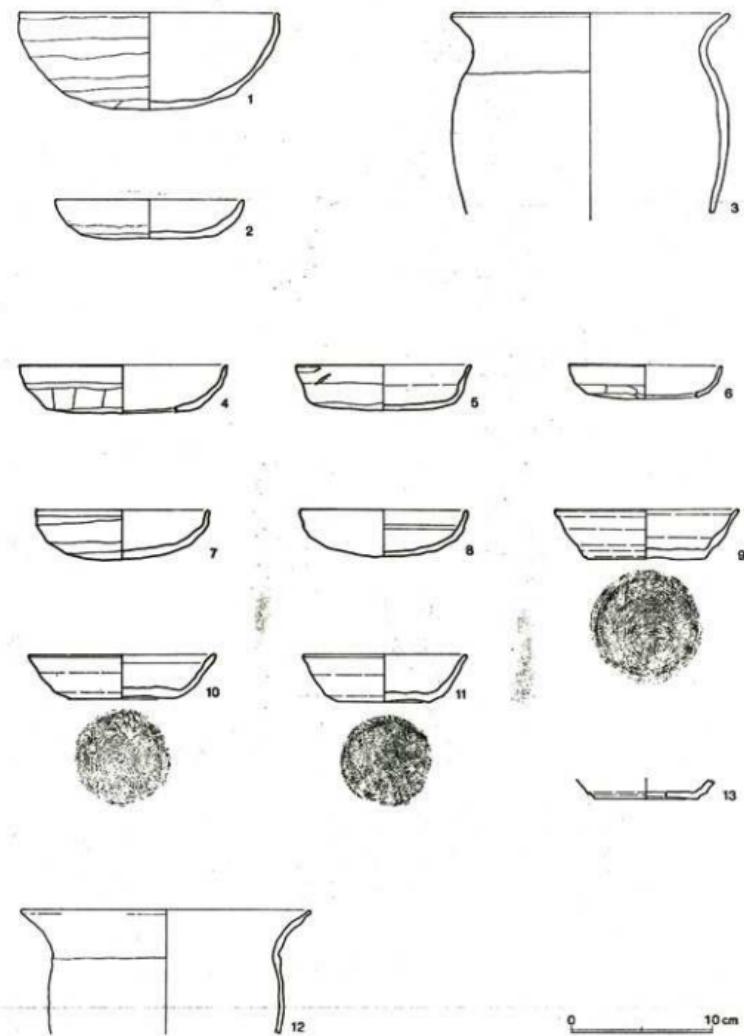
第8・9・10号住居跡出土土器

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	口径 1.88 器高 7.0	内輪気味に立ち上がり、口縁は内傾、口端は若干外反する。底面は平底を呈す。明褐色。	体部外面は横位のヘラケズリ。 内面、口縁は丁寧にナデられる。 輪積み痕残す。明褐色。	8住
杯	2	口径 13.7 器高 2.8	底部よりゆるやかに立ち上がり、口縁は直立気味となる。明褐色。	外面へケケズリ後ナデ、内面は丁寧。	8住
長甕	3	口径 20.2	最大径を腹部にもつものと思われる。立ち上がり段を有し、口縁は強く外反する。暗褐色。釉土被。	内面へラナゲ痕僅跡に残かる。 外	殆ど 8住



第49図 第9・10号住居跡カマド

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕 12	口径 21	立ち上がり段をもち、口縁は強く外傾、端部は若干内湾気味となる。	内面へラナナデ痕僅かに残る。外面へラケズリ後、全面に丁寧なナデを。	口縁16残 8住



第50図 第8・9・10号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	4	口径 13.5 器高 3.6	肥厚やや浅い坏、直線的に開き、口端若干上げ底。暗灰黒色。	ロクロ成形、内面体下半に指頭圧。	口縁丸残 9住
坏	6	口径 12.6 器高 3.6	ゆるやかに立ち上がり、口縁は若干外反する。黄褐色。胎土細。	内面は丁寧なナデ、外表面部は幅の広いヘラケズリ。	9住
坏	7	口径 13.3 器高 3.5	平底をなし、直線的に立ち上がる。体中位、端部で肥厚。	内面ナデ、外表面へラケズリ後、全体にナデ。	む 9住
坏	8	口径 12.0 器高 3.5	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は若干外反する。青灰色、胎土細。焼成良好。	内面ナデ、外表面部へラケズリ後、全体にナデる。	9住
坏	9	口径 12.0 器高 3.5	体部よりゆるやかに立ち上がり、口縁に至る。口唇は内そぎ気味、内面に浅い2条の窪をもつ。	ロクロ成形。回転、底部回転系切り後、周辺をヘラナデ。	9住
坏	10	口径 12.8 器高 3.3	平底底部より外反気味に立ち上がり、口縁は外反、口縁は肉薄。	ロクロ成形、一回転、底部回転系切り後、周辺部へラナデ、体下半へラケズリ。	10住
坏	11	口径 13.2 器高 3.5	体部は直線的に開く。口縁は外反弱く、端部でやや外方に膨る。	ロクロ成形、内面ナデ、底部回転系切り後、周辺部へラナデ。	

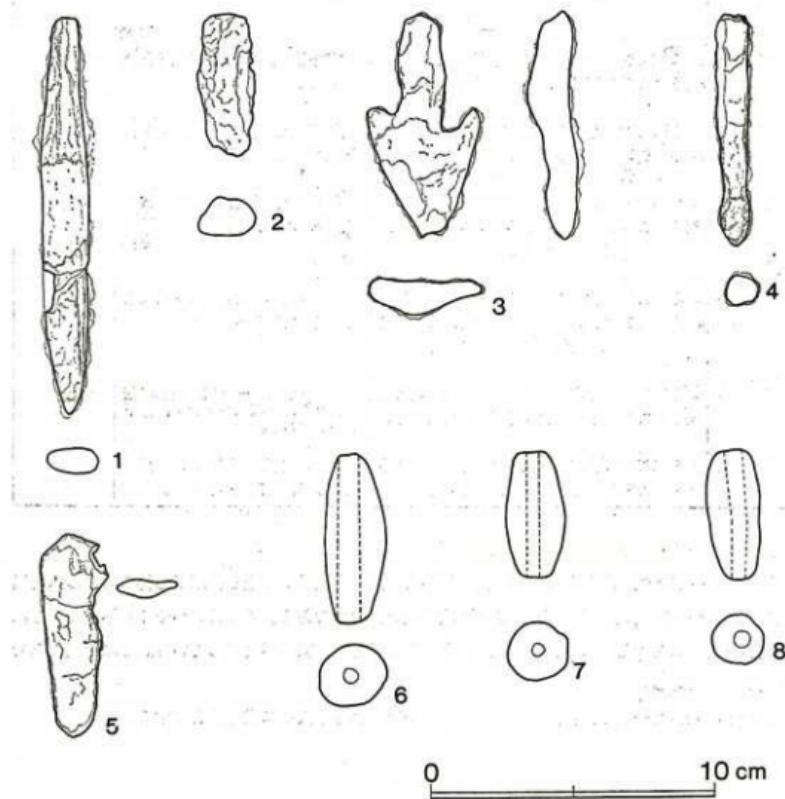
第5・8~10号住居跡出土鉄器・土製品（第51図）

第5・8~10号住居跡からは総計5点の鉄器と3点の土製品が出土し、図示し得るもののみを掲載した。3~4は鉄鎌と思われる。3は形状が整い、大形である。4は刃先がやや肥厚する。1は形状から刺突具と考えられる。5は鉄鎌と思われるが刃先、基部が欠損している。2は断面のみで形状は不明である。

6~8は土錘を一括した。点数は3点と少ないが、中央部に貫通孔を有する。

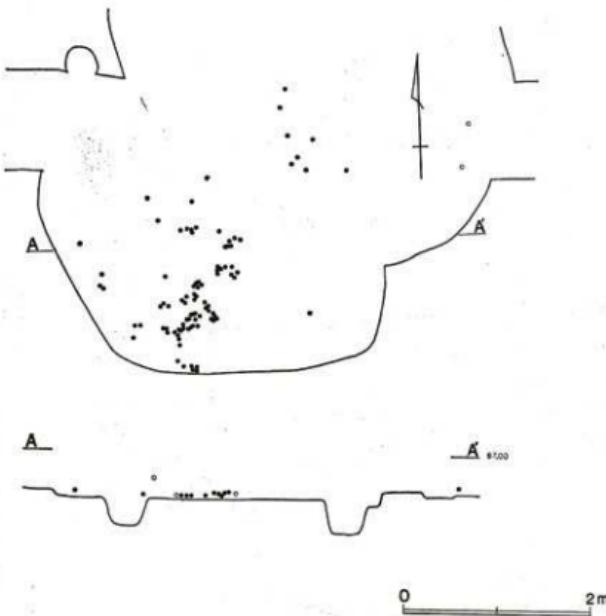
住居跡出土鉄器土製器

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土遺構	備考
1	鎌	14.2	1.6	0.9	38	8号住	完
2	不明	5.0	2.1	1.4	19	〃	欠損品
3	鎌	7.8	4.2×1.6	1.3	35	5号住	完
4	〃	8.3	1.3	1.2	21	9号住	完
5	〃	7.2	2.3	0.7	18	5号住	



第51図 住居跡出土鉄製品・土製品実測図

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		出土遺構	備考
6	鍤	6.1	2.2		26		8号住	完 土製
7	"	4.5	2.1		20		"	完 "
8	"	4.6	2.0		22		"	完 "



第52図 第11号住居跡遺物分布図

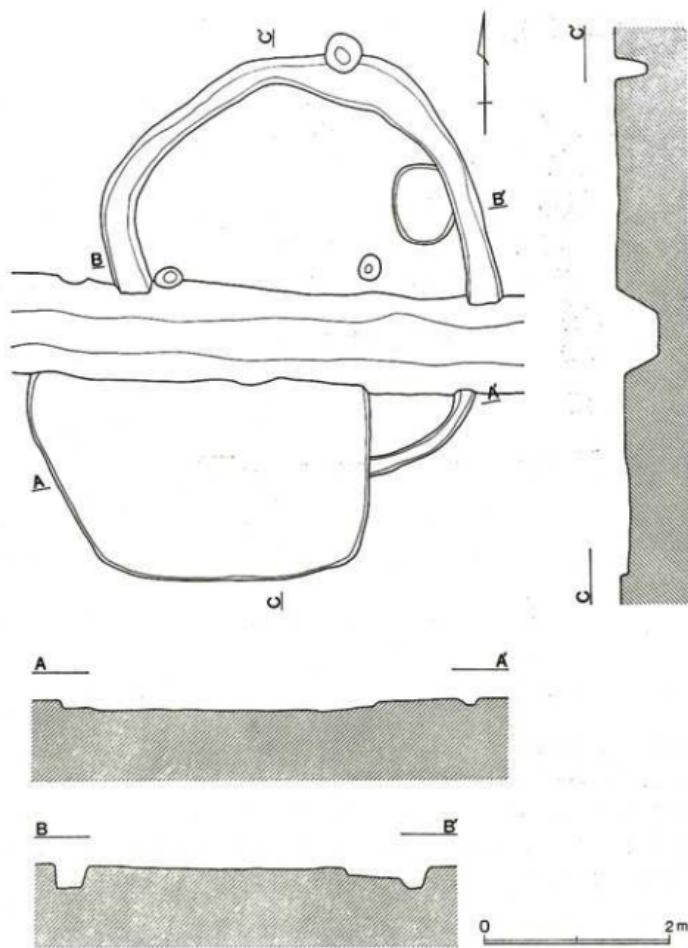
第11号住居跡、溝状遺構（第52～54図）

第3調査区西端ナ一15区で検出された。中央部は第8号溝によって切られ、南東コーナーは、第8号掘立柱建物跡と重複している。更に溝状遺構には第9・10号溝が遺構埋没後に築かれている。

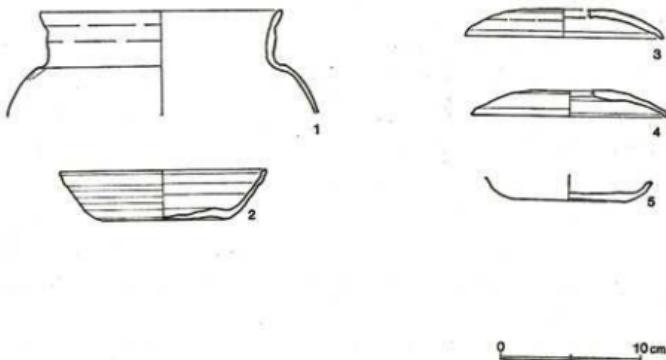
第11号住居跡は南壁が2.8mをはかり、西壁は大きく膨り出し屈曲している。北壁側は、第8号溝によって切られており、全容は不明であるが、比較的小形の住居跡であったと思われる。

床面までの深さは西壁側で8cm、東壁側で4cm前後と極めて浅く、住居跡中央から東側にかけてゆるく立ち上がる。

溝状遺構は幅18cm～60cm、深さは最深部で35cmをはかり、1号溝南側と11号住居跡に接する部分は10cm前後と浅い。形状は不整形な隅丸方形プランを呈し、床面レベルは11号住居跡に比して若干高い。覆土は暗黄色砂質土層一層のみで、遺構に伴なうと思われる遺物は全く検出されなかった。第57図は、11号住居跡の遺物分布状態を図示した。分布状態も散漫である。



第53図 第11号住居跡・1号溝状遺構



第54図 第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土土器

器種番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕 1	口径 17.9 現存高 7.4	立ち上がりに凹み状に段をもち、口縁は膨り、ゆるく立ち上がる。端部はやや外反。薄手のつくり、黄褐色。胎土細。	内面にヘラナダ残る。外面ヘラケズリ後、丁寧にナダられる。口縁は端部をつまむようにナダ。	体下半欠
坏 2	口径 15.0 器高 3.7	直線的に立ち上がり、成形時の凹凸残す。口縁内面を棱をもつ。底部は周辺凹み、ゆるく中央部に下がる。薄手のつくり、暗褐色。砂疊多。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	1/2残
蓋 3	口径 9.5 器高 2.0	天井部よりゆるやかに垂下。体部にゆるい稜をもつ。口端や内縁、内面に沈継覗る。	ロクロ成形、天井部周囲ヘラケズリ、頂部欠損。	天井部一部欠
蓋 4	口径 14.4 器高 1.8	3とほぼ同様の形態示す。口端直立気味、頂部付近肥厚。	ロクロ成形、天井部周囲ヘラケズリ。頂部欠損。	天井部一部欠
坏 5	現存高 1.8 底径 8.0	底部のみで詳細不明。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	底部のみ

第12号住居跡（第55～58図）

第3調査区西端ネー15～16区にかけて検出された。カマド、東壁側を除き、多くは15区に所在している。

住居跡北半分は調査区域外となっているため、詳細な形状は不明瞭である。

南壁は4.9mをはかり、東寄りコーナー部は大きく湾曲している。コーナー部分からカマドまで約2.0mをはかり、隅丸長方形のプランが推定される。主軸はN-61°-Eである。

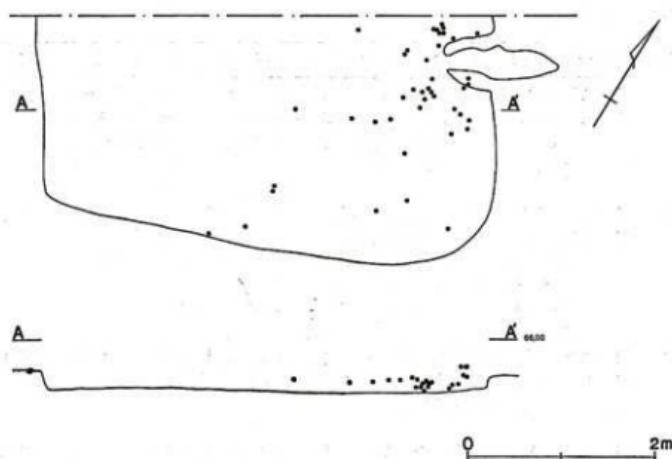
確認面からの壁高は16～20cmと浅いが、東壁コーナー部分は若干深く掘り込まれている。

柱穴はP₁～P₉まで確認された。P₁は長径60cm×短径52cmの不整橢円形を呈し、柱痕が確認された。深さは32cmをはかる。P₅は径26cmで深さは28cmをはかる。P₄～P₆はいづれも径は20cm前後で掘り込みが15cm程度と浅い。

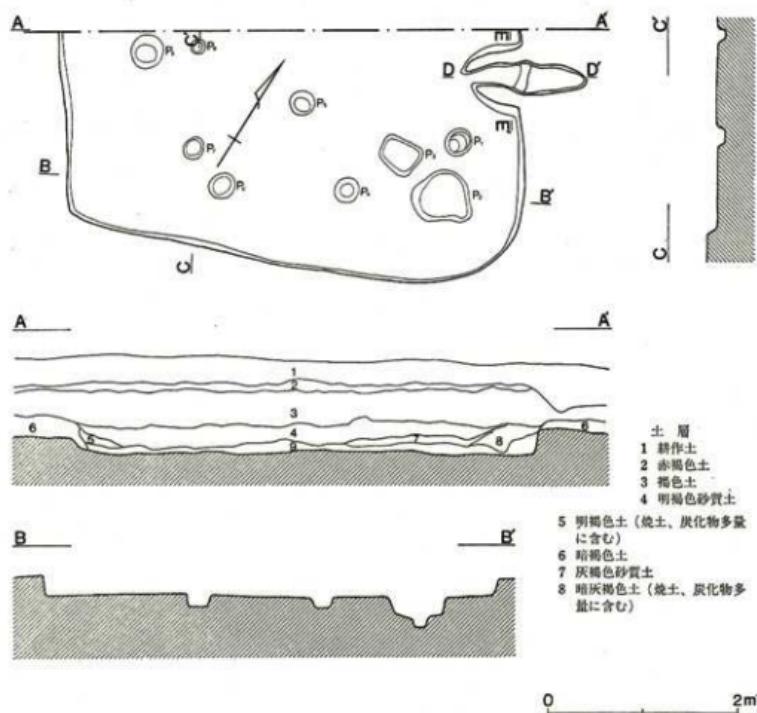
カマドは粘質土をつみ上げて構築され、燃焼部は20cm程度皿状に掘り窪められている（第63図）。

煙道部は壁より70cm程度、深さ8cm程度掘り下げられている。覆土内に焼土、炭化物の顕著な堆積は認められなかった。

遺物はカマド上面、及び裾部付近に集中して検出され、西側にかけて覆土内からの出土は極く少ない（第50図）。



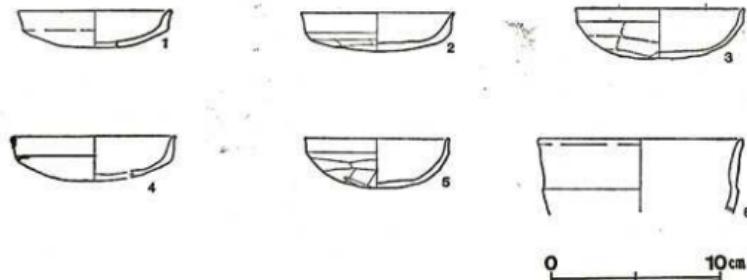
第55図 第12号住居跡遺物分布図



第56図 第12号住居跡

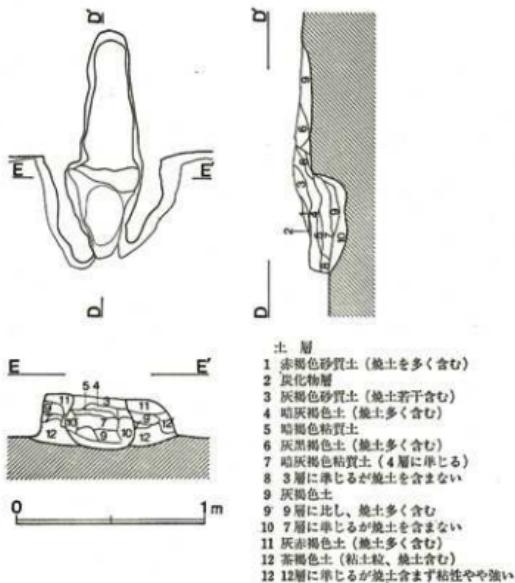
第12号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 10.2 器高 2.6	器高低く、口縁はゆるく外反、端部が彫り気味に開く。体部はくびれをもち直線的に底部へ移行、橙色。砂粒多。	外面成形は風化著しく不明。 内面はナデ。	底部欠
坏	2	口径 11.2 器高 2.7	立ち上がり器厚く、口縁外傾氣味に開き、口端は外反、器内面凹凸顯著。	器内面、口縁は丁寧なヨコナ、 体部へラケズリ。	完
坏	3	口径 11.8 器高 3.2	体部は直線的で立ち上がり肥厚、口縁は内壁気味に立ち、口端外反する。	風化、剥落著しく、観察不可	1/4残

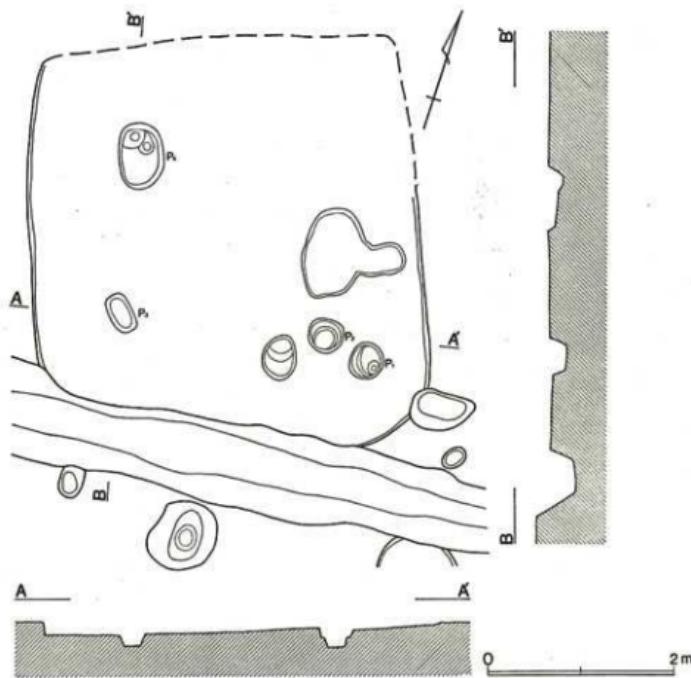


第57図 第12号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	4	口径 12.2 器高 3.5	比較的薄手のつくり、体部ゆるく丸味をもち、口縁短かく内傾気味、口端外反。立ち上がりゆるい段をもつ。暗褐色。砂粒多。	内面、口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ。後ヨコナデ。	14残
杯	5	口径 10.5 器高 3.6	体部丸味強い。口縁短かく、内彎気味に立ち。端部外反、暗橙色、砂粒多。	内面、口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	14残
鉢	6	口径 14.4 現存高 5.2	立ち上がりに弱い段をもつ。口縁は中位で肥厚し、外反気味に開く。口端は外削ぎ状を呈し、若干肥厚橙色、細砂多量に含む。	全体に風化著しく観察不可。	体下半欠



第58図 第12号住居跡カマド



第59図 第13号住居跡

第13号住居跡（第59図）

ネ～ナ一15～16区で検出された。第11号住居跡、溝状遺構東側に位置し、南壁が第8号溝に切られているほか、第5号掘立柱建物跡と一部重複している。

一辺が4.3mの方形プランを呈し、床面までの深さは西壁で15cm、東壁側で4cmをはかり、床面は西側から東側にゆるく傾斜している。

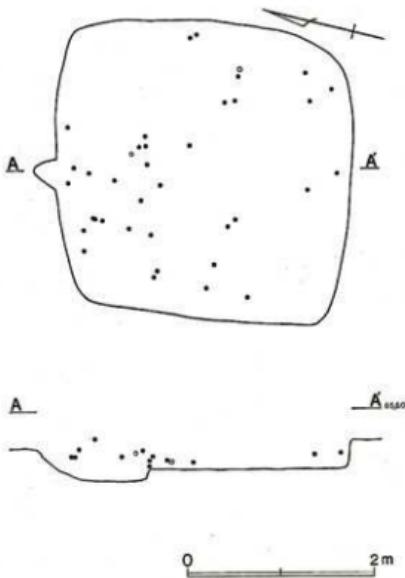
床面は平坦で検出状態は地山に砂粒が多く良好とは言えなかった。

柱穴はP₁～P₅まで確認され、P₅に接して不整形の浅い掘り込みをもつ。

柱穴はP₃・P₄が長方形、他は円形プランを呈し、P₃・P₄の長径は各々65、45cm、短径51.24cmである。他は径35cmをはかる。

柱穴の深さはP₁～P₂・P₃が30cm前後をはかり、P₃・P₄は6～10cm程度の掘り込みをもつ。

覆土は暗黄色砂質土一層のみで、遺物はまったく検出されなかつた。なお、本址には5号掘立柱建物跡が重複するが、前後関係の確認はできなかつた。



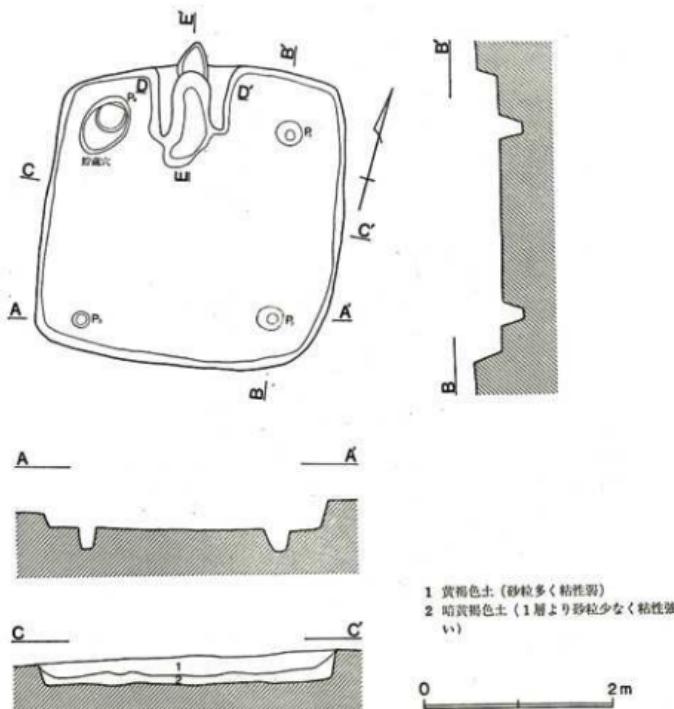
第60図 第14号住居跡遺物分布図

第14号住居跡（第60～64図）

ソ～ツー19区で検出され、造構の大半はツー19区に位置する。第16・17号住居跡の中間に位置し、両造構と各々約4m・3mの距離をもつ。なお本址に近接して16号住居跡が検出されている。

住居跡は一辺が約3.2mの隅丸方形プランを呈し、床面までの深さは東壁側で32cm、南壁側で22cmをはかる。床面は堅く踏みしめられており、西側から東側に向かってゆるやかな傾斜を示す。床面中央部は浅く窪んでいる。

柱穴はP₁～P₄まで確認された。P₁・P₂は各々円形プランを呈し、径が約30cm、掘り込みはP₁が26cm、P₂が23cmをはかる。P₃は径が17cm、掘り込みは25cm、P₄は長径70cm×短径46cmの長橢円形プランを呈し、更に一段、径30cmの円形の掘り込みがみられ、各々の深さは、23cm、46cmをはかる。P₄は柱穴南側に貯蔵穴をもつ。



第61図 第14号住居跡

柱穴配列は、東西壁から20~30cm程度内側に配列され、柱間は一定しており、2.1mをはかる。覆土は2層からなり、遺物はカマド部分を除き第2層上部から出土しているが、破片が多く、図示し得る資料は少ない。

カマドは主軸をN-14°-Wにもち、北壁や西側コーナー寄りに構築されている。

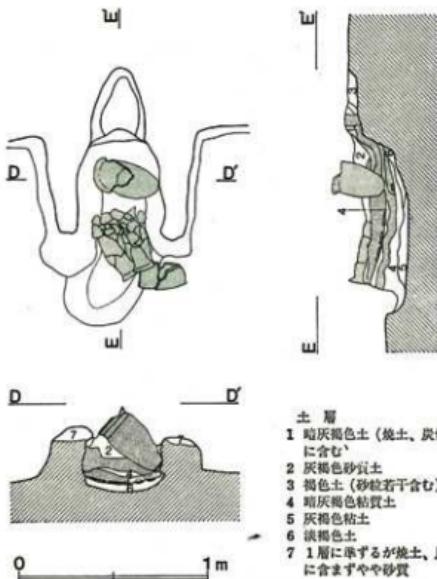
両据は壁から70cm程度内側に彫り出しており、暗黒褐色粘質土から成っている。

焚き口部は梢円形に掘り進められ、深さは最深部で、床面高より12cmをはかる。北壁寄りにゆるい段をもち、直に立ち上がる。

煙道部は壁北側に長さ40cm、最大幅28cm、深さ6cmの長梢円形状の掘り込みをもつ。

覆土は7層からなり2.4層間に、焼土、炭化物層が交互に堆積していた。

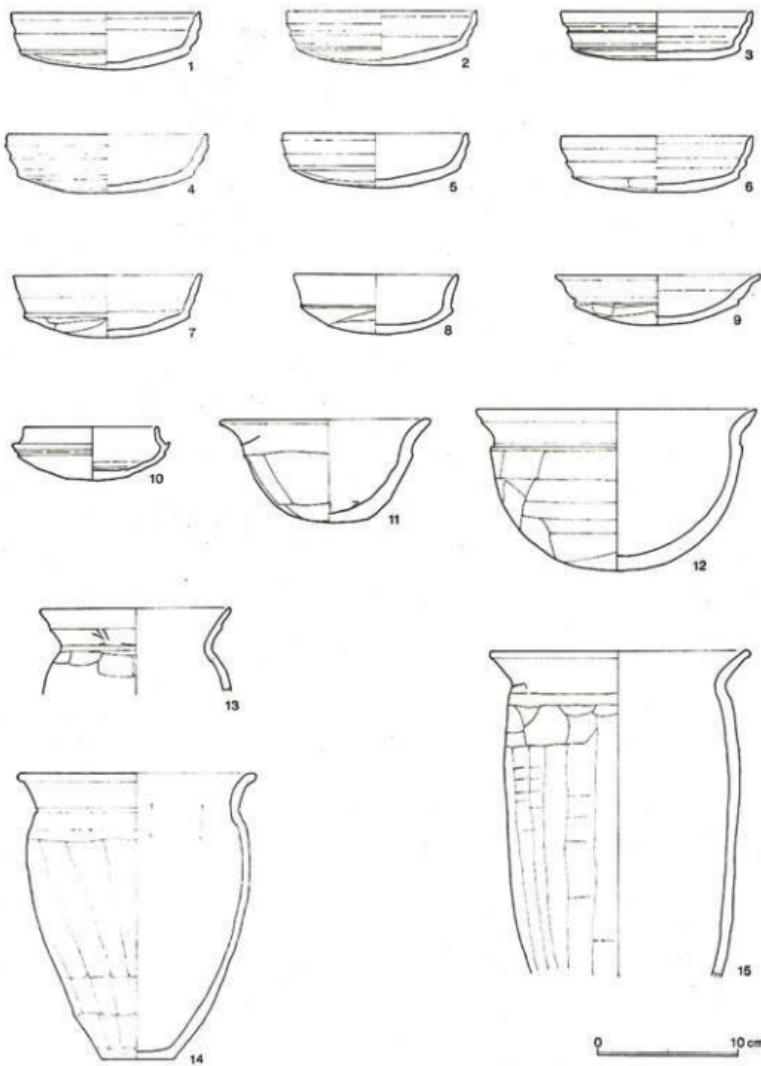
本住居跡出土遺物(第68~69図)のほとんどがカマド、及び周辺部からまとまって出土しており、カマド覆土からは2個体の長甕が倒立状態で出土しているほか、カマド西側据とP₁の間では坏(第68図2~6)が長甕(第69図14)と組み合わさって出土するなど、極めて良好な出土状態を示している。



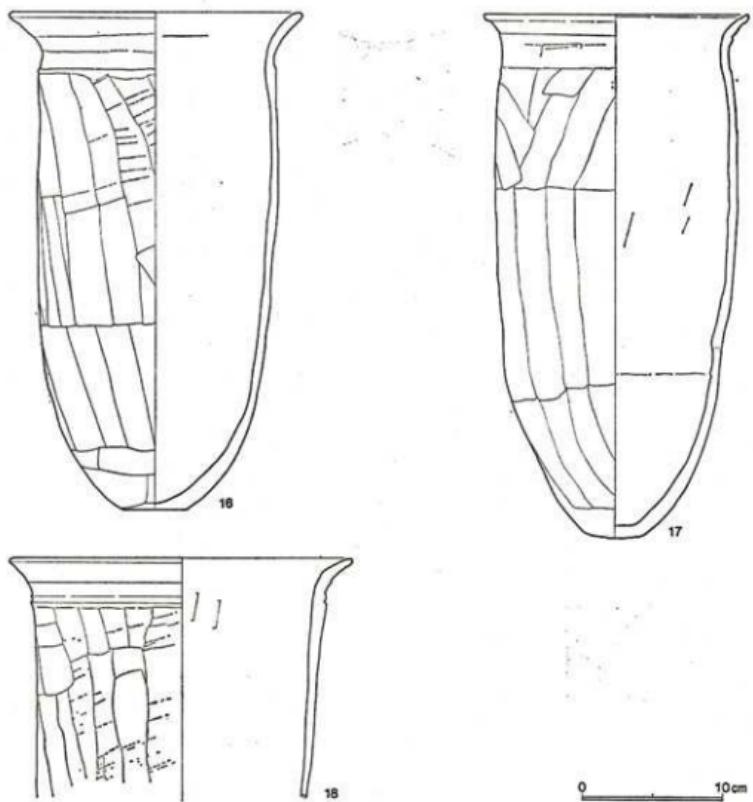
第62図 第14号住居跡出土土器

- 土層**
- 1 暗灰褐色土(燒土、炭化物多量に含む)
 - 2 灰褐色砂質土
 - 3 極褐色(砂紋若干含む)
 - 4 單灰褐色粘質土
 - 5 灰褐色粘土
 - 6 淡褐色土
 - 7 1層に原するが燒土、炭化物共に含まずやや砂質

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 13.5 器高 4.1	立ち上がり有段で口縁の長い坏。口縁は丸味をもって外反し、2条の稜を有する。口端は鋭角で内面に稜をもつ。口縁内面は若干肥厚する。平底氣味の底部を有する。	内面丁寧なヨコナデ、外面は口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完
坏	2	口径 13.6 器高 3.9	立ち上がり有段で、口縁長く、丸味をもって外反する。2条の稜を有し、口端は鋭角で直立する。口端内面に稜をもつ。	内面から口縁外面にかけ、丁寧なヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完
坏	3	口径 13.8 器高 3.5	口縁長く、底部は平底を呈する。口縁は外傾し、端部直立氣味となる。口縁に2条の稜をもち、内面は凹凸顯著。	内面から口縁にかけて丁寧なヨコナデ、体部は乾燥がやや進んだ状態でヘラケズリを施す。	完
坏	4	口径 14.3 器高 4.2	口縁長く、扁平で丸底氣味の底部からゆるやかに立ち上がる。立ち上がり有段、口縁に2条の稜をもつ。口端丸味持ち、内傾氣味、口縁内側にゆるい稜をもつ。	内面から口縁にかけて丁寧なヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完



第63図 第14号住居跡出土遺物



第64図 第14号住居跡出土遺物

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	5	口径 13.2 器高 3.8	口縁立ち上がり有段、口縁に 2 条の稜をもち口縁内傾気味、内面に稜をもつ。丸味をもった扁平な底部を有する。	ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	16欠
杯	6	口径 13.8 器高 4.0	口縁立ち上がり有段、口縁は丸味をもって外反、2条の鋭い稜をもつ。口端鋭角で、内面はゆるい稜をもつ。底部平底気味。	風化著しく成形不明。底部にヘラケズリ痕僅かに残る。	17欠

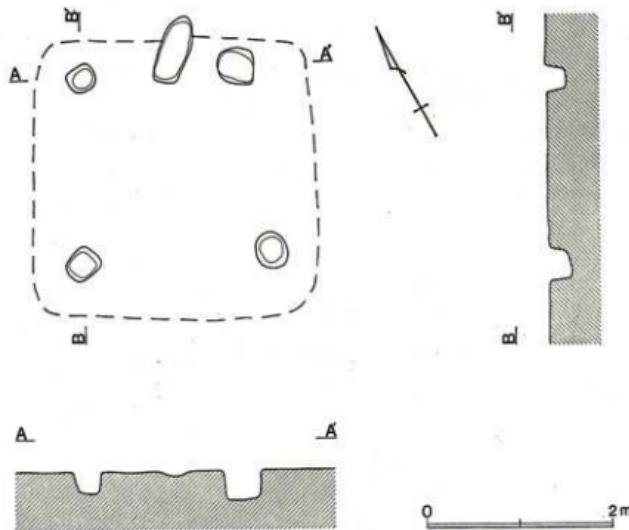
器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	7	口径 13.5 器高 4.4	立ち上がり有段、口縁長く外傾する。ゆるい稜をもち、口端は扁平、内面にゆるい稜をもつ。扁平な丸底を有する。暗褐色。胎土細。	口縁内、外面は丁寧なヨコナデ。底部内面ナデ、外面へラケズリ。	完
坏	8	口径 11.8 器高 4.2	有段口縁で、口縁は外反し、端部は若干内傾気味となる。内面は一段くびれる。底部は丸底を呈する。黄褐色。胎土細。	全体に風化している。口縁内外ヨコナデ、体部幅広くヘラケズリ。	欠
坏	9	口径 14.8 器高 3.5	有段口縁、口縁は中位で肥厚し、強く外反する。口縁は肥厚し外反一層強い。内面にゆるい稜をもちゆるやかに底部にいたる。暗褐色。胎土砂粒多。	内面ヨコナデ、外面は底部へラケズリ、口縁ヨコナデ。口端をつまむようにナデ。	口縁一部欠
坏	10	口径 4.5 器高 3.8 最大径 11.3	立ち上がりの段は内傾気味に強く膨り出す。口縁は内傾し、中央部より直立気味となる。口縁丸朱もつ。体上位に段をもち、丸底、底部に最大厚もつ。灰白色。外面自然袖微量付着。	ロクロ成形。付部の段は棒状工具で作出、底部へラ切り後、周辺部を軽くヘラケズリ。	完
鉢	11	口径 15.2 器高 7.3	立ち上がりにゆるく段をもち、口縁は強く外反、肉厚で不均一な作り。黒色乃至黑暗褐、砂粒小疊多。	内面、口縁ナデ、後体部に斜位の粗いヘラケズリを施す。	完
鉢	12	口径 20.0 器高 11.5	体部はゆるやかに彎曲し、口縁立ち上がりに段をもつ。口縁は強く外反し、端部にゆるい稜をもつ。黄褐色、砂粒多。	内面剥落著しい。内面ナデ、外面体部へラケズリ。	残
甕	13	口径 13.6 現存高 6.2	肩部でゆるくくびれ、口縁は中位に稜をもち、上位がややくびれて外傾する。内面に輪積み痕を部分的に残す。暗黒褐色。砂粒多。	内面体部粗いナデ、口縁ナデ、外面体部粗いヘラケズリ。	口縁～肩部残。
長甕	14	口径 17.2 器高 20.2	底部よりゆるやかに立ち上がり、肩部でくびみ、口縁は外反。口端は肥厚し強く外方に彎曲する暗褐色。砂疊多。	内面へラナデ痕残る。内面丁寧なナデ。外面底部周辺斜位のヘラケズリ、体部は粗い綫方向のヘラケズリ。	体部一部欠
長甕	15	口径 18.6 現存高 23.0	最大径を口縁にもつ。体部は丸朱をもって直線的に立ち上がり、肩部でくびれる。口縁は外傾強く、端部肥厚する。輪積時の凹凸残す暗黄褐色。砂疊多。	内面は丁寧なヨコナデ、口縁ヨコナデ、体部は比較的幅の狭いヘラケズリ。	体下半欠

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕	16	口径 20.1 器高 35.3	体下半より直線的に立ち上がる。口縁は外反し、ゆるい波をもつ。口縁下にヘラケズリ施し、段を作出している。暗赤褐色。砂疊多。	風化を受け一部不鮮明、内面はナデ。外面は縦位のヘラケズリ。底部周辺は横位のヘラケズリ。	完
長甕	17	口径 18.8 器高 37.2	体下半に接合痕明瞭に残る。体部は直線的に立ち上がり、口縁内傾気味で端部で波をもつ。口縁は強く外反。内面に輪積みの凹凸顯著に残す。暗黄褐色。砂疊多。	内面体下半縦位ヘラナデ、上半ヨコヘラナデ、口縁内外ヨコナデ体部不半は一部火熱で不鮮明、縦ヘラケズリ。	完
長甕	18	口径 24.4 現存高 17.2	口縁立ち上がりに段をもつ。口縁は波をもち外反。暗灰褐色。砂疊多。	内面体部ヘラナデ、口縁は横位ヘラナデ、上部はヨコナデ、外面は体部ヘラケズリ。	体不半欠

第15号住居跡（第65図）

ソー18~19区にかけて検出され、第14号住居跡と近接している。本址は柱穴、カマド跡のみが検出されたため、全容は不明である。

主軸は、柱穴、カマドからN-32°-Eと推定される。柱穴は4本確認され、P₁が円形、P₂・P₃～P₄が方形の掘り込みをもつ。深さはP₁・P₄が20、22cm、P₂が25cm、P₃が32cmをはかる。カマドは掘り方のみで、西側の一部は火熱を受け赤変している。

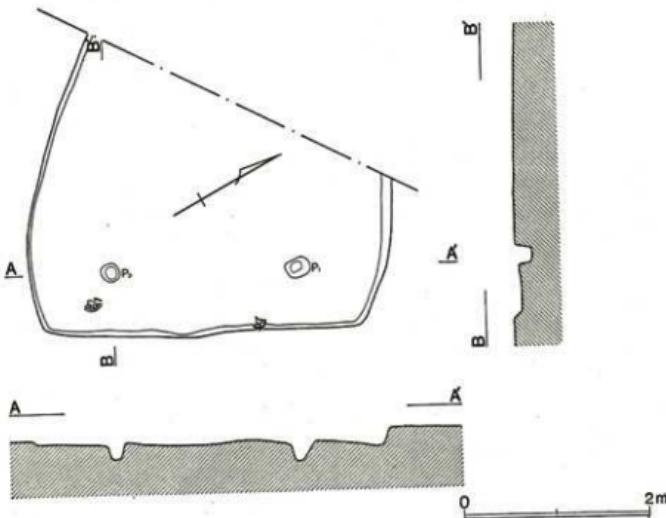


第65図 第15号住居跡

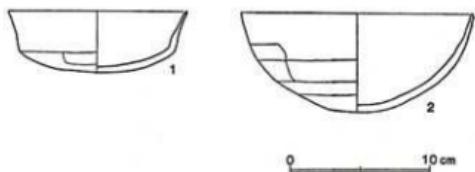
第16号住居跡（第66～67図）

ソ—19区で検出された。西壁は湾曲気味で不整形である。掘り込みは東壁側で18cmをはかり、全体に浅い。柱穴はP₁・P₂が確認された。深さは各々16cm・20cmをはかる。床面は凹凸が著しくよく踏み固められている。

遺物は極めて貧弱で、実測可能な遺物は2点に過ぎなかった。



第66図 第16号住居跡



第67図 第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 12.9 器高 4.4	口縁が長く、立ち上がりに弱い段をもつ。口縁は立ち上がり肥厚し端部に向かつて強く外反気味に立つ。橙色。砂粒多。	器内面から口縁にかけてヨコナデ、体部ヘラケズリ。全体に風化しており詳細不明。	1/2残
鉢	2	口径 16.7 器高 7.1	底部がやや丸味強く、内灣気味に開く。中位に最大厚をもち、口唇端はヘラナデされ平坦である。黄橙色。細砂多。	内面から口唇端にかけてヨコナデ。器面は横方向のヘラケズリ。	1/2残

第17号住居跡（第68～69図）

ソーツー19～20区で検出された。主軸はN-46°-Eである。

遺構南半が調査区域外となり、全容は不明である。確認された形状は、北壁が4.1mをはかり、隅九方形プランが推定される。

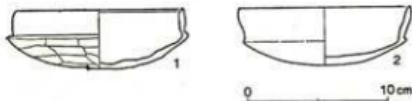
掘り込みは西壁側が25cm、北壁から東壁側にかけては浅く20cm～5cmとなつている。

柱穴はP₁～P₂が確認された。いづれも円形を呈し浅い皿状の掘り込みをもつ。P₁は36cm、P₂は38cmの掘り込みを有する。

カマドは暗黒褐色粘質土を積み上げて構築されており、焼土、炭化物等の堆積は認められなかった。

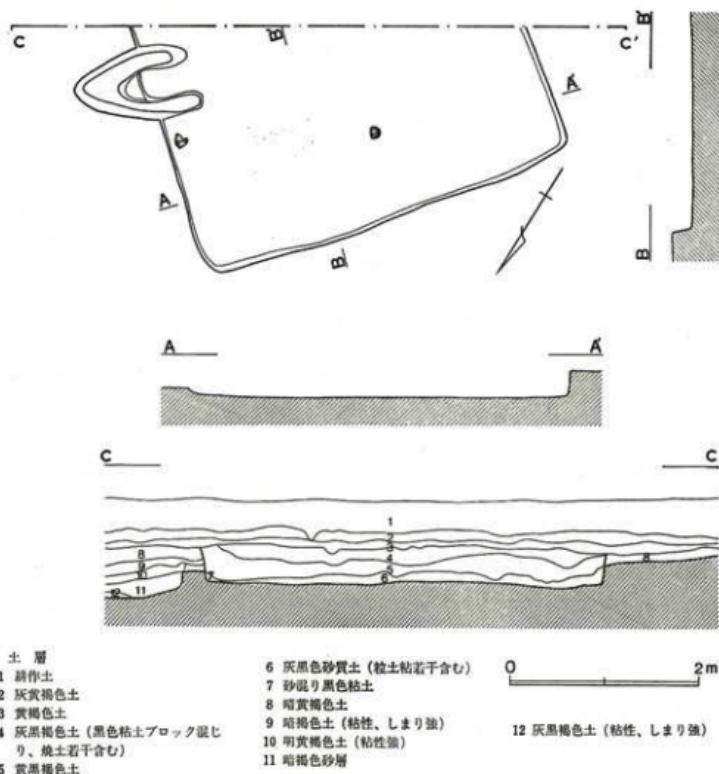
遺物は杯2点が出土したのみで、全体に極めて散漫であった。

第68図 第17号住居跡出土遺物



第17号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 12.0 器高 4.2	立ち上がりに強く段をもつ。口縁はゆるく内傾し、口端内面に稜をもつ。ゆるやかな丸底呈する。内面凹凸顯著。暗黄色。砂粒。	内面底部から口縁にかけて丁寧なヨコナデ。底部横位ヘラケズリ	完
杯	2	口径 12.4 器高 4.2	立ち上がり有残。口縁はゆるく外反気味に立ち上がる。内面にゆるい稜をもつ。底部内面凹凸顯著。灰褐色。砂粒多。	全体に風化し、整形痕は不明瞭。内面及び口縁はヨコナデ。	1/2残



第69図 第17号住居跡

第18号住居跡（第70～74図）

第3調査区レ～ソ～20区で検出された。東西両壁にカマドを有する。N-61°-Eを主軸にもつ。鬼高窓以降では調査区中最も東側に位置する住居跡である。

造構は第2、3調査区西半の検出面である暗黒褐色粘質土が東側に向かってゆるやかな落ち込みを示し上面の堆積土である暗黄褐色砂質土を掘り込んで構築されており、北壁側の立ち上がりには若干不明瞭な部分があった。

住居跡は長径4.2m×短径3.8mのプランを呈し、壁高は14～25cmを測る。床面は南西側から北

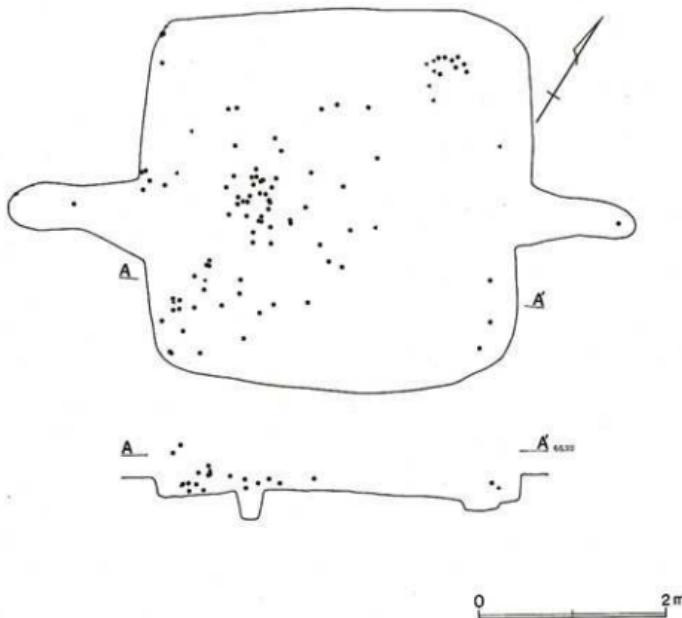
東に側向かってゆるく立ち上がっている。

地山が砂質土であり、床面の検出状態も良好とは言えなかった。

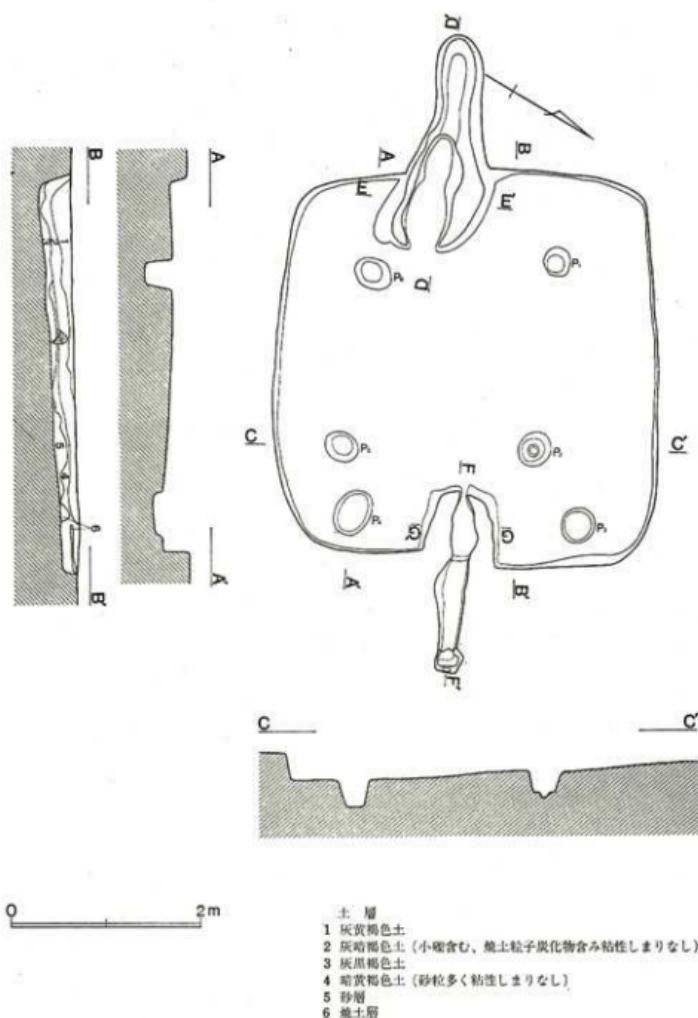
柱穴はP₁～P₆まで検出された。P₁・P₂間とP₅・P₆間は等間で3.8mを測る、P₃・P₄の西側、カマド裾両側にP₂・P₃の2本の柱穴をもつ。柱穴はP₄・P₅が橢円形を呈する他は、概ね円形を呈し、径はP₄—長径42cm×短径37cm、P₅—長径41cm×短径32cm、他は径30～36cmを測り、床面からの深さは25cm程度を測る。

カマドは東西壁に2基確認された。西カマドは壁南コーナー寄りに位置し、住居跡長軸方向と若干のズレが認められる。東カマドは壁中央部に位置している。両カマドとも裾部は粘質土を積み上げて構築され、東カマドは焚き口部～燃焼部にかけてゆるく落ち込んでいる。東カマドは燒土、炭化物層が貧弱である。東カマドでは煙道が検出された。

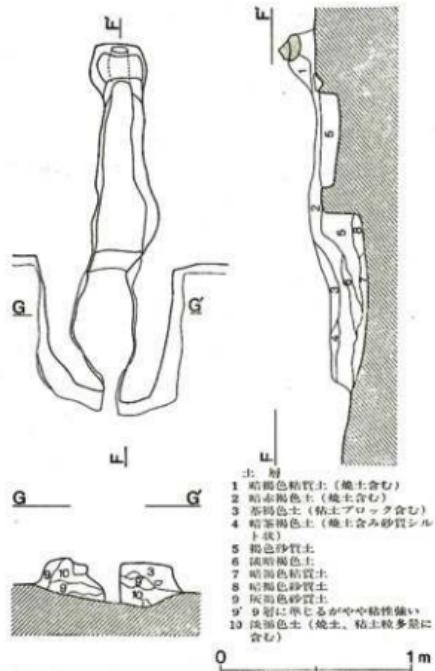
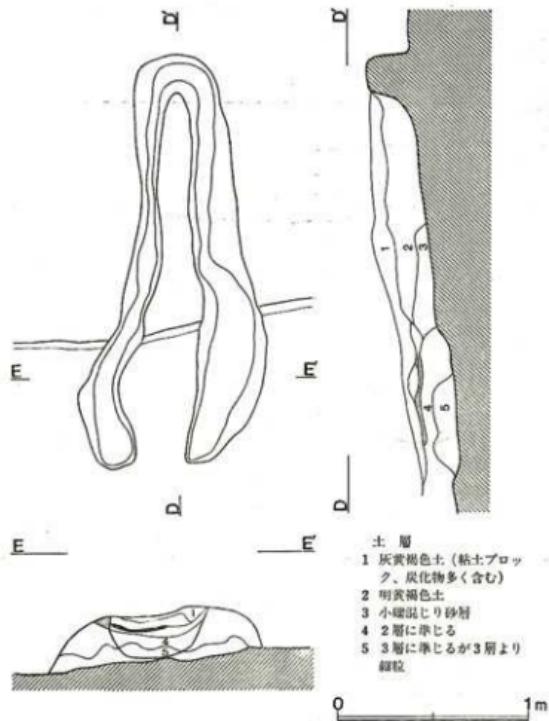
遺物は住居跡西側、カマド周辺部から多く検出され、東側からの出土は非常に少ない。カマドの遺存状態を考慮すると、東→西カマドへの変遷が推定されよう。

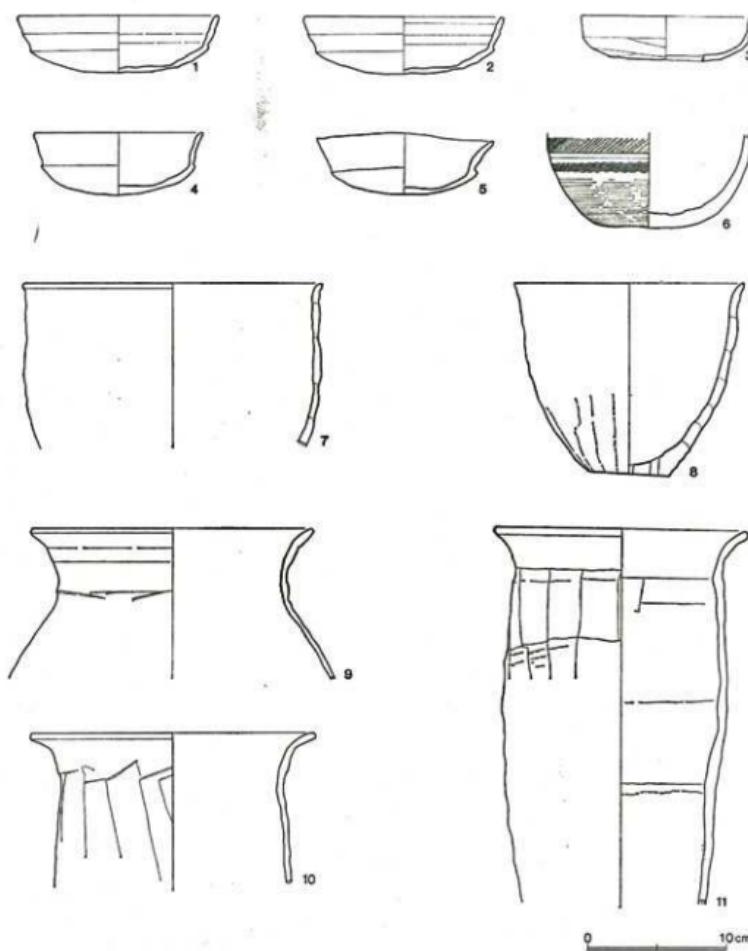


第70図 第18号住居跡遺物分布図

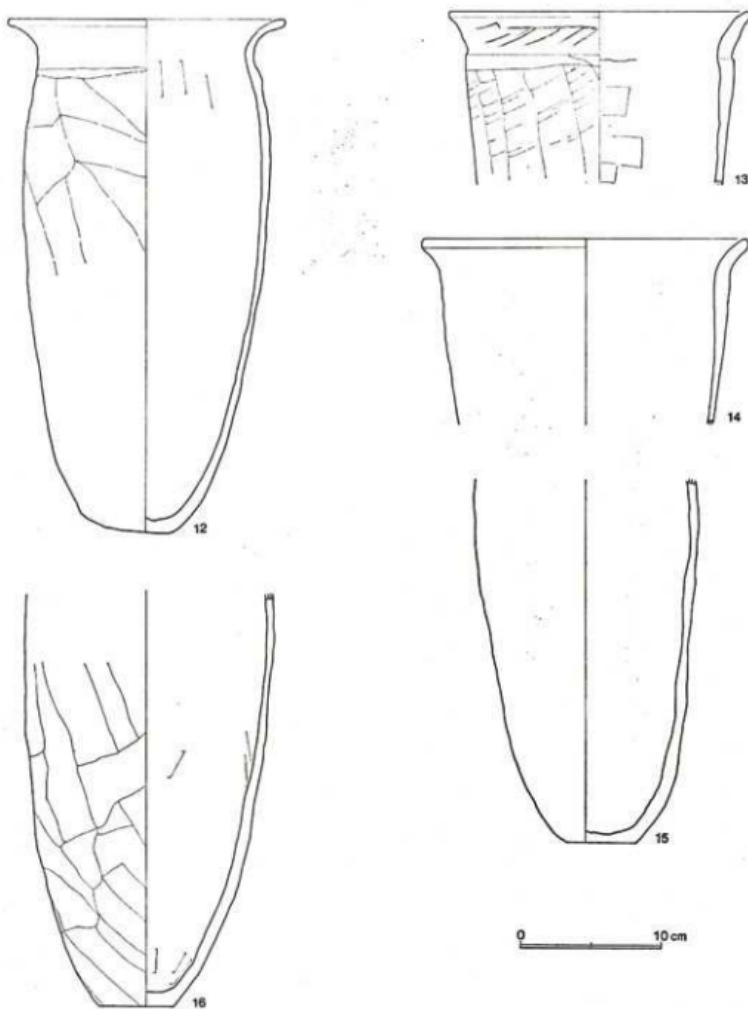


第71図 第18号住居跡





第73図 第18号住居跡出土遺物



第74図 第18号住居跡出土遺物

第18号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 14.5 器高 4.2	立ち上がり有段。口縁は外傾し、ゆるい稜をもつ。口縁内面には稜を有し、底部は凹凸顯著。暗褐色。砂粒多。	内面底部粗いナデ。口縁内外は丁寧なヨコナデ。底部上端横位へラケズリ。下半は粗いヘラケズリ。	口縁1/2欠
坏	2	口径 14.3 器高 4.2	口縁長く、有段。口縁は外反し、鋸い稜をもつ。端部直立気味。平底呈す。黒色。砂粒多。	内面底部ナデ、口縁内外ヨコナデ、底部周辺横へラケズリ。他は粗いヘラケズリ。	口縁1/2欠
坏	3	口径 12.3 器高 3.1	立ち上がり有段。口縁はゆるく外反。底部は屈曲して平底に至る。口端若干肥厚。	体部外面横へラケズリ、内面は粗いナデ、口縁ヨコナデ。	殆欠
坏	4	口径 12.2 器高 4.5	口縁長く外反する。立ち上がりに段をもつ。口縁内面にゆるい稜をもつ。丸底呈する。明黄褐色。砂粒多。	全体に風化著しく整形不明。	完
坏	5	口径 12.8 器高 4.4	4とはほぼ同じ器形。口縁の外反はより強い。口縁はゆがみ強い。焼成時環元され一部灰色呈する。明黄褐色。砂粒多。	風化顯著。整形不明。	完
瓶 ?	6	現存高 6.2 最大径 14.7	平行弦線を境に櫛描波状文、木口状工具の櫛描波状文をもつ。下半は木口状工具でナデられた条縞帶を有する。暗灰色。砂粒多。	水びき成形、内面には成形時の段を有する。底部付辺凹凸顯著。	下半のみ残
瓶	7	口径 21.8 現存高 11.8	端部は外反し、体上部で彫りゆるやかに底部に移行すると思われる。輪積痕を明瞭に残す。	器面はヘラ削り後ナデされる。内面は丁寧なナデ、部分的炭化物付着	体下半部欠
瓶	8	口径 16.7 器高 13.8	底部より外反気味に立ち上がり、端部は強く外反する。輪積み痕明瞭に残す。底部に、孔を有する。暗黄褐色。砂粒多。	底部付近にヘラケズリ痕残すが、上半はよくナデされている。内面は丁寧なナデ、黒色呈する。	完
甕	9	口径 20.4 現存高 10.8	体部上半でゆるくくびれ、口縁は屈曲気味に強く外反し、上半部は肥厚する。体部は比較的薄手、灰黄褐色。砂粒多。	内面ナデ、外面体部へラケズリ後、器面をナデ、口縁は横位に丁寧なナデ。	体下半欠
長甕	10	口径 20.7 現存高 11.3	体部上半は内傾気味に立ち上がり、口縁は強く外反。端部肥厚。内面凹凸顯著。暗褐色。砂粒多。	内面ナデ、外面体部比較的幅の広いヘラケズリ。	1/2残、下半欠。

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
長甕	11	口径 18.3 現存高26.8	体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁は強く外反、体部に接合痕、輪積み痕顯著に残る。口縁内面に稜を有する。暗黄褐色。砂疊的。	内面へラナデ痕残る。外面は幅広いヘラケズリ、下半は風化して不明口縁内外ともヨコナデ。	体下半欠
長甕	12	口径 18.8 器高 36.5	底部からゆるく立ち上がり上半で内傾、口縁は強く外反、底部は不整。明褐色。砂疊多。	内面へラナデ痕残る。外面斜位ヘラケズリ、下半は風化して不明口縁内外ナデ。	完
長甕	13	口径 21.4 現存高12.1	体部ゆるく外反し、立ち上がり肥厚。口縁は外反し、端部すぼまる。立ち上がり段をもつ。暗黄褐色。砂疊多。	内面へケナデ痕残る。口縁内外ナデ後、体部下半より斜窓のヘラケズリ。	体下半欠
長甕	14	口径 23.0 現存高13.3	器形はとほほ等しいが立ち上がりの段はもたず、口端丸味を帯びる。明褐色。砂疊多。	風化著るしく整形不明。	体下半欠
長甕	15	現存高25.8	輪積み、接合痕明顯に残る。底部よりゆるく立ち上がり、上半で内傾。	風化著るしく整形不明。	体上半欠
長甕	16	現存高29.7	接合痕残す。底部よりゆるく立ち上がり、上半で直立気味となる。	内面へラナデ痕残。す外面比較的幅広のヘラケズリ。底径付近明瞭に残る。	体上半欠

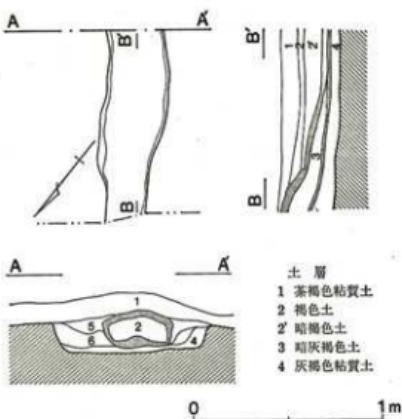
第19号住居跡（第75図）

ソー21区で検出された。カマドのみであり、他は調査区域となってい る。

カマドは確認された全長が96cm、 中央部に最大幅をもち、96cmをはかる。先端部に向かって幅狭となり20cmをはかる。

覆土は6層からなり、調査区南壁の断面観察では天井部の残存が認められた。

構築に際しては幅80cm程度に掘り下げ、更に粘土を廻らせており、横断面では天井部が崩落し、良好な遺存状態とは云えなかった。



第75図 第19号住居跡

第20号住居跡（第76～77図）

第3調査区カ～ヲー24～25区にかけて検出された。長径5.8m×短径5.0mの隅丸長方形を呈し、長軸はN-26°-Eを測る。

壁に沿って周溝が廻り、南西コーナーで切れる。幅は15～25cmで床面から5cm程度掘り込まれている。床面は炉址を中心に堅く踏みしめられており、柱穴はP₁～P₁₀が検出され、P₁～P₄が主柱穴となる。P₅～P₇は北壁に沿って配列している。

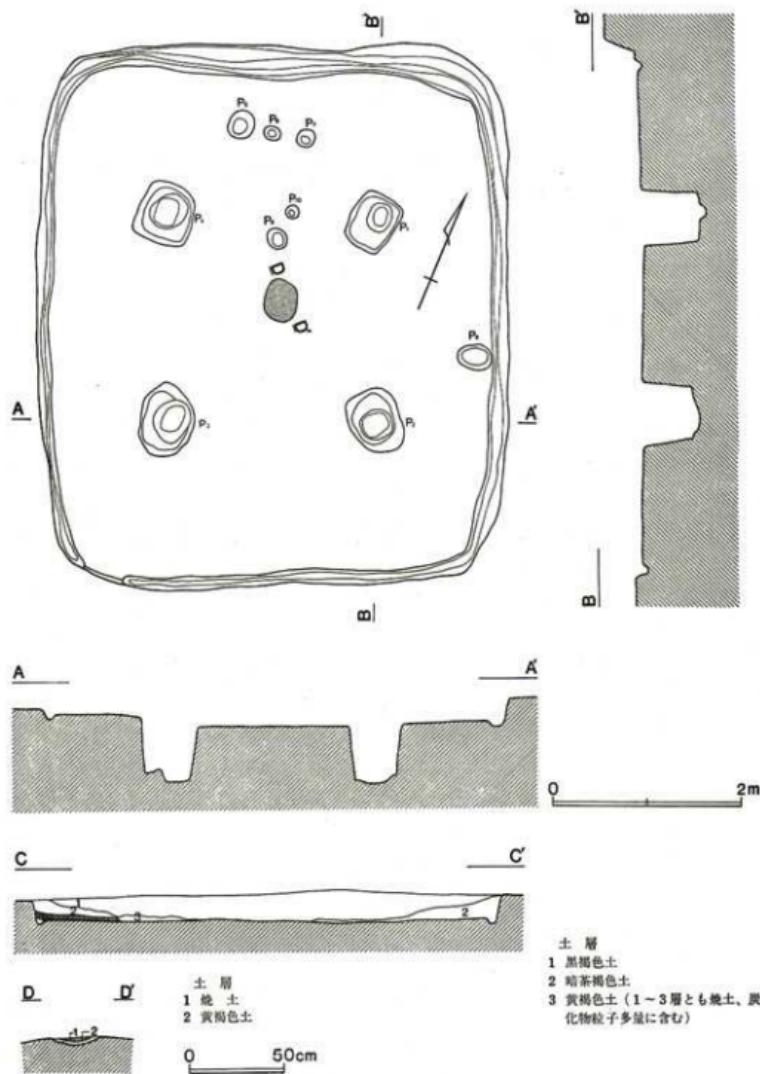
柱穴は長方形の掘り方をもち長径50～60cm×短径50～55cm、床面から60cm程度掘り込まれ、P₈～P₁₀は底面が皿状に窪む。P₈は一段深く掘り込まれている。

床面中央部に地床炉をもつ。長径45cm×短径35cmの不整椭円形を呈し皿状の掘り込みをもつ。焼土は浅く堆積しており、周辺部は火熱を受け赤変している。

床面からは炭化材が放射状に検出されたが、壁、床面ともに火熱を受けた痕跡はない。遺物は南西コーナー部から炉址周辺部に集中し、無文の細破片が主体を占め、床面から若干浮いて検出された。器形復元された資料は全て床面からの出土である。



第76図 第20号住居跡遺物分布図



第77図 第20号住居跡

20号住居跡出土土器（第78図）

第78図1は口唇に棒状工具の押圧による小波状文をもつ變形土器である。外反する口縁をもち、3帯の文様帯からなる。口縁部・胴部文様帯は幅広の平行沈線で画され、各々ヘラ状工具による刺突文が充填されており、沈線の幅の広い部分では2本並列となっている。平行沈線間は部分的に擦痕が観察される。口縁部は2条の波状沈線文が粗く施されている。文様は器面のナデ成形後施文されたものである。暗褐色を呈し、比較的精選された胎土を有し、器調整も丁寧である。

2は壺形土器の口頭部で、口縁部は2本の沈線で画され、口唇に沿って2本の併行沈線が廻る。頭部には波状併行沈線文が描かれる。口縁部、及び頭部の沈線内は無節Lの原体によって沈線後充填されている。無文部には丁寧なナデが加えられている。暗黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。

3は壺形土器の肩部破片で、器に4単位の貼付文をもち、各々の貼付文を中心として4本の沈線から成る波状文が描かれる。文様帯は複列の沈線によって区画されている。器面にRLの纏文施文後に沈線を描く、灰黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。

4は粗製の變形土器で、口唇、及び器面全面に植物茎の回転圧痕が施されている。原体幅は1.5cm前後と思われ、口唇下で斜行し、くびれ部以下は底部にむかってほぼ垂直に施される。器面は2次焼成を受けており下半部では風化著しく、器面には部分的に炭化物が付着している。

第図5～15は本址出土土器片である。5～8は口縁部破片である。5は地文にRLの横位回転纏文をもつ。口唇部は押捺された小波状を呈する。6は縦位沈線間を横位沈線で充填する文様構成をもつと思われる。9は沈線でエ字文風のモチーフをもち、文様間はLRの原体が充填されている。10は重四角文、又は「コ」字重ねのモチーフ構成が推定されよう。11、12の蛇行する沈線文は、或いは器面に垂下して施されるものかも知れない。地文は11、12とも原体LRである。

13は器面を廻る平行沈線と、それに接して平行沈線による三角形のモチーフをもち、内部は波状平行沈線が施されている。平行沈線内は棒状工具で粗く浅い擦痕風の沈線が加えられている。地文は原体LRの縦位回転である。14・15は底部破片、14は貫通孔を有する窪高台部で、径4.5cm、15は底径4.6cmを測り、いづれも小形である。

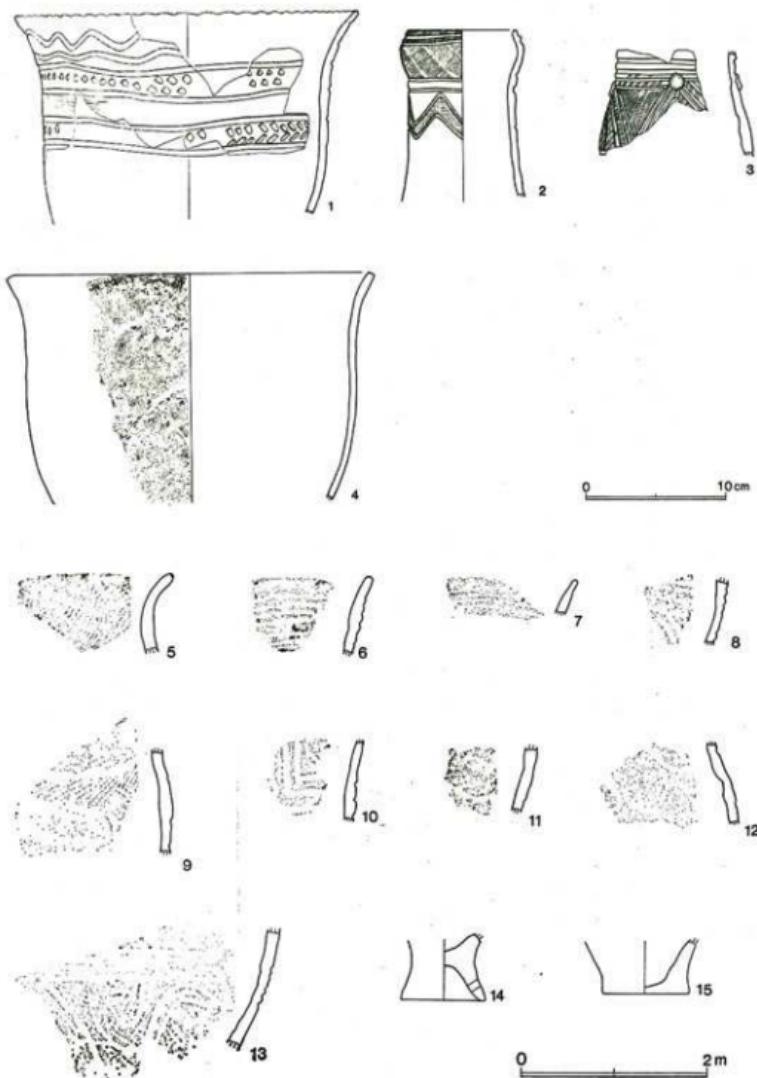
20号住居跡出土石器（第84～85図）

20号住居跡からは、大形の打製石斧を中心として、フレーク、チップなどが若干出土しているが、量的には少ない。

第84図1は先端部が若干欠損している。片面に自然面を残し、母岩より得られた剥片に粗く剥離を加えることにより形状を作出している。基部から刃部にかけては大きく肥大しており、所謂「鍔形石斧」と呼唱される一群に入れることができよう。

2は1同様自然面を有し、断面形に反りはみられない。周辺部に粗く二次調整を加えるのみで、先端部に磨滅は観察されない。基部は台形状を呈する。側面に敲打、摩耗痕はない。

第85図3は住居跡覆土上面にて確認された。緑泥片岩を母岩とし、二次調整は粗い。基部は長方形をなし刃部はゆるやかな丸味をもつ。先端部は鋭角で、磨滅が著しい。縦断面形は直線的で、側面に敲打、摩耗痕は観察されない。



第78图 第20号住居跡出土遺物

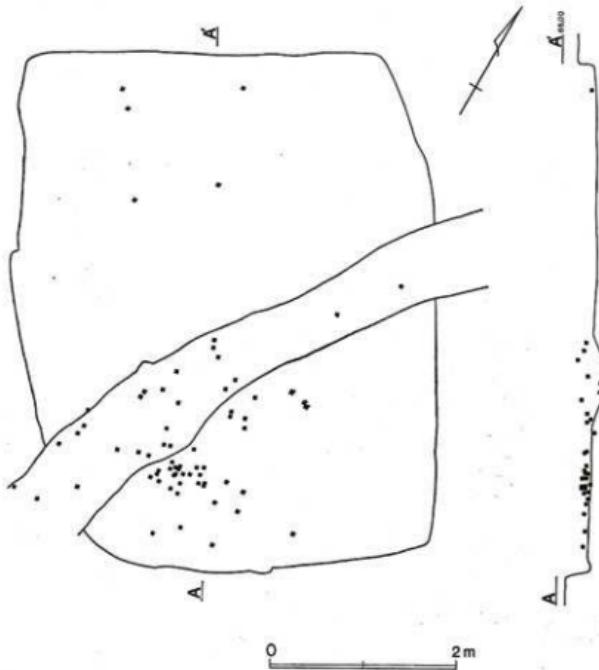
第21号住居跡（第79～80図）

第3調査区カ—25～26区にかけて検出された。20・22号住居跡の中間に位置し、3軒の住居跡群中、最も南に影り出ている。

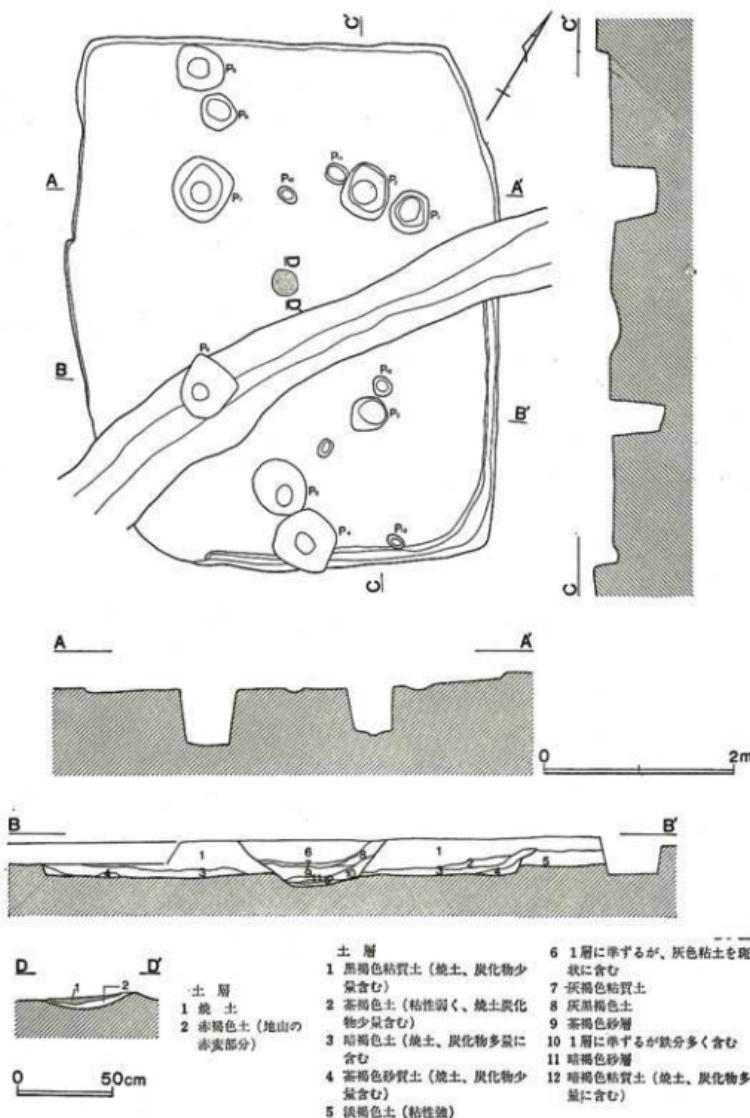
遺物は長径5.5m×短径4.5mの隅丸長方形を呈し、20号住居跡よりやや小型である。長軸はN—28°—Wを測る。住居跡は南西部から北東部に向かって第23号溝に切られている。

壁に沿って周溝が検出された。周溝は南西コーナー部分から東壁中央部まで他には認められない。幅20cm前後で、床面から5cm程度掘り込まれている。床面は固く踏みしめられており、柱穴P₁～P₆が検出された。主柱穴はP₂・P₃・P₄・P₇で、方形至は長方形の掘り方をもち長径55cm×短形50cmを測る。床面から45～60cm掘り込まれ、底面は皿状至は斜位に掘り込まれている。P₂・P₃に接してP₁・P₁₀が、更に南北両壁には、2個1対にP₄・P₅・P₈・P₉が掘り込まれている。

炉は径25cmの円形を呈し、皿状に掘り込まれ、焼土が薄く堆積し、周辺部は火熱を受け赤変している。遺物は南西コーナー側に集中し、床面から斐形土器（第86図1）が押しつぶれたような状態で出土した。



第79図 第21号住居跡遺物分布図



第80図 第21号住居跡

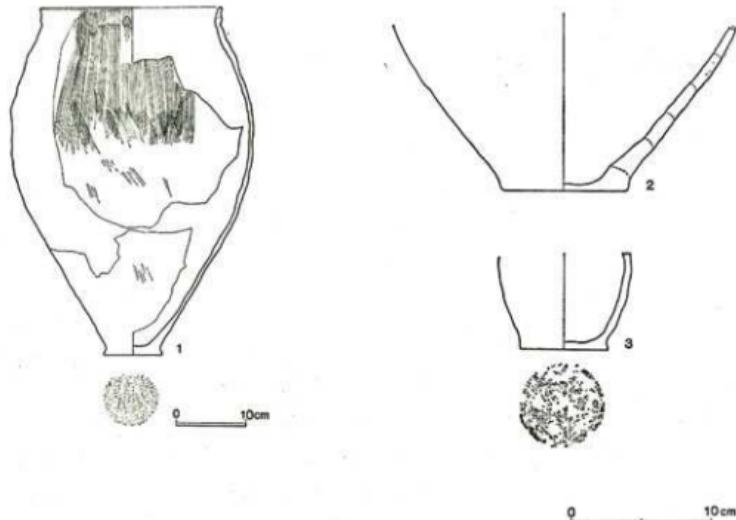
21号住居跡出土土器（第81～83図）

1は床面から押しつぶされたような状態で検出された。体中央部で大きな膨る變形を呈し、端部は外反気味となる。器面には口唇下より櫛齒状沈線文が施される。口唇下より体中位まで垂下し、底部より体中位まで施され、体中以下はヘラナデされ不明瞭となっている。口唇下に穴をもつ。底部は周辺部が膨厚し、網代圧痕を有する。口径26.5cm、器高50.6cm、最大径35cmを計る。黒色及至暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。

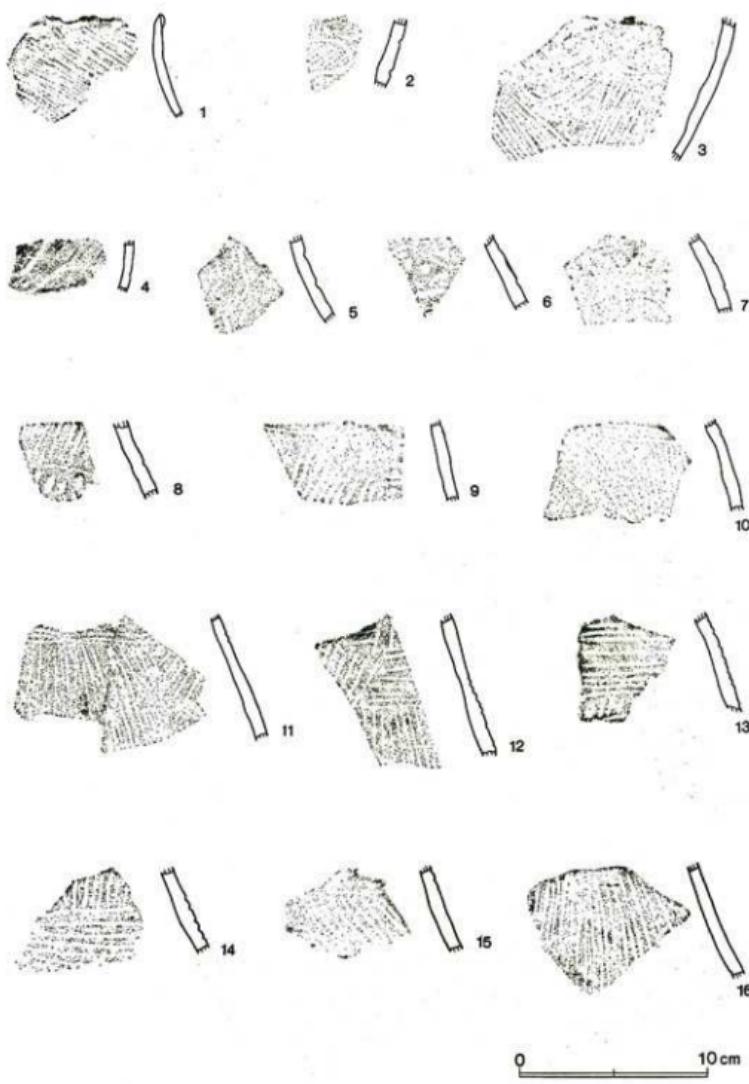
2は壺形土器底部と思われる。厚手のつくりで器内面には輪積み痕残る。器面は風化しており、整形は不明、底部には布目圧痕をもつが不明瞭である。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。

3は底部周辺が膨り出し、体部はゆるく立ち上がる。變形土器と思われる。底部には木葉痕をもつ。黒色及至暗黄色を呈し、砂粒多く含む。

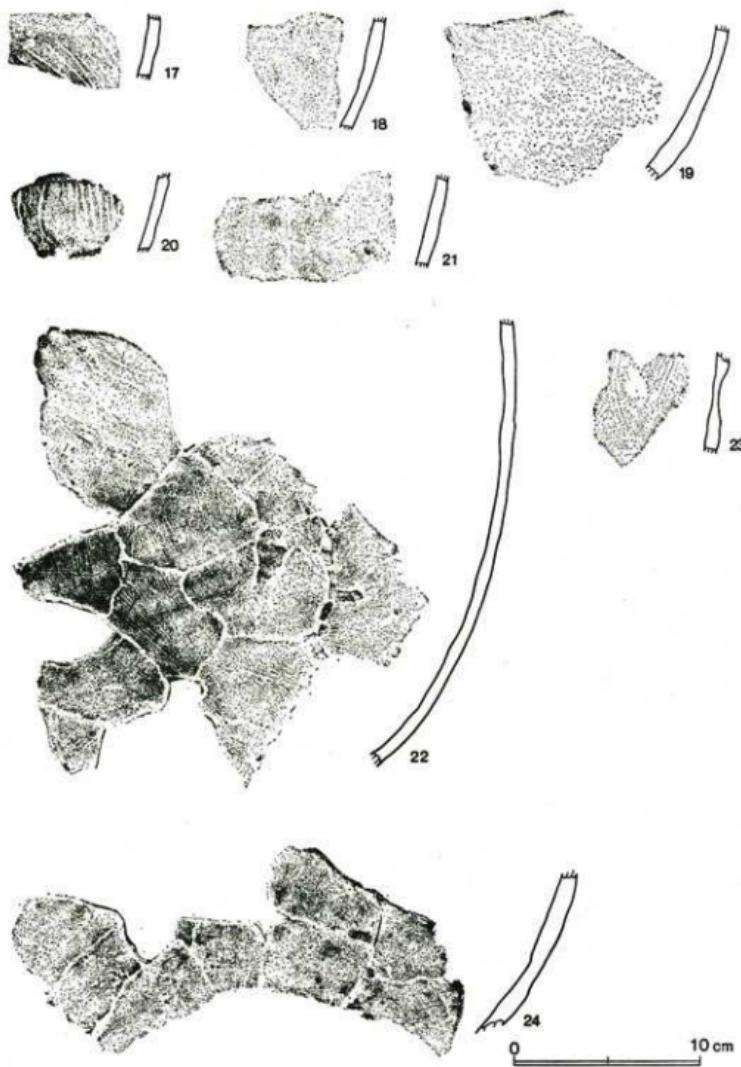
第87～88図に破片を図示した。1は小波状口縁を呈する變形土器口縁部で、口縁下より櫛状工具による粗い条線が斜位に施される。2は沈線で橢円区間を施し、区画内に原体LRの繩文が充填されている。3は複数の沈線で小波状文を描く。地文には原体Lの無筋繩文が粗く施されている。4～7は波状平行沈線をもつ。4は地文にLRの繩文をもつ。風化著しい。6は沈線間に刺突文をもつ。7は沈線に沿って三角形の刺突が加えられている。8～16は直線的な集合沈線によるモチーフをもつものを一括した。同一個体と思われるが、接合できないため全体のモチーフ構成は不明であるが、胸部上半までの破片と思われ、文様は三角形の区画文、及びそれを画する沈線とから成るものと思われ、壺形土器が想定される。



第81図 第21号住居跡出土遺物



第82圖 第21號住居跡出土遺物拓影



第83图 第21号住居跡出土遺物拓影

21号住居跡出土石器（第85～86図）

21号住居跡からは、打製石斧を中心に多くの石器が出土したが、全て覆土内からの出土である。

第85図4～第86図7は打製石斧である。1は20号住居跡出土第89図1と同様、刃部は球形を成し、先端部は薄い。自然面を持ち、裏面にのみ調整加工がみられる。基部を欠損しており全体の形状は不明。

第86図5～7は全て欠損品で、5・7は基部先端は丸味をもち、両側線とも長方形状を呈する。

共に自然面を有し、調整加工が裏面に集中する。6は基部、刃部共に欠損している。比較的薄く二次火熱を受けている。調整加工は片縁に集中して認められるが粗い。

8は薄い剥片の縁片部に細かな調整剥離が加えられている。剥片は大きく加工し、つまみ状に作出しており、形態から石包丁の可能性も考えられる。片縁は欠損している。

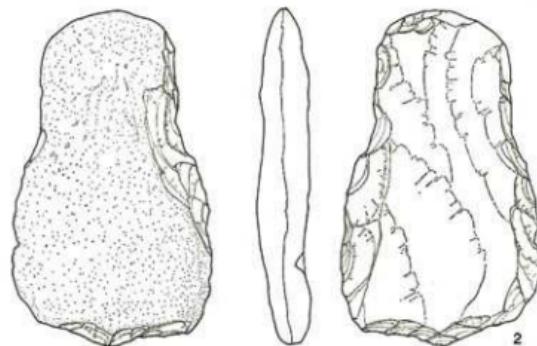
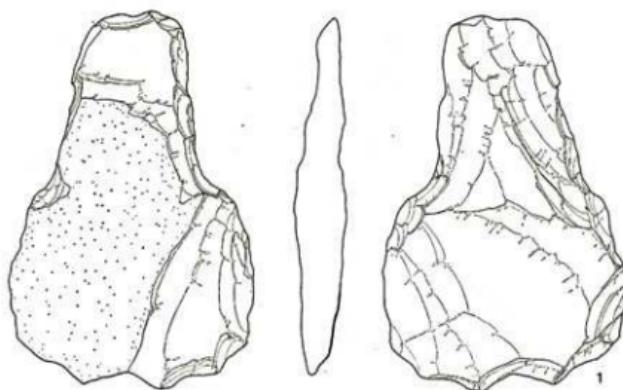
9～10は断面三角形を呈し、共に片面に自然面を残す。裏面には大きく剥離が加えられているが縁辺部の細調整は施されていない。表面に調整剥離は加えられない。チャート製で石核と思われる。

11は磨石と思われ、縁辺部に摩耗が顕著に残る。断面は橢円形を呈し、部分的に剥落している。

12は磨石と思われるが、片面に敲打痕が残る。全体に風化しており、摩耗痕は遺存状態が悪く観察できなかった。断面は橢円形を呈する。

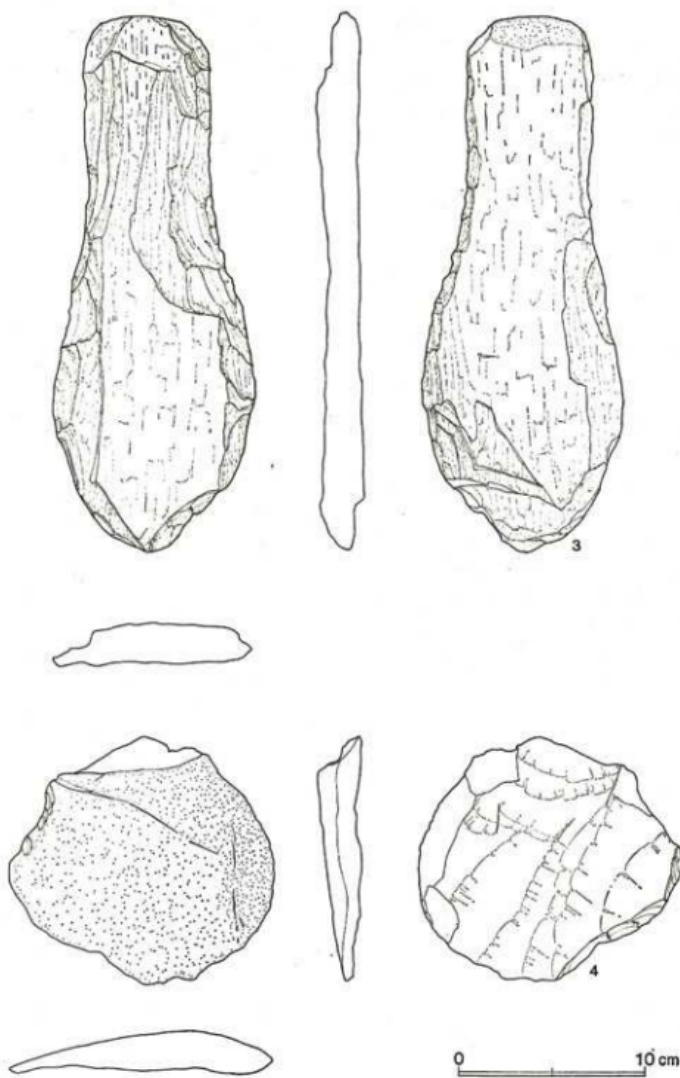
住居跡出土石器

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土地点 (住居跡)	備考
1	打製石斧	19.3	13.2	2.9	700	粘板岩	20号住	完
2	〃	18.0	10.7	2.9	680	〃	20号住	完
3	〃	29.2	10.9	2.3	990	結晶片岩	20号住	完
4	〃	17.2	14.5	2.3	455	ホルンフェルス	21号住	基部欠損
5	〃	9.8	6.0	2.4	180	砂岩	21号住	刃部欠損
6	〃	9.7	6.8	1.75	85	ホルンフェルス	〃	基部 刃部欠損
7	〃	8.2	7.6	2.4	80	砂岩	〃	基部 部欠損
8	石包丁？	5.3	8.1	1.1	43	粘板岩	〃	半欠
9	石核	8.6	11.7	4.2	425	リュウモン岩	〃	完

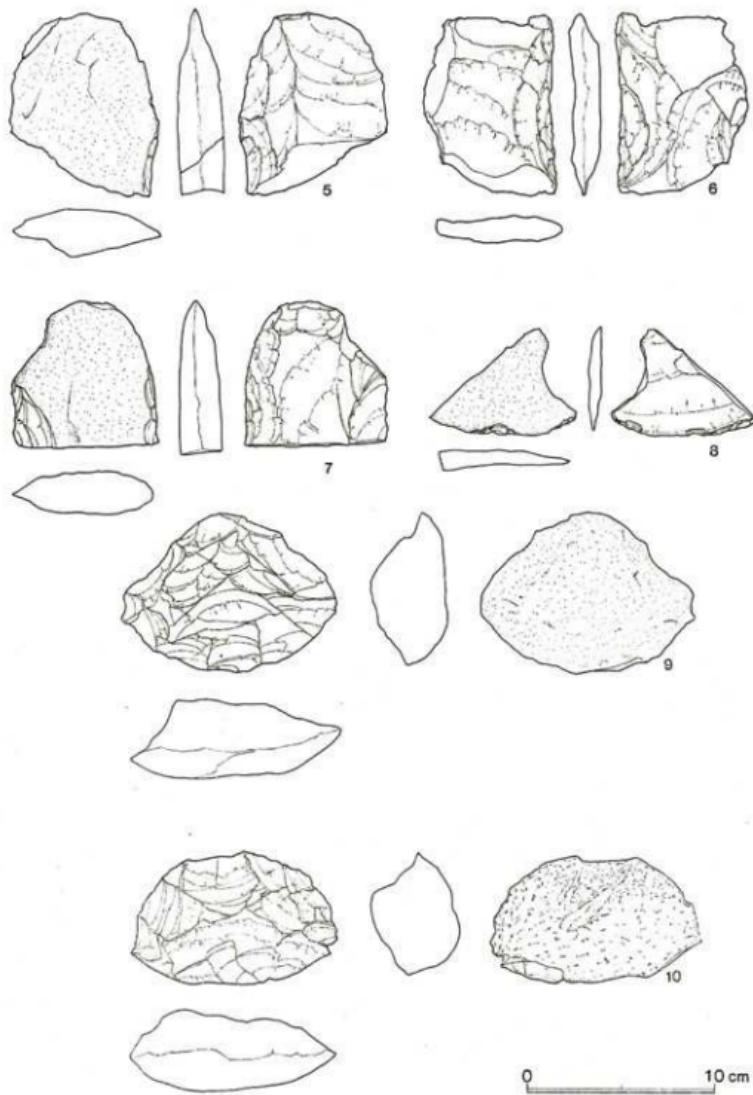


0 10 cm

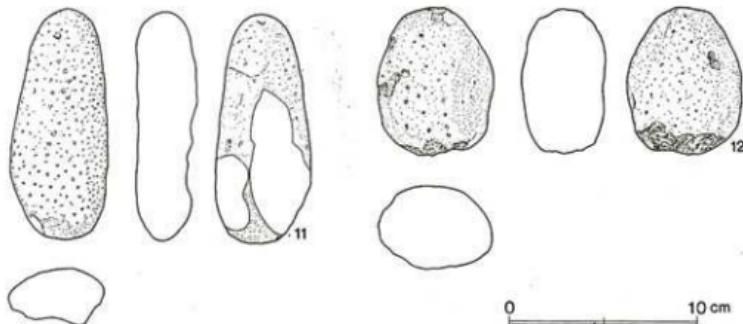
第84図 第20号住居跡出土石器



第85圖 第20・21號住居跡出土石器



第86図 第21号住居跡出土石器



第87図 第22号住居跡出土石器

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 構	出土遺構	備考
10	石核	6.7	11.3	4.9	410	チャート	✓	完
11	磨石	12.3	4.2	3.0	300	砂岩	✓	表面一部剥落
12	〃	7.9	6.2	4.5	330	板状岩	✓	端部後打痕

第22号住居跡（第88図）

第3調査区カ-26区で検出された。住居東南壁コーナー部分を第23号溝によって切られているほか、住居跡中央以北は調査区域外となっているため、全容は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと思われ、20・21号住居跡に比べ、小形である。床面は明確に把握することができなかった。また、本住居跡に伴なう柱穴も検出されなかった。遺物は覆土中より破片が若干出土した程度である。20、21号住居跡との近接性、及び住居形態から近接した時期の所産と思われる。

22号住居跡出土土器（第89図）

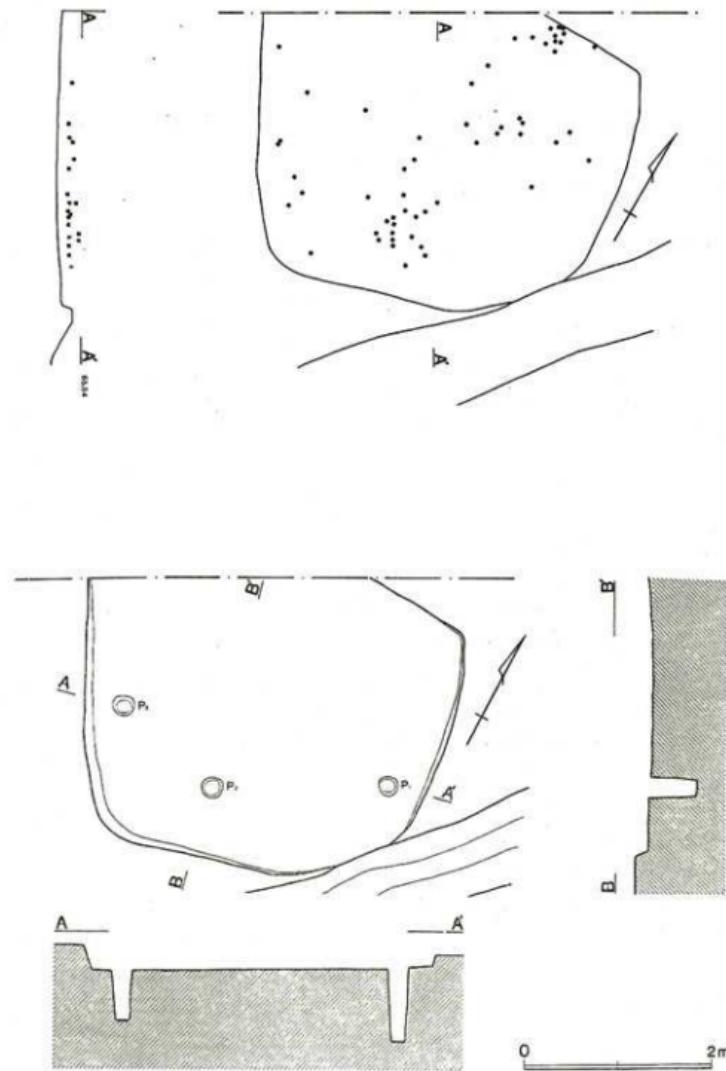
本址から出土した土器は全て破片で、覆土中から検出された。

第94図1～2、5は口縁部破片である。1は口縁下に貼付文をもち、貼付文に接して波状平行沈線が廻り、更にその下位に、単位の大きい波状平行沈線をもち、沈線間は棒状工具の刺突による矢羽根状沈線が充填されている。地文はLRの原体を横位回転しており、部分的に磨消されている。

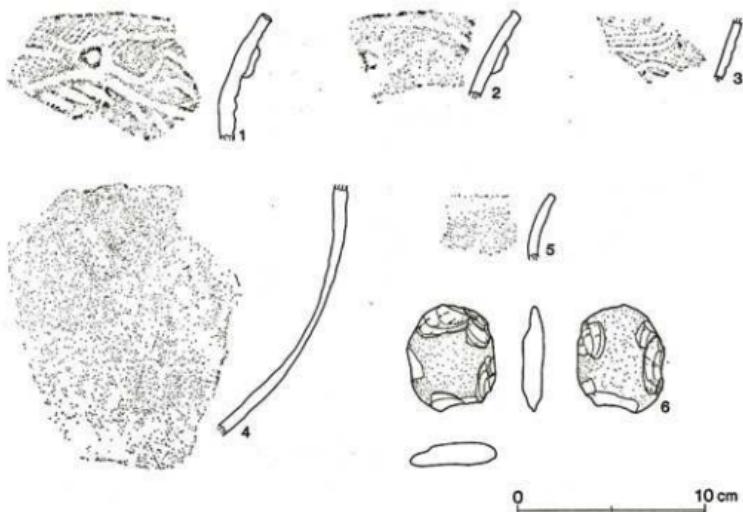
2は口縁下の貼付文に波状平行沈線文が連結する。地文はLRの横位回転繩文である。1・2とも口唇部に棒状工具が押捺され、小波状を呈する。共に砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。同一個体と思われる。

5は棒状工具の連続押捺による廉状文をもつ。工具幅は約1cmである。

3、4は脣部破片、3は原体Rの横回転、4は原体Lの斜位回転繩文を地文にもつ。4は器面が丁寧にナデられている。



第88図 第22号住居跡平面図・遺物分布図



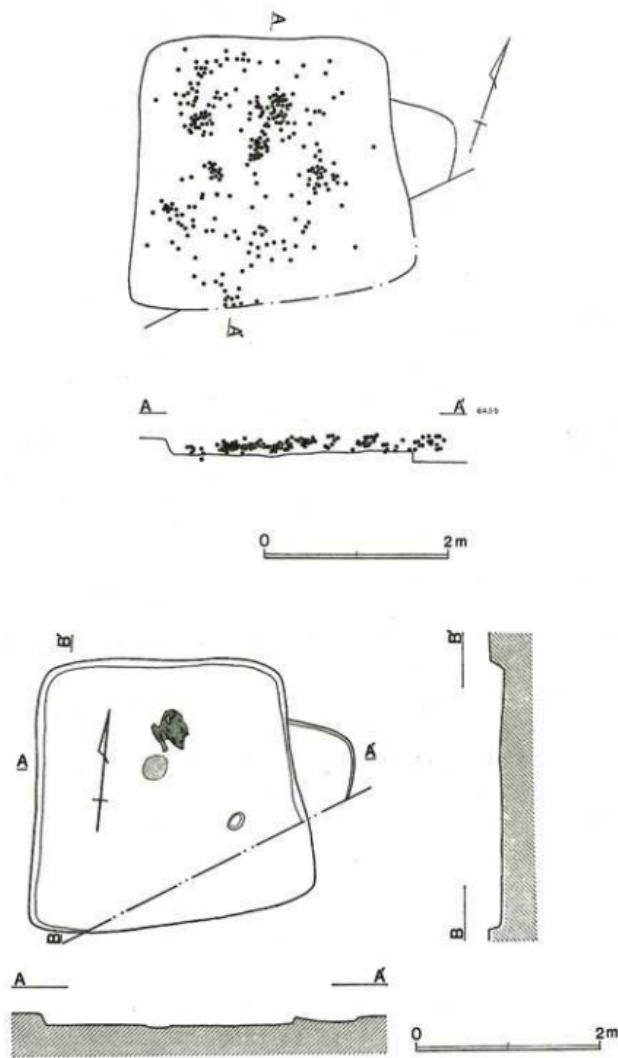
第89図 第22号住居跡出土遺物

第23号住居跡（第90～93図）

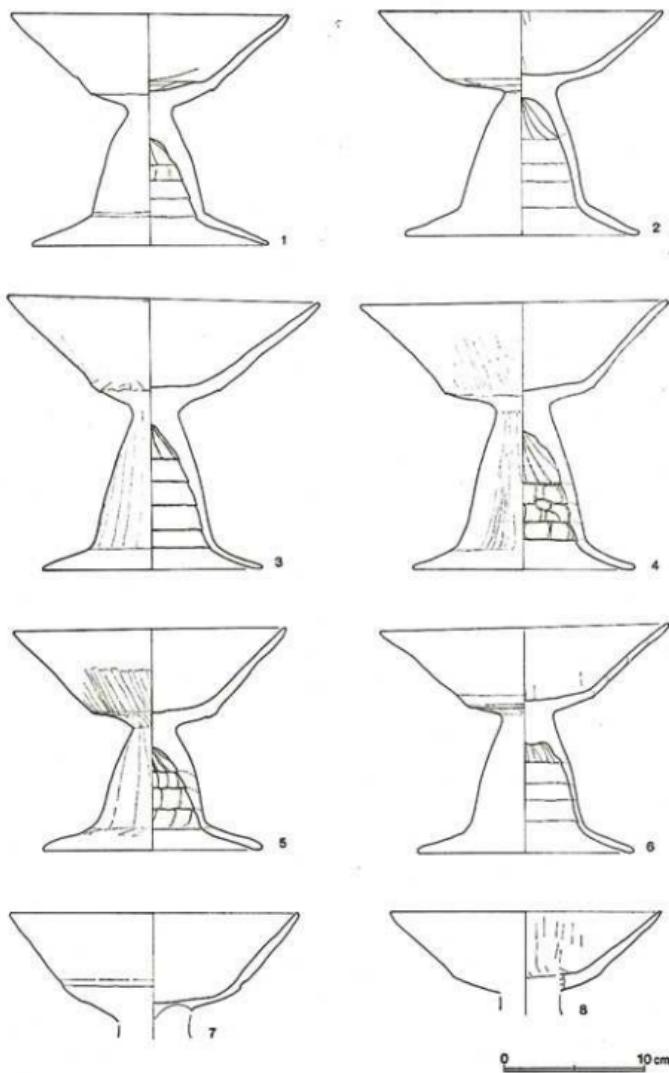
第4調査区ト—35区で検出された。本生呂跡は第4調査区調査に先立って、トレントによる土層観察を行った際に遺構南側で多量の遺物が出土し、確認された。

遺構は長径2.85m×短径2.5mで、東壁側が若干彫り出し、台形に近いプランを有するものと思われる。東壁側では浅い方形状の掘り込みがあり、重複か否か確認できなかった。

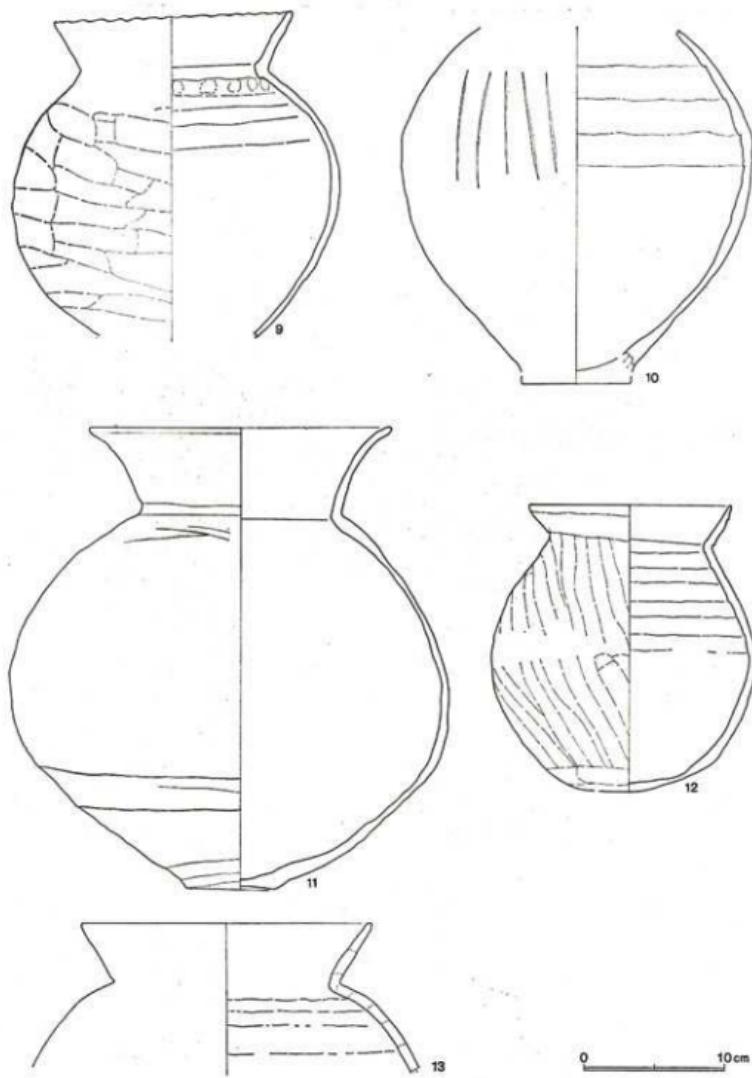
壁高は全体に15cm程度で、中央部から北側に偏って地表戸をもつ。炉は径25cmの不規則円形を呈し、浅薄く焼土が堆積していた。遺物は北西コーナー部から中央部にかけて高壇を中心として多量の遺物が投棄されたような状態で出土した。



第90図 第23号住居跡平面図・遺物分布図



第91図 第23号住居跡出土遺物

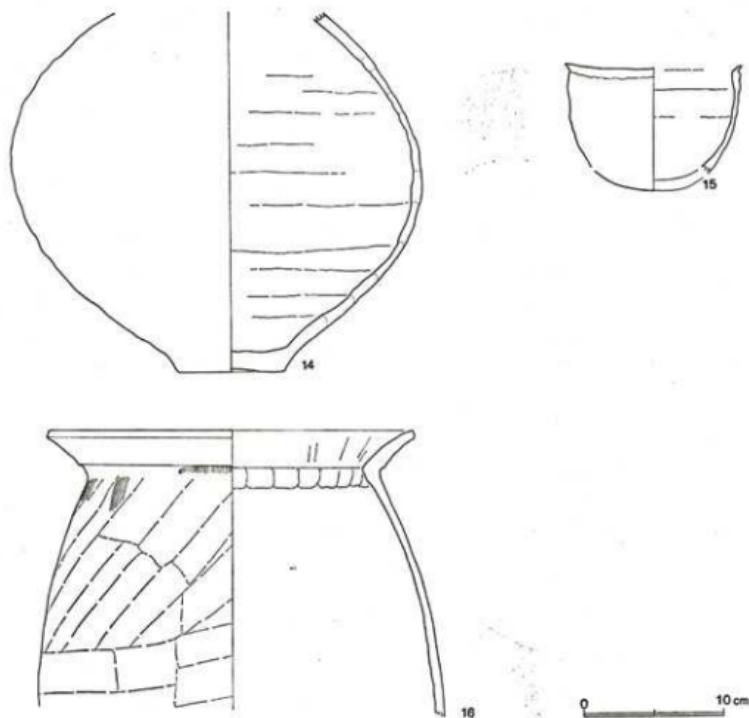


第92圖 第23号住居跡出土遺物

第23号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高 坯	1	口径 19.0 器高 16.4 底径 16.8	坏部立ち上がりに段をもち口縁は端部外反気味に開く。柱状部下端は太く据部は直線的に開く。暗褐色。砂粒細かく精選されてい る。	柱状部と坏部を接合。内面底部は粗いナデ、柱状部内側上端にシボリ痕、下半に輪積み痕残る。坏部内面及び外面上端はヨコナデ、他は丁寧なヘラミガキ。	口縁一部欠
高 坯	2	口径 20.3 器高 15.8 底径 16.7	坏部底部平坦で口縁は直線的に開く。柱状部は全体に太く、据部は直線的に開き、端部は外反気味となる。黄褐色。細砂含み精選された胎土。	坏底部は柱状部接合後周辺をへラケズリ。柱状部上端にシボリ痕、輪積み痕残す。器内面にヘラナデ痕残る。内面は丁寧なヨコナデ、器面はヘラナデ。	口縁部分欠
高 坯	3	口径 22.3 器高 19.2 底径 15.8	坏部は大きく中位で屈曲気味に開く。柱状部はやや細長く、据部は器内薄手で外反気味に開く。坏部は斜傾する。灰黄色。砂粒多。	坏内面～口縁端は丁寧なヨコナデ、柱状部内面上端シンボリ痕、輪積み痕残し粗くナデる。据内外面粗いヨコナデ、器面は全体にヘラナデ。	完
高 坯	4	口径 22.0 器高 19.0 底径 15.8	形態整う。坏部口縁は外反気味に開く。据部は短かく開く。	坏内面底部に柱状部接合時の凹凸残す。内面～口縁端部はヨコナデ、柱状部に広くシボリ痕残す。輪積み痕残し、指頭押圧加えられる。据内外面はナデ、器面はヘラナデ。	完
高 坯	5	口径 19.4 器高 15.6 底径 15.4	柱状部短かく端下太い。口縁は直屈気味に開く。据部は広く直線的に開き端部で肥厚。赤褐色。細砂多。	坏内面底径粗いナデ、凹凸顯著内面～口縁上端はヨコナデ。柱状部内面上端にシボリ痕、輪積み痕残し指頭押圧、据内外面ヨコナデ、器面はヘラナデ。	完
高 坯	6	口径 20.7 器高 16.0 底径 15.6	5に近い器形、器壁は比較的薄手口縁直線的に開く。柱状部太く据部は直線的に開く。赤褐色。細砂多。	坏部内面底部ヘラナデ。内面～口縁ヨコナデ。柱状部内面シボリ痕、輪積み痕残す。据部内外ヨコナデ、器面は粗いヘラナデ。	完
高 坯	7	口径 20.8 現存高 9.0	坏部立ち上がりに段をもち、口縁は中央部で膨厚し直線的に開く。坏部は深く底部周囲に輪積み痕残る。赤褐色。細砂多。	坏部内面底部は粗いナデ、器内面～坏部は外面はヨコナデ、坏底部に柱状部接合時の突起残る。	坏部のみ残
高 坯	8	口径 19.2 現存高 5.6	坏部は直線的に開き、口端は銳り気味となる。坏底部に最大厚有し内面にヘラナデ痕残る。	坏部内面ヘラナデ、外面は風化著るしく不明。	坏部のみ残
壹	9	口径 17.0	体部中位に最大径もち、層部で	体部内面は粗いナデ。口縁との	底部欠

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		現存高23.0 最大径23.8	くびれ、口縁は外反、口唇小波状呈する。内面に口縁接合痕、輪積み痕残る。	接合部に指頭おさえ残る。口縁内外はヨコナデ。体部外面はヘラケズリ後粗いナデ。	
壺	10	現存高24.8 最大径25.2	体部中位に最大径有する。器底にはヘラ先端による沈線が5条重下内面に輪積み痕顯著。器形は崩れている。明褐色。細砂多。	器面は丁寧にナデられている。内面は輪積み後、下半ナデ。上半には輪積み痕残す粗いナデ。	口縁部欠
壺	11	口径 21.6 器高 33.0 最大径31.5	体部中位に最大径もつ。肩部でくびれ口縁は外反気味に開き端部肥厚し屈曲気味となる。底径小さい。明黄褐色。砂粒多。	器内面は粗いヨコナデ。口縁内外は比較的丁寧なナデ、外面は体部ヘラケズリ後ナデ。底部周辺に斜方向のヘラケズリ。	完
壺	12	口径 14.4 器高 20.5 最大径18.9	丸底気味の底部より立ち上がり、体やや下半に最大径もつ。肩部でくびれ、口縁は短く内傾気味に立ち上がる。黒褐色。砂粒多。	体部内面下半粗いヨコナデ、上半は輪積み痕残る粗いナデ、口縁内外ヨコナデ、器面は斜位のヘラナデ、底部周辺に斜行するヘラケズリ痕残。	完
壺	13	口径 20.8 現存高10.6	最大径を体部にもつ。肩部でやや強くくびれ、口縁は強く外傾。輪積み痕顯著。暗黄褐色。砂粒多。	体部内面粗ナデ、口縁内外は比較的丁寧なヨコナデ。体部外面はヘラナデ。	胴下半欠
壺	14	現存高25.8 最大径29.5	体中央部に最大径持つ。輪積み痕顯著に残る。底部小さく中央部凹む。	器内面粗いヨコナデ、外面ヘラナデ。	口縁部欠
塊	15	口径 12.7 器高 8.9	底部よりゆるやかに立ち上がり、口縁は強く外反、端部鋭角で内面に棱をもつ。輪積み痕顯著。黒色砂粒多。	底部内外面粗いナデ、口縁内外横ナデ。	底部下半欠
甕	16	口径 25.2 現存高20.0	体中位よりゆるやかに内傾して立ち上がる。口縁は段をもち強く外反、厚み強く口端平坦、内面に棱をもつ。器面に木口状工具のハケ目残る。黄褐色。砂粒多。	体部内面ヨコナデ、口縁内外丁寧なナデ、体部は木口状工具によるナデ(ハケ目調整)後全体をヘラナデ。	胴下半欠



第93図 第23号住居跡出土遺物

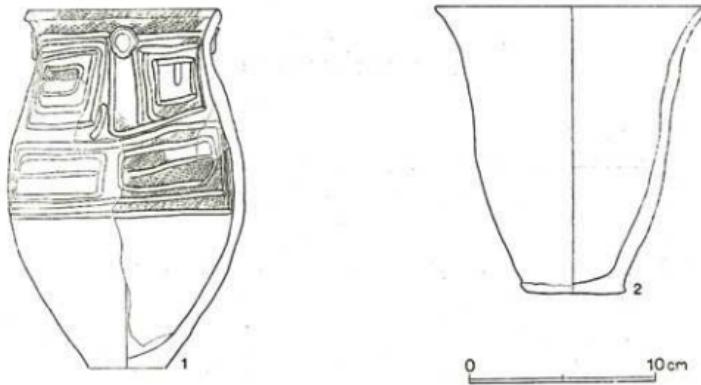
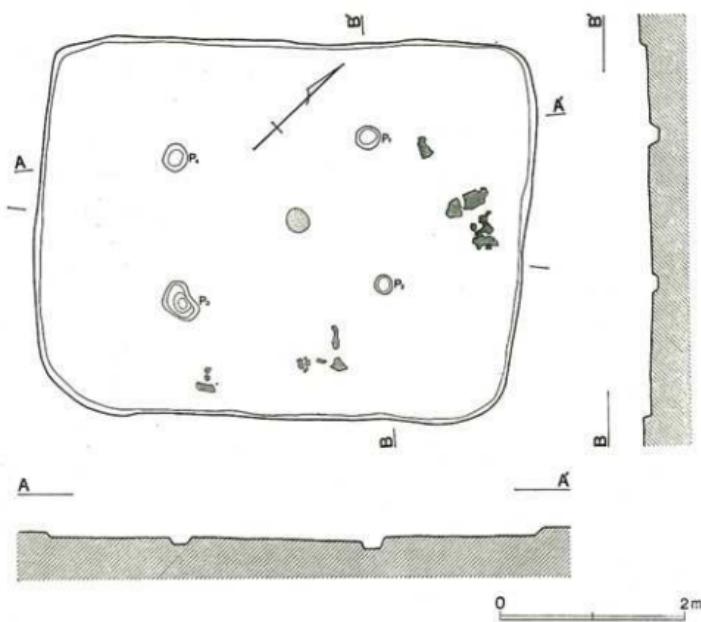
第24号住居跡（第94図）

第4調査区へ～ト—36～37区で検出された。長径5.4m×短径4.1mの隅丸長方形プランを呈する。壁高は5～7cm程度と全体に非常に浅く、床面は、地山が砂質であったため、良好な検出状態とは言えなかった。

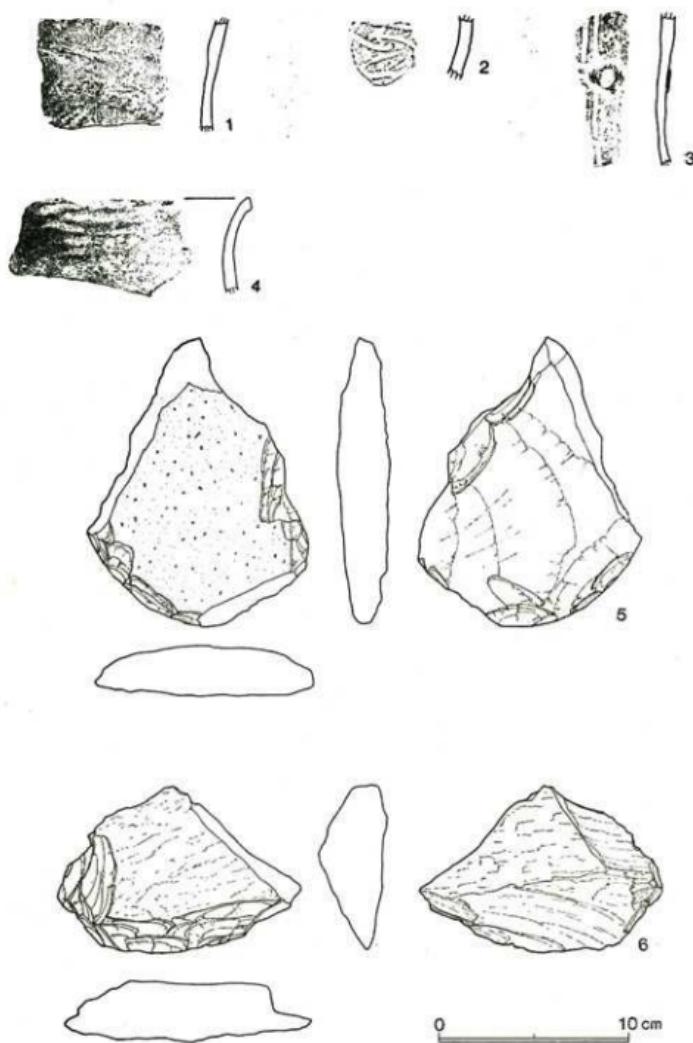
柱穴はP₁～P₄が確認された。P₁～P₃は円形を呈し、径はP₁=20cm、P₂・P₃=30cmを測る。深さは床面より10～15cmを測る。

柱穴は長軸2.3m×短軸1.6mをもって配列されている。長軸方向はN—42°—Eを測る。

遺物の出土は少なく、東壁側で2点の完形復元し得る個体と、若干の土器片、石器が出土したに過ぎない。住居跡中央部に地床炉をもつ、径23cmではほぼ円形を呈し、中央部に径約8cmの円形の窪みをもつ。覆土は焼土一層のみである。



第94図 第24号住居跡・出土遺物



第95图 第24号住居跡出土遺物

24号住居跡出土土器（第94～95図）

第94図1は口頭部ですぼまり、口端は外反気味に開く。口唇は鋭角で外削ぎ状を呈する。文様は太い沈線による直四角文を2段にわたって配列し、器面を4単位分割する貼付文は、沈線文を描出後に貼付されている。沈線描出は右コーナーで一旦止め、再び描出しており、モチーフの描き方はややアトランダムで画一性に欠ける。地文はLRの原体を横位回転しており、口唇上にも施されている。工程は成形→地文→沈線貼付文の順となる。主文様間は部分的に磨消されているほか、器面中位以下には、ヘラナデが加えられている。口径10.3cm、最大幅13.0cm、現存高18.4cm、黒色乃至黒褐色を呈し、砂粒多いが精選された胎土をもつ。

第94図2は無文壺形土器である。胴下半で彫り、直立気味に立ち上がる。口縁は大きく開く。底部周辺は彫り出している。外面は丁寧にヘラナデされており、底部周辺には指頭ナデが加えられている。口径14.8cm、器高15.5cm、暗黄褐色を呈し、砂粒多く含む。

第95図1はLRの横位回転繩文をもつ。2は第94図1と同一個体と思われる。3は貼付文に沿って沈線が垂下する。2、3ともに地文にLRの横位回転繩文をもつ。3は無文で壺の口縁部と思われる。口縁はゆるく外反し、端部は肥厚、鋭角をなす。器面は丁寧にナデられている。

24号住居跡出土石器（第95図）

本址からは2点の石器が出土している。いずれも覆土中から検出された。

第95図5～6とも打製石斧刃部破片である。5は自然面を残し、裏面より縁辺部に粗く細調整を加えている。刃部は丸味をもち、縁辺部とともに摩耗、截打痕は観察されない。5、6ともに刃部が著しく丸味をもち、直線的な基部をもつ、所謂歎形石斧と呼唱される一群であろう。

24号住居跡出土石器

図版	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土遺構	備考
1	打製石斧	15.3	12.0	2.7	545	ホルンフェルス	24号住	基部欠損
2	〃	8.9	13.1	3.4	365	粘板岩	〃	〃

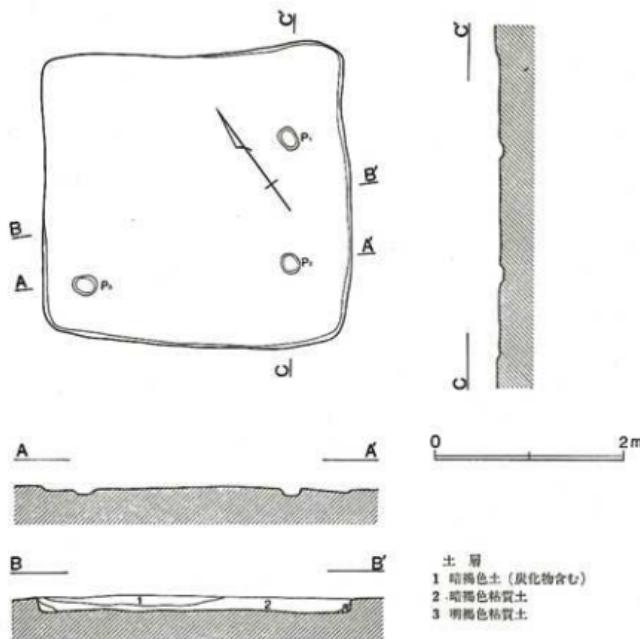
25号住居跡（第96図）

第5号調査区ニ～ホー40～41区で検出された。第26号住居跡に近接し、造構北西コーナー部分は造構確認のトレンチによって欠失している。

造構は暗黒褐色粘質土中に掘り込まれており、覆土も同様の色調で、砂粒混じりの土層1層からなっている。形状は1辺約3.2mの方形プランを呈し、壁高はベルト部分で10～15cmを測るに過ぎない。

床面は不明瞭であったが、柱穴はP1～P4までが確認された。いずれも円形プランを呈し、床面から7～8cm程度掘り込まれている。北西コーナー部分では柱穴は確認できなかった。

本住居跡から出土した遺物は全て細片で、図示し得る資料は得られなかった。



第96図 第25号住居跡

第26号住居跡（第97～99図）

第5調査区西端—40～41区で検出された。第25号住居跡に近接する。

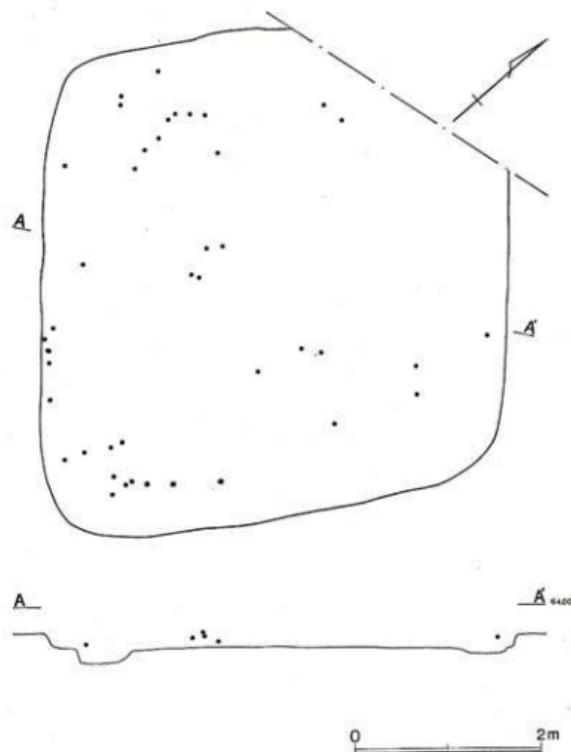
住居跡は一辺が5.1m前後の菱形に近い隅丸方形プランを呈する。北東コーナー部分は一部調査区域外となっている。

柱穴はP₁～P₄が検出された。径はP₁が長径58cm×短径43cmの橢円形を呈し、P₂～P₄は径35～40cmの円形をなす。床面からの深さは、P₁=30cm、P₂=18cm、P₃=45cm、P₄=35cmをはかる。

柱穴P₃・P₄のはば中間東寄りに地床炉が検出された。長径43cm×短径35cmの長楕円形を呈し、中央部が円形に一段深く掘り込まれている。覆土は焼土1層のみであった。

床面下の精査によって、住居跡掘り方を検出した。壁に沿って、幅45～60cm、床面から深さ10～15cmの溝があぐり、南東コーナー、北西コーナー部分で切れている。西南コーナー部分では、壁寄りに長径62cm×短径44cm、深さ約20cmの不整円形の浅い掘り込み(P₅)が検出された。

覆土は4層から成り、周溝状の掘り方上面は貼り床されている。遺物は出土量が少なく、全体に散漫でいづれも覆土内からの出土である。



第97図 第26号住居跡遺物分布図

第26号住居跡出土土器

器種	番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 17.3 器高 21.0 底径 3.0 最大 20.8	体部は丸味をもって立ち上がり 肩部ですぼまる。口縁は中位で肥 なし強く開く。薄手、暗褐色。底 径極めて小さい。砂粒多。	器内面、口縁内外は丁寧なナデ、 体部外面は不整方行に粗いハケ目 調整。底部周辺は粗いヘラケズリ 残る。	完
甕	2	口径 14.5 器高 19.8 底径 2.8 最大 19.4	体やや下半で最大径有し、肩部 でゆるくすぼまる。口縁は直線的 に開く。内面肥厚。暗褐色。砂粒 多。	内面底部周辺へラナデ。内面ナ デロ縁内外ヨコナデ。外面体部は 継ぎのハケ目調整後。中位以下へ ラナデ。底部周辺へラケズリ。	完